
赤き殲滅者

こんこん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤き殲滅者

【Nコード】

N8438I

【作者名】

こんこん

【あらすじ】

月夜灯は世界中に散らばる様々な異能力者から国を護る役職を担う存在だった。

ある日、国の政治家が次々と干からびて死ぬという事件が勃発。

その手口から異能力者の仕業だと判断する一人の政治家が、灯に犯人探しを依頼した。

犯人を追う灯をよそ目に犯行は続けられてなかなか尻尾が掴めない。

そんな中で警察特別室に在籍する佐藤京香が捜査の協力を当てられ、一緒に調べることになる。そして調べる内に単純な殺しではなく背

景には何かがあることが分かってくる。
この国最古の組織とも言われる八鬼の唐津紅蓮もこの事件に絡み、
灯とは別に行動をしていた。

1話

世界は人の見えないところで動いていた。大概の人間は世界が大きく動く現場に立ち会えない。寧ろ、終わった後に気がつくか、そんなことも知らないまま日常を過ごしてしまう。

非日常に生きる者にとっては、そんな体験できないことを間近で見ることまでできる。

ただ…自らの命を賭す覚悟がなければそれも叶わない。環境は人によって様々で、何も起こらない世界の者もいれば、世界を変える出来事に身をおかなくてはならないものもいる。

定めという一言で済ませてしまえば、単純なのだが現実はその簡単なものではない。

ここにも一人、世界の動向に大きく関わる者がいた。

名は月夜灯つきやあかしと言う。年齢は三十二歳で年相応には見えるだろう。

細身でシャープなラインは高身長というせいもあってすっきりして見える。

しかし決してがりがりという訳ではない。自らが動くのに負担のない筋肉をそれなりにつけていた。

絞り込まれた肉体は雰囲気にも出るもので、ただいるだけで、威圧感を与えるようだった。

服装はダークスーツを着こなしている。が…髪はぼさぼさ、無精ひげも生えていたので、どこか気の抜けた感じにはなっていた。

お気に入りの煙草を取り出すと、さっそく口に運んでマッチを擦って火をつける。ちりちりと灰が焼ける音が響くほど、ここには音がしなかった。

灯がいた場所は誰もいない広い接客室だった。

そこに存在する家具、装飾品、アンティーク等を見ただけでも普通の場所ではないことは明らかだった。灯はそんな部屋の一部にも思える高そうな大きなソファアームに腰掛け、人を待っていた。

その人物は忙しいらしく、分単位に動かなくてはならない時間の合間を縫って駆け足でやってきた。

「いや…済まない。お待たせしたようだ」

入ってきたのは二人の男で、官僚の人間と秘書といった関係だった。

「すぐに行かなくてはならなくなつたんだ。だから申し訳ないが…」

小太りのはげ掛けたその男は、自分は忙しいから詳しい話を秘書に話を聞いてもらえないだろうか？とほんの数分顔見せをするだけで、そのままそくささといなくなってしまった。

灯も何が起こっているのが理解できずに、ばたばたといなくなる男の背中を呆然と見ていることしかできなかつた。二人になつてしまったこの部屋は妙な静けさが流れる。

秘書の男も気まずそうに、こほんと軽い咳払いをしていた。

「え…と…その…お話してもよろしいですか？」

そんな断りをいれたが、灯はいちいち返答するもの面倒だと黙っていた。

「まず…あなたが本物の月夜灯さんかどうかの確認からいいですか？」

そんなことを口にしたので、灯はそんなことは前もってやってほしいと思っていた。検査だの質問だのそういった類は好きではなかった。

「簡単に済むのかい？」

「はい…質問をするだけです。手短に済ませますので、どうかご辛抱をなさってくださいませんか？」

そこまで丁寧に話されると断る気にもなれなく、大人しく従うことにした。

「まずは…あなたの神徒協会認識コードを教えてください。我々が聞いている物と同じかどうか確認します」

「10356482991だ」

「よろしいです。それでは、次にあなたに送られた手紙の切手の模様を覚えていますか？」

「ああ…確か烏と日本刀が描かれていたはずだ。金の縁取りでな…」

「いいでしょう。あなたは本物のようです」

「その尋問に何の意味が？成りすましてもいるのか？」

「ええ…その通りです。あなたのように国の警護を単独で担当する方はいません。その肩書きは絶大です。だからこそそんな肩書きを利用して悪意を働く者も数名いましたよ」

そんな小物に何ができるのかは知らなかったが、金でも踏んだくろうという魂胆なのは薄々予想ができていた。

「そうかい…それなら仕方がないな。しかし俺の名前を語るとはい度胸だ…逆に感心してしまう」

灯が話すとそんな自信に満ちた発言も嘘のようになくなる。

2話

「私から個人的な質問もよろしいですか？」

「何だい？」

「神徒協会なるものは何ですか？謎が多すぎて誰も把握していないのです…依頼主である私の上司も言われるがままにあなたをおよびしたらしいです」

秘書の男は興味本位で聞いたらしいが、灯がその答えをすんなりと話すわけもなく、黙っていた。

「やはり…答えてはくれませんか…それはそうですね。私も詮索しすぎました。すいません。あなたは任されたことだけをすればいいのですから…」

余計なことを話してしまったと、男も反省しながら、懐から一枚の封筒を取り出した。

「これに依頼内容が書かれています。ここには国家規模のテロと思える内容が書かれています。ですので、慎重に行動をなさるようお願いいたします。この内容を知っているのはこの国の上層部の人間だけです。口外なすることはないと思いますが、念のために…釘を刺させてもらいました」

その封筒を受け取ると、灯は内ポケットにしまった。これ以上の追求もなかったので、そのまま部屋を出て大きな館を後にした。

この星には裏から世界を支える組織が存在した。

名前は神徒協会といい、神の使徒に自らがなり変わり世界の安定を取り持つという意味があった。そんな大それた名前の組織が発足された理由は、世界を脅かすあらゆる物の排除が目的だった。

人の力、それ以外の力で働く脅威から世界を守る。そんな信念の元で結束されたこの協会は歴史も長く、千年前から存在していたので国との繋がりも深かった。積み上げた功績も表ざたにはならないが、確実に世界の脅威を排除していたのだ。表向きは宗教団体で信者もたくさんいた。

不可思議な力を持つ者たちが多く所属するその団体は憧れの存在でもあった。そして護門徒というものが神徒協会から派遣された国防を任された者たちだった。世界全体を一箇所で掌握するのは難しい。だから能力が高く選ばれたものが協会幹部の代行者として世界各国に飛ばされた。その土地によって警護する機関は多数存在するが、護門徒はそれらの機関が成しえないことができた。

特異体質の集団と話してしまうと分かりやすいが、そんな簡単な言葉では片付けられないほどの実績があった。国を脅かそうと…世界を変えようとした愚か者には死という形で分かせていた。いわば、月夜灯もその中のエリートだったからこそ、世界各国数名しかいないといわれる護門徒を任された。殺伐とした世界ではあったが、世界を救えるという淡い希望があったからこそ続けられていた。

そうでなければ、力を振るって暴挙に出ていたのかもしれない。
力とはそういうものだ。

灯は帰り際の公園で一息つくことにした。

季節は冬を迎えようとしていた。肌を突き刺すような冷たい風が
体を吹き抜ける。誰もいない公園のベンチに腰を下ろすと、灯は煙
草に火をつけた。白い息と共に煙も吐き出され、灰色の世界に赤い
火が灯っていた。

短い時間ではあったが、依頼を受けて人と会うのは久しぶりなの
で疲れてもいた。だから面倒くさそうに依頼内要の書かれた封筒を
取り出した。

びりびりと無造作に破ると中身の手紙を読んだ。

『先月から今月にかけて、数人の政治家が謎の死をとげた。事実こそ
公にはなっていないが、明らかな国家に対抗する反逆とも捉えられ
るように死体を飾っていた。』

犯人からの犯行声明もなければ、金額要求もない。これが意味す
ることは、目的が完遂するまでこの殺人が終わらないということ……
このことによつて世の中に大きな混乱は見られないがそれも時間の
問題である。

各機関を代表する人物が順番に殺されることで警戒心は募り、仕
事どころでもなくなる。機関内での人間不信と恐怖心は計り知れな
いものまで膨れ上がってきている。

内部とも外部ともどちらからも取れるような犯行であるため警察

機関も対応しきれしていない。そして何よりもその死体は異常だ。まるで枯れ木にでもなってしまったかのように全員が萎れてしまっていた。決して人間の手では不可能である。

そう判断したため、この国の最高警護の砦である月夜灯、あなたに任を移すことになる。世界平定協約を発足した神徒協会にもその旨は伝えてあり承諾も得ているので、これは任意ではない』

手紙を折りたたむと懐に再び戻した。

この手の依頼は珍しいと灯は思っていた。灯はここ十年近くこの任についていたが、ここまで大きな出来事には出会ったことがなかった。せいぜい恐喝まがいのテロ集団だったり、頭のいかれた殺人鬼が数年に一度出没するぐらいだった。世界が動けば動くほど犯罪者の質も変わっていく。それは知っていた。残忍さも増せば、頭腦的にも優れてくる。

灯には特異な能力があるのだが、この広い世界どこかを探せばそんな者もごろごろしている。きつと強大な力を持つ能力者も中には息を潜めているかもしれない…そういうことを想定していたのだから、自分の存在があるのだとも思っていた。

やれやれ…

煙草を捨てて足でもみ消すと、これからどうするかを考えた。

3話

全世界に点在する灯のような存在の者は、死が確立しないとその任からは解かれることはなかった。そして本部である神徒協会も全信頼を預けて彼らに国の警護を任せているので、細かい連絡も出向くことも不要だった。要するに自分たちでどうにかしろということなのである。

放任主義もここまでくれば、危うくないのかという不安にも駆られそうだが、灯は気にしていなかった。幼い頃に飛行機事故で両親を亡くした時自分を拾ってくれたのが神徒協会だったからだ。親代わりの彼らの気持ちは良く分かり、考え方も知っていた。

絶大の信頼がなければ詮索もしないで野放しという行為もできない。もしも国を護る側の人間が反逆でも起こしたらそれこそ責任問題だ。各国と、結んでいた世界平定協約も水泡へと返る。そんな親不孝なことをするつもりもなければ、彼らの期待に応えることのほうをまず第一に優先する。だから今回の事件に対して投げやりな気持ちではない。早く解決することを何よりも望んでいた。

灯はその容姿からもぶつきらぼうのように見えてしまう。そして感情の起伏もあまりなかった。先の話でもあった飛行機事故の影響で感情のコントロールが難しくなってしまったことが一つの要因に挙げられる。だからそのせいで恐怖心というものは取り除かれた。

戦う者に恐怖心は大事である。危険信号を感じ取る能力が欠如してしまうと、無謀な行為でも平然と行ってしまう。それは、あつさりと命を落としてしまうことがあるということだ。踏み込める強さの代償であるが、そんな身に潜む危険を灯は自分の武器とも思っ

いた。計算高い人間に取って彼の行動は予測がつかないからだ。

何度か死の危機に直面したこともあるが、それも彼の身体能力で掻い潜り逆の結末を相手に与えていた。死を毎日の中に置いている姿勢は常に健在で、暗殺されることも想定していた。依頼内容を読んだ時から別々に彼の心は動かなかつた。やれといわれたことを完遂しようとは何も変わらない生活スタイルの一部にか思っていないかつた。とりあえず、どんな状況で殺されているのかを知りたかつたので、死体が安置してある大学病院へと訪れた。

灯は護門徒という職業柄あらゆる機関に顔が利いた。別に身分証などがあるわけではない。紹介状を持っていけばそれで全てが片付くのだ。紹介状を書いているのは、この国のトップの人間の名前で、紹介内容も全面的にこの者に協力するようにと書かれている。

流石に詐欺なのではないかと、疑って問い合わせた者もいるが、その度に目を丸くして対応を変える者が多かつた。だからどんな対応にも慣れてはいた。

予想通りに受付の人間は不振に思っ、遺体担当者に連絡をした。しかしその担当者は灯のことを知っていた。だから煩わしいこともなくすんなりと通された。

「やあ…久しぶりです」

現れたのはこの病院でもそれなりに権威のある男だつた。年も灯よりもずっと上だつたが、何故か敬語で話していた。

そんな態度にも灯は自分のスタイルを変えることなく、例の遺体を見せて欲しいと話した。すると男は助手などを追い払ってその部

屋に案内した。

遺体安置所。

冷たく重みのあるそのドアの向こうに殺された者の遺体が一体だけあった。殺された人数は五人だった。それが全てここに存在するわけではなく、火葬されたものもあった。

「分かっているとは思いますが、秘密厳守でお願いします」

「ええ…そのつもりです」

自動でそのドアが開かれると部屋の中央に白い布が掛けられた遺体があった。ぱっと見た瞬間に灯が思ったのは、小さいの一言だった。

成人男性ならもう少し大きさがあってもいいはずだと脳裏に浮かんだ。

医者の方がその布をさっと取ると、そこにあつたものはミイラだった。体内の水分が全て抜けて、縮まっていたので小さく感じた。

「干からびたのですか？」

「一瞬でね…だから私たちも分からないんです。どうやったらこんな状態にできるのか。成人の体内水分は三分の二を占めます。それを短時間で抜き取る作業は無理です。抜き取った跡もないのですから…」

「短時間というのはどうして？」

「この人の最後を見られた方の証言からです。ほんの数分席を外して、発見された時にこうなっていたらしいです」

「場所は？」

「トイレの中だったらいいです。そこから考えてもほんの数分…下手すれば数秒でやってしまったということなんです」

明らかに能力者の仕業であると灯は考えていた。しかしどんな能力かは想像もつかない。

現時点では自分のような特異な力を持つ者が暗躍しているということだけだ。

「全部で五人なんですね…全員政治関係者ですか？」

「ええ…各省庁の大物です。彼らが死んだことで一部麻痺している機関も存在しています。そしてまずいことは、殺された場所が全て省内であるということです。トイレ、廊下、部屋とすぐに見つかる場所に変な格好をさせられて…」

「変な格好？」

「亡くなった者の服には太陽のマークのようなものが大きく描かれていたんです。白いペンキで…そこからも分かると思いますが、目的があるということです。そして狭い省内で行うことで中の人間に疑心暗鬼が生まれます」

こんな人間技とも思えない犯行を目の前で行われれば、誰もが得体の知れない恐怖を抱く。それが混乱の序曲だとも言わんばかりに死体を晒すということはそれだけ意味があるのだ。しかも丁寧に

記号まで残しているとなれば、偶然では済まされない。灯は遺体をくまなく調べてみたが、怪しいところは何もなかった。外傷が全く見受けられない遺体は手がかりを残してはくれなかったのだ。

そんな中で医者の方の携帯が鳴った。すぐに通話ボタンを押すと電話の主と険しい面持ちで話していた。灯はこれ以上ここにいて自分が邪魔になってしまうと思って気を利かせ部屋を出ようとした。すると、その足を止められた。

「六人目の犠牲者です。今度は干からびた状態で部屋の壁に張り付けてあったそうです」

「え？」

4話

世界には不可解な能力を持つものが数え切れないくらい存在した。

その原因の一つに考えられたのが、突発性進化遺伝子というものだった。用は人がいきなり原因不明の進化を遂げる。超能力だった。体の部位を変化させたり、根拠のない力を持つことだった。そんな遺伝子を持つ者はいつどこで生まれるか分からなかった。その確率も万分の一に等しく、人を脅かすまでの力を得るものはそう多くなかった。

突発性進化遺伝子のできる要因は大気中に含まれる「時の雫」が第一と考えていた。

時の雫は星の時間軸を安定に保つもので鉱物としてこの星の地底深くに存在していた。しかしそれが大気中に流れ込むこともしばしばあり、偶然にもその大気を吸ってしまった人間の子どもはそういった異能の人間になっていた。

時間ということに大きく関わる時の雫は、人間の体の時間までも変えてしまう効果があったのだ。人の遺伝子の進化をすつとばしてしまうこの厄介な代物から生まれた産物は正に偶然の中でしか生まれないのだ。神徒協会はそういった類の研究もしていたので、いざれ訪れる世界恐慌の要因になり兼ねないものとして警戒していた。異能力は諸刃の剣だった。その者の考え方次第で、善にもなれば悪にもなる。だから見守ることも抑制することも必要だと判断した。

「この世界にはお前のような変わった力を持つ者が存在する。しかしお前はそんなものに負けない力を持っている」

灯は十代の頃に神徒協会の重役にそんな話を聞かされた。

「悪意のある能力者というのは、必ず驕りがあるものだ。自分は強い。他の人間とは違う。選ばれた人間だ。と…だから付け入る隙もあるものだ。そしてお前はそんな驕りを払拭させるだけの精神力がある」

「精神力？」

「ああ…心が強いということだ。これはどんな力にも負けない力だ。いくら強大な力を持っていようが、冷静さを失ったらそれまでだ。平常心で常に戦える…そんな者が最後まで戦いという場で最後まで立っていられる」

戦うことを昔から無理やり叩き込まれていた灯にとって、戦いというのは自分の日常にもなっていた。そんな精神力の強さは日々の訓練の賜物とも思えるが、灯はそんな境遇に身を突然置かれても、受け入れることを選んでいた。だからどんな苛酷な状況でも耐えてきたのだ。

「呆れるぐらいに芯の強い男だ…」

対峙するものに何度もその言葉を吐き出させた。幾度となく繰り返された戦いの中で、敗戦を喫することはなく灯の評価は絶大のものとなっていたのだ。

十三歳の起こった時に飛行機事故後、彼は神徒協会で数年を濃厚な時間として過ごし、そして二十歳を過ぎる頃には現在の職務に就いていたのだ。神徒協会の意志を継ぐものとして信頼も確かなもの

だった。まるで機械を思わせるような男であったが、そんなことはなかった。彼も十数年ここで過ごすことで多少心境も変化していた。

そのきっかけを作ったのは、山で偶然にも拾った子どものせいかもしれない。数年前に偶発的に起こった不可思議な自然現象。それを止めるべくして山へと入り込んだ灯だったが、その後そこにいたのは一人の子どもだった。そして身よりもないその子どもを灯は連れて帰ったのだ。人の一生は長く心も年と共に常に変化する。もしも灯が冷徹な機械のような心を持っていたのなら、きっと山で見つけた子どもをほっといただろう。

それから灯は変わった。殺伐とした世界を人生の半分以上歩んできたが、子どもの未来を見据える考え方に変わっていったのだ。

このままではいけない。子どもの未来を見て生きなくてはならない。

自然と湧き上がる使命感のようなものに引かれて成すがままに動いた。

神徒協会という世界的組織に固執するのではなく、いろんな組織と関係を持ち互いに意識を共有できるようにしようと動いたのだ。それは敵味方わけ隔てなく行われ、何度となく追い返されることもあった。しかし灯は、子どもの将来を考えて模索し、理想論で終わるのでなく少しずつ前へと進んでいた。

「お父さん…今日も遅いの？」

七歳になる月夜灯の息子、月夜海は夜中に出ようとしていた父親の背中を見てそう話した。

「ああ…済まないな。いつも一緒にいれなくて」

済まなそうに謝るが息子は別に父親を困らせようなど思っていない。なかつた。父親のことが好きで、心配だったのだ。何をしているのかは分からないが、決して無理だけはしないで欲しいと幼いながらに願っていた。

「そう、心配そうな顔をするな…朝には帰ってくるから、明日は一緒に出かけよう」

「本当？」

「約束だ。海の好きなところに連れて行ってやるよ」

そんなささやかな約束ではあったが、海にとってはとても嬉しかった。帰りも遅く、不定期に出て行く父親に休みなどなかった。しかし我慢するしかないとき常々思っていたからだ。だから海にとって父親と過ごせる時間は貴重な時間そのもので、一番欲しいものでもあった。満面の笑みで父親を出迎えた。

「ははは…そんな顔されると、俺もがんばれる。ありがとうな海。行ってくる」

そうやって灯は自らの定めへの道へと足を踏み入れていった。

5話

唐津紅蓮。

そういう名の男がいた。彼はこの国に古くからある警護組織、八鬼と呼ばれる組織の頭首だった。八鬼とは、これまた異能力者が集まった集団で、八人の鬼という意味がある。

昔の人間は異能者を鬼として退けた。善し悪しに関係なく人の範囲を超えているものには冷たかったのだ。それは時代の流れもあったが、受け入れられるほどその力が理解できなかったのもある。不遇の時代に生まれてしまった鬼たちは抛り所を見つけていた。そして唐津藤十郎と出会った。

唐津藤十郎は迷える鬼たちを受け入れた。

「君たちには無限の可能性がある」

言われた者には何のことだか分からない。自分の能力を忌み嫌っていたものがほとんどなのだから。しかし藤十郎は出会った能力者に説いて聞かせた。

「それは君が持つて生まれた定めなんだよ。拒絶することも破棄することはできない。それならば、私と一緒に進んでみないかい？ここで迫害をわざわざ受けることもないさ…」

その笑顔に出会った能力者は緊張を緩めてしまった。

唐津藤十郎の姿勢は常に真っ直ぐだった。そこに嘘偽りなどなく、何色にも染まらない独特の空気を持っていた。出会った者を虜にしてしまう仕草や雰囲気は武器でもあったが、意識して出せる人間な

どそうはいない。だから皆彼の誘いを断らなかった。

後を静かに付いていき、藤十郎の側で共に暮らした。

「人にはない能力を持っている我々にも出来ることはある」

八人集まったその時に藤十郎はどのように話を切り出した。

「国の警護だよ。貧しき者の多い時代だ。暴力で全てを得ようとす
る輩もたくさんいる。そして力の無いものは無残に殺されていくん
だ…それならば、我々の力を生かして弱きものを救うのだ」

その発言に反対意見は山のように出た。

「どういうことですか？私たちが迫害してきた者を救うのですか？そ
れこそ間違っています」

「そうです、弱き者でも私たちを罵り、石までぶつけてきた。そん
な者を救って何になるんですか？」

そうだそうだとその場にいたほとんどの人間が反対側に回ってい
た。そんな意見を藤十郎は黙って聞いていた。こうなることも知っ
ていたかのように…

「そもそも国の警護などそんな大それたことをどうやってやるんで
す？地盤も何もないんですよ？朝廷の人間も鼻で笑って追い返すに
違いありません」

「私たちの姿をまた晒すのもご免です。それぐらいならここで静か
に皆と暮らしたほうがいいです」

ほとんどの者が臆病になっていることを責めることなど誰にもできなかつた。しかし違つ意見を持つ者もいた。

「藤十郎さんにも考えがあるのだから、否定してばかりいないで先を聞いてみたらどうだい？」

「しかし…」

「こつうことは、いろいろ議論した方がいい。我々の未来を決めるためにも…藤十郎さん、あなたの話を聞かせてください。私はあなたに付いていくと決めたのですから、あなたの考えに従いたいです」

拾ってもらつた恩を忘れず、心の奥底から敬愛している者もいたのだ。

そんな姿を見た藤十郎は自分の行ったことは必ずしも間違いでなかつたと喜んだ。

「何だか照れくさいな…しかし君の気持ちは真摯に受け止めたい。だから続きの話をしてもいいかな？」

断りを入れたが、誰もそれを拒絶することはできなかつた。先ほどまで騒ぎ立てていた者たちはすっかり静まりかえってしまった。

6話

「君たちに不可思議な力が手に入ったことには意味があるとは思わないかい？万物流々、世の中に意味のないことなど何一つないんだよ。生まれた理由もその生きるうえで成されることも…普通の人間から見たら君らは気味悪がられるか不憫に思われる。しかし逆の発想もある。忌み嫌われるその力をそんな人間の役立つほうに向けてみたらどうなるかということだ…少なからずとも虐げてきた者の見方は変わるはずだよ」

「そんな簡単にいくものですか？」

「いかないね…だから積み重ねが大事なんだよ。小さなことからでもいいから人の役立つことをしていけばいい。そうすれば自然と朝廷の人間の耳にも入るさ…」

「乗り込むのではなく、人々の噂で呼んでもらうという訳ですね…」

先ほどまでわいわいと反論一色のムードが少しずつ変化していた。

「あの…助けた人も…怖がったりしないですか？私…ずっと化け物と呼ばれ続けたことが今でも頭の中に残っていて…」

人が怖いんです。こんな気持ちの悪い私なんか人助けなんてできるのでしょうか？」

「そう自分たちのことを否定してほしくないな。それに…人助けというものは何かを望んではならないんだ。その時点で人助けではなくなってしまうからね。でもこれだけは言えるよ。絶対に君たちはここから変わる。いや…私もかな。一人で行動するよりも仲間で

共に歩んだほうが得るものも大きいさ」

それから藤十郎は、ゆっくりとどのようなことを行っていくのか話した。どのような者たちを救っていくのか、どのように救うのか、そしてこれからどのように組織を作り上げていくのか。空想論で終わらないためにも、全員がこの先の未来を信じていることができるように丁寧に時間を掛けて話した。

そして最後まで話し終わる頃にはその場にいた全員が藤十郎の意見に従うことを決めていた。

「長々と済まなかったね。私が言いたいのは、全て話したよ」

それから八鬼という組織が誕生し、確実な実績を積み上げること、で朝廷にも認められ、長い年月を掛け脈々と受け継がれた。その結果この国の最高警護の職を裏から任されることになったのだ。

頭首を始めとする八人の猛者は、今の時代にもその組織体制を変えることなく残っていた。そして頭首の役割を継ぐものは当然、唐津の名を引き継ぐもので直系の子どもであった。千年の時を超えても尚その血を絶やすことなく唐津家は残っており、今の頭首が唐津紅蓮ということだ。他のメンバーも唐津家同様に子どもたちに役職を引き継がせていたので、身内で固められた組織といっても過言ではなかった。そんな長い歴史の中で八鬼にも一つの転機が訪れた。それは神徒協会の存在である。

彼らは元々この国にある警護組織、八鬼を差し置いて国の中心警護をすることを大々的に容認されてしまったのだ。神徒協会は表向きも巨大な組織で、信者も多く信頼の度合いが八鬼とは違ったのだ。政治的要素も含まれている関係上、神徒協会の提案を飲まないわけ

にはいかない状況ということもあった。他国と密接な繋がりにもあるので、外交をする上で絶大な効果を発揮する神徒協会は魅力的なものだった。だからこそこの国の政治家は、古くから存在する八鬼よりも神徒協会を取った結果となった。

創始者、唐津藤十郎が生きていたのなら、同じ思想の元にあるのなら良いではないかと話しただろう。しかしその時の頭首は、そのような穏やかな考え方ではなかった。神徒協会に対する嫌悪感を前面に出し、何度か護門徒に怒りをぶつけた。そんな姿勢を見ていた他の者たちも自然と神徒協会を嫌うようになる。

二つの組織には深い溝が出来上がり、それが埋まることは数百年なかったのだ。そんな中で唐津紅蓮は生まれたのだが、彼は違った。唐津藤十郎の再来とまで言われた彼は、能力もさることながら、考え方も歴代の頭首とは違った。

「八鬼も柔軟にいかなきゃ…」

それが口癖で、どんな状況、状態でも一つの思念に捕らわれてしまっただと話した。

「歴史のある組織つてものは、それを引き継ぐことをみんな大事にするだろ？そんなの間違いだよ…時代に合わせなきゃ。俺の先代たちが何をしてきたのかは知らないけど、俺は俺のやり方で組織をまとめよ」

先代たちからはそんな発言がでることはなかった。確かに歴史を重んじて積み上げてきた者たちの意思を継ぐことに躍起になっていたのかもしれない。しかしそれは大事なことだと周りの人間も知らず知らずに感化されてしまっていたのだ。

それを紅蓮はぶち壊した。

「俺らは俺らのやりたいようにやればいいのさ。しがらみに捕らわれてちゃ、いざって時に何もできないさ」

この人は本当に頭首か？と疑いたくなる程の軽さに八鬼のメンバーは振り回されていたが、人を引き込むようなやさしさと雰囲気は初代に負けなかった。だから誰も本気で怒ることはなかったのだ。そしてそんな唐津紅蓮にも先代たちが忌み嫌った神徒協会の直属の部下である護門徒と出会う機会があった。

それが月夜灯と初めての出会いだった。

7話

犠牲者の数は減ることはなかった。警察関係者も要人に対しての警護を怠ることはなかったが、それでも誰かが殺されることには違いなかった。目的のためには手段を選ばないようで、関係の無い人間もたくさん殺していた。それが目に見える最初との違いだが、殺し方に違いはなかった。

灯も規則性も法則性もない相手にどうしていいのか頭を悩ませてはいたのだ。そして昨日に起きた大量殺人現場のど真ん中に立って観察しながら相手の動向を考えていた。

「灯さん…」

真っ暗な部屋の中でうつむいている灯に一人の女性が声をかけた。

「佐藤さんですか…」

振り向いてその女性を灯は見た。

女性は佐藤京香さとうきょうかという名で、眼鏡を掛けていかにも仕事のできそうな風貌だった。スラリと短いスカートから伸びた足は、お堅い職業には似つかわしくない感じだった。

「キャリアのあなたがわざわざここで何を？」

京香は俗に言うエリートコースに乗っている警察官の一人だった。頭脳は明晰で学生時代は常にトップを保守していた。容姿も美人で頭も良いとあれば、近寄りがたい雰囲気は自然と出しているものだ。

が、京香は少し違った。

「ははっ…決まってるじゃないですか。灯さんの追っかけですよー。いやー上の人間も協力してやれよって言ってくれるものだから、もうわくわくしちゃって…昨日は寝られなかったですよー」

見た目と全然違った言葉遣いの持ち主だった。だからそんな軽い感じは逆に他の者を不快にさせていたのだ。

あんな変な奴に成績で負けた…あんな変な奴に好きな奴を取られた…などなど。

「そうですか…平井さんが、あなたを私の右腕として付けた訳ですね」

灯はそんなのりのりの京香に動じることはなかった。元々会うのは初めてではない。

平井という警視正が灯に二年前京香を紹介していた。

その時京香は大卒して間もないキャリア組の新人だった。そんな京香の能力を少なからずとも平井は買っていたのだ。だから普段は警察内でも知ることのできない護門徒である月夜灯に会わせていた。

「久しぶりですよねー二年振りに会えるって聞いてめっちゃ楽しみにしてたんですよ」

「そりゃ…どうも…」

「やー…反応薄すぎじゃないですか？一時も灯さんのこと忘れたこともないのに…」

にゃんにゃんと言い寄る灯も参ったなという表情を見せたが、悪い気はしなかった。

京香は嘘を言わないということを知っていたので、全て素直な感情の表れだと解釈していたからだ。

「京香さん…時間がないんですよ。僕の助手を務めるといふならこの状況を分かりやすく説明してもらえませんか？」

「あ…」

妄想の世界に飛んでいた京香は我に返ると、そうですね、と話して昨夜起きたことを話した。

「深夜十二時にこの屋敷にふらりと何者かが現れたそうです。ここを警備していた者の数は十人。もちろん拳銃といった武器も携帯していました。しかしその現れた者の手によって全員が何も出来ないまま殺されていた」

「何もできないまま？発砲はしたのかい？」

「いえ…抜いて手にする者は数名いましたが、発砲される前に殺されたそうです。頸動脈をばっさり…どさっ…てな具合で…」

「干からびてはいないのかい？」

「ええ…いつものように干からびているのはこの主人の男だけです。不可思議な刻印も同じように描かれていたそうです」

「相手の血痕は？」

「一滴も残っていませんねえ。そこから分かるように無傷で十人あまりの人間をたつたの数分で殺したようです。これってどんな人間なんですかね」

「それで、ここの使用人はその人物を見ていたのかい？」

その質問にも京香は首を振った。

「そうかい…恐ろしいほど手際がいい。やっぱり同業者か…」

「え？同業者？それって何です？灯さん。灯さんったら謎だらけだからそろそろ教えてくださいよ…いろいろいるとおー」

くねくねと体を動かして妙な愛情表現を見せたが、灯は無視していろいろ考えていた。

どのようにここにいる人物を殺して見せたのか足跡を見ながら分析する。

「おっ…灯さんお得意の足跡分析ですか？これって誰にも真似できないんですよ」

「どこで聞いたの？」

「平井さんからですよ…灯さんの特技、趣味、好きな食べ物はもちろんエックク済みですから。後は好きな女性のタイプを聞くだけです」

平井を咎めたかったが、京香が無理やり聞いたのだからと半ば諦

めた顔をしていた。そんな中でも冷静に足跡を見て一つ一つその人物の分析を始めた。

「身長：百九十センチ以上で、体重は八十キロ前後：そして驚きなのは一瞬で最低五メートルは移動ができる：無駄な動きがない。明らかに何人も殺し慣れてる」

男の動きを靴跡だけで導き出し脳内でそれを映像化させていた。

「靴跡だけでそこまで分かるものなんですか？」

「まあ…慣れればね。とりあえずそんな人物がブラックリストに載っていないかそつちで調べてくれないかい？私も極力自分で調べたいが情報が少なすぎるんでね…」

「灯さんのネットワークを使っても無理なんですか？」

「正直言つとそうなるね。それだけ相手も手強そうだ…」

「なら、いよいよ灯さんのテル番ゲットというわけですか…くはあ…それだけでも嬉しいです。捜査関係なく電話しちやいそう…」

京香はまた妄想の世界に一人旅行をしていた。

やれやれと頭をかきながら灯は煙草を取り出して、一息つく。そして灯は一人で物思いにふけっていた。

今まで変質者やら凶悪犯罪者やら能力者にも幾度となく出くわしたが、ここまで痕跡を残さない人物は初めてだったので、見えない相手に不安も抱いていたのだ。

8話

それから数日後の朝、京香から連絡が入った。

警察署内にある今までの犯罪リストの中に該当する人物は数名いるとのことだった。

百九十センチ以上の犯罪者などあまり存在しないから探すのは簡単だったのだろう、灯に電話を掛けた京香は自分が役に立てると思つて声色も上機嫌な様子だった。

「それで、該当者はどんな感じなんだい？」

灯は犯罪者の経歴を聞いてみた。すると、国際犯罪を犯すような輩はその中にはおらず、強盗や衝動殺人を犯した者しかいなかった。

「そいつらじゃないね…今回の件はそんな犯罪を犯す人物には無理だから。他にも脱獄した奴とかはいないかい？」

「いませんよお…警察だってそんな凶悪犯を脱獄をさせるほど甘くないですよ？」

「それもそうだ…まあ、いい。ありがとう。とりあえず確認はできたからいいよ」

そう言うなり灯が電話を切ろうとしたが、京香はまだ話がしたくてわやわやと電話口で話していたが、灯はそのまま無視して切ってしまった。

「ぶつー…」

やはり警察には捕まったことはないな。

あの手口であれだけの身体能力を持つ者としたら能力者として間違いない。警察に捕まるへまをしないとすれば、目的完全遂行型か。しかも背景もありそうだ…単独行動かそれとも誰かに依頼されたのか…ぶつぶつと一人でコーヒを飲みながら考えていた。

能力者というのはどこか壊れている。精神なり行動が…

だから警察に捕まる者中にはいるのだ。無差別殺人なり衝動殺人を起こして、最終的には重火器等の集中砲火で殺されるか、捕らわれて研究材料になってしまう。

一般人はそんなことを知ることもなく、知っているのは国の上層部だけなのである。その駆逐を任されている灯は勿論だが、彼と親しい者たちもそれは知っている。

灯は一人で何でもかんでも解決しようとは思わない。だから共有して解決することを選んでいるのだ。そうすることで自分は神徒協会という権力の笠に収まって好き勝手に行動していかないということのアピールしたかった。

灯以前の就任者は全てを包み隠し、神徒協会の名を全面的に利用し、誰にも手を出させなかった。「我々の成すことに口を出すな」と、だからこの国の警護関係にも亀裂が生じていたのだ。あいつらは傲慢で思い上がっている。一人で何でも解決して、何も教えてくれない。そんな不信感はどんどん募り爆発寸前までできていたのだ。そしてそれは八鬼も同じ気持ちだった。

権力というものは一つに集中することで、良くも悪くもなること
の象徴で、所詮は人の信頼関係で成り立つのだ。灯はそんな情勢を
壊そうと思つて、いろんな所に足を運んで関係を持つとしたので、
それが今に繋がっているのだ。

それから灯は、カップをテーブルに置くと思ひ当たる他の機関に
出向こうと思つた。そんな矢先に何かゴトンと郵便受けに入る音
がした。

おかしいな…

郵便の配達時間にしては早すぎる。そう思っていた。警戒しつつ、
すつとドアを開けてみたが誰もいなかった。

郵便受けにすつと手を伸ばすと、そこには手紙が一通入っていた。
宛名は書いていなかったが、香水の香りが染み付いているようで、
甘い香りがした。破つて中身を取り出すと、そこには挑発とも思え
る文章が書かれていた。

『愚鈍な護門徒よ…君には失望した。あれほどの時間がありながら
まだ私を探せないでいるとは…もうじきこの国は終わるだろう。君
らは自らを神とでも自負しているのだろう？そんな傲慢な独裁政権
が今崩れる時だ…安らぎとは無縁の惨死の鉄槌を君に与えよとしよ
う』

それを読んで灯は明らかな挑戦状だと受け止めた。そして身の回
りに迫る危険を瞬時に感じた。こいつらは自分のことを明確に知っ
ている。となれば、息子の命も危なければ、関わった人間も危ない
ということだ。

それを踏まえてすぐに行動に出た。

手紙を入れた人物を追跡するしかないと判断し、走り出していた。

灯は能力者ではなかった。しかし元来持ち合わせているものがある。

「研ぎ澄まされた五感だ…」

事故が原因で開眼してしまったその力は能力者に遅れを取らない。

足跡…匂い…

ついさつき郵便受けに入れた者ならこの二つの痕跡を辿ればすぐに追いつける。そしてそれが実現されたのは、十分後のことだった。

その人物は若い男だった。帽子を被りリュックを背負って一仕事終えた安堵からか悠々と歩いていった。

こいつは運び屋か…

そう判断するのが妥当だと思い、それでも何か知っているかもしれないと男の側にすっと近寄り声を掛けた。

「お前だな…私に手紙をよこしたのは」

灯を見るなりその男は驚きながら逃げた。

逃がしてはまずいと思い、すぐに後を追いかけた。狭い路地裏を

ぐるぐると逃げ回り、男はエンジンをかけたままのバイクを見つ
けると、すぐにそれを奪って走り出した。

9話

灯は唯一の手がかりを逃してなるものかと、先回りを試みた。

塀に登り、走りながらエンジン音を聞き分ける。

東に逃げるつもりだと予測をつけると、駅をまたぐことを決断する。朝のラッシュアワーの時間の駅は人でごった返し、電車の行き来も激しい。その合間を縫って反対側に出なくてはならないのだから困難な手段だった。しかし悩んでいる間はない。

灯は改札口を通ることをしないで、フェンスを跳び越して駅の中に入り込んだ。バイクのエンジン音が反対側に徐々に近づいていくのが灯の耳には聞こえていた。それと同時に電車が今にも駅に入ろうと近づいていた。

時間がない。

思い立つのが早いか、足はすでに動いていた。電車の先頭が向かってくるのと同時に線路に飛び込む。それは体が機体の先に触れるか触れないかのほんの一瞬だった。

周りにいた人間には飛び込み自殺かと思わせるほど、灯の躊躇のない行動に驚きの声が上がっていた。

ぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞ

電車のブレーキ音が鳴り響き、周囲の人間はどよめいていた。

あの男はどうなった！大丈夫か？

様々な声が駅内に沸きあがり駅員もたくさん出てくる始末となるが、そこには灯の姿はなく、反対側のフェンスを飛び越える背中が目撃されていた。

灯は先回りに成功したのだ。

バイク音が自分の方向に近づくのが分かり追いついたことも確信した。

「何！」

そんな路地から不意に現れた灯に驚いた男は、アクセルを緩めることをしなかった。

このままひき殺す勢いで、バイクを走らせる。目いっぱいアクセル開くことで短い距離ながらも時速は八十キロにも達していた。

長い距離なら衝突時に百四十キロは出ただろうが、八十キロでぶつかつたとしても相手はただでは済まない。衝撃力を単純に計算しただけでも、灯の体重の七倍である四百キロ以上の衝撃が今正に迫っていた。そんな危機に直面しても灯の脈拍、呼吸は共に正常だった。大地を蹴り上げひらりと空中を舞う。

まるで無重力を思わせるような華麗な舞は男の視界から一瞬消えるほどの高さだった。

そしてそのまま運手をしている男目掛けて、強烈な鞭のようなしなやかな蹴りを顔面に食らわした。

「ぐう！」

側頭部を打ちぬかれた男は体勢を大きく崩し、バイクもろとも転倒してしまった。

地面を擦りながらバイクは数メートル先まで滑っていく。

灯は音もさせないで着地をしたが、相手はコンクリートの地面に体を激しく打ちつけた。

殺す勢いで放つ蹴りではなかったが、自分を殺そうとしたのでこのくらいで釣り合いが取れるだろうと勝手な納得をしながら灯は男を睨んだ。

男がすぐに立ち上がることはできなかった。気絶はしていなかったが、打ち付けた体の痛みに耐えるのに必死のようだった。そして灯はその男に近づく。

「誰に頼まれた？お前が手紙の主ではないことは明らかだ……」

痛む体を起こして灯の方を男は見た。

「さあな……知らないなあ……」

せめての強がりなのか、男の態度はふてぶてしく灯を挑発しているかのようだった。

「お前……人間か？それとも異能の者か？」

「はは！そんなの知らねえーよ。金さえくれれば何でもやるだけだ！話には聞いていたが、お前も相当むかつく奴だな。何でも知ってるって顔しやがって…その人見下した目が気にいらねえ」

灯には所詮何もできないと男は踏んでいたのだろう。見た目はどこにでもいそうな優しそうな男で、暴力とは無縁としか思えないのだから。

「手紙一つでここまで追いかけるお前には驚かされたが…これで終了だ。俺は行くぜ。それ以上の依頼もされてねえし、義理もねえ」

ぱんぱんと尻の汚れを払うと、そのまま立ち去ろうとした。

しかし…

がつん…

「ぐああああああああ」

絶叫と共に、男の手のひらにはそこに落ちていた長く太い釘が突き刺さっていた。あるうことが、コンクリートの塀にそのまま貼り付けられたのだ。

「おい！話は終わってないんだよ」

灯はぐいっと男の髪の毛を引っ張りあげた。

「ひっ…」

不意に襲い掛かる激痛に男の思考は混乱していた。何が起こったのだ？分らない。

どうして俺の手のひらが壁に打ちつけられている？

「誰がお前に指示を出したか話せ」

こんなことをしてもまるで平静を保ち質問してくる灯を化け物だと思った。

壁に釘をめり込ませることもそうだが、灯の隠れていた殺気が男の本能にそのように訴えかけてきたのだ。

「あ…あ…」

戦意喪失とはこのことで、たったの一撃で男の態度は一変する。

「金髪で長髪の男だ…背が…でかくて、にこにこ笑っている奴だ…手紙を渡すだけで十万くれるって言ってたんだ…」

その人物像を聞いて、一連の事件を起こしている張本人に間違いないと思った。

「何でお前が選ばれた？」

「し…知らねえ…仲間とたむろっていたらいきなり声を掛けられたんだよ…前金で三万もらって残りを後で渡すからって…ただ…あんに気づかれることないように慎重にやれって…」

「それで焦って逃げたのか？」

「それ以外ないだろうが！金がばーになるかと思えば、逃げるしかないだろう？」

そこまで話すと灯は釘を抜いてやった。

「くっ…はあ…はあ…あんた異常だぜ…涼しい顔して人殺しそうだし…」

最後まで悪態をつくこの男も見上げた根性だと逆に感心していた。

「これは忠告だ。その男にもう会うな。金をそれ以上貰おうなど考えるな…そしてとっとと、ここを立ち去れ」

自分を襲った男の心配もしつつ、きつとまだ近くにいるに違いないと、男の話した場所に向かって行った。その場に残された男は呆けて立っているだけだった。

男がたむろっていて、例の金髪男に会った場所はここから数キロ離れた公園だった。

灯がたどり着いたのはあれから十分後。辺りを必死に見回すものの流石にそこには目的の男はいなかった。

「いるはずがないか…」

しかし接触を試みてきたということは、会いたいという意味表示でもあるのだと思った。

だから近々自分の前に現れるのだという確信があった。

灯に解放された男は貫かれた右手を押さえながら高架線の下を歩いていた。

「ちくしょう…何て割りに合わないバイトなんだよ！」

思い切りそこにあつたゴミ箱を蹴り上げると、ごろごろとプラスチックのポリバケツはゴミを撒き散らして転がった。

がたんがたん和電車が行き来する中で、誰かの視線に気がついた。

「ん？」

背後を振り返るとそこには金髪の長身の男が立っていた。

手紙を入れるように指示を出したあの男だ。その顔を見た瞬間に男の怒りは爆発した。

「おい！お前ふざけんじゃねえぞ！何が簡単なバイトだよ。どう見ても割りに合わねえだろうが。見ろよ！これ！釘を刺されたんだぞ俺は！」

怒鳴る男と対象に金髪の男はにやにやと笑っているだけだった。

「残りの七万じゃ足りねえ。治療費込みで三十万よこせ。じゃなきゃ俺は警察に駆け込むぜ。お前がこんなことさせて、怪我させられたってなあ…」

こともあろうか脅しに出て、更なる要求をしてきた。しかし金髪

の男は楽しそうに笑っているだけだった。

「何とか言えよ！このクソ野郎が！」

言いたいことを全部吐き出したようで、はあはあと肩で息をしていた。

「もう…謝礼は払っておいたが？」

初めて金髪男が口を開いたが、その意味を男は理解できなかった。

「最初の三万だけじゃ、満足しないって言っただろうがあ！」

いきり立つ男をよそに金髪男がすつと指を差す。

そこは高架線下の暗いトンネルの通路だった。まるでそこに報酬があるとも言つように指差した姿を一定時間維持する。

「あそこに何があんだよ！」

自分の後ろを指差され振り返って、そちらを見ると何かが見えた。

トンネルの先から誰かの手が出ていたのだ。それは地面に横たわる誰かの手だった。

「ん…」

遠くだったのでそれをはっきりと確認できない男は少し近寄る。するとそこからは血が流れ出ているのがはっきりと分かった。無言のまま走ってそこまで行くと、男は凍りついた。

「あ…あ…あ…」

まともな言葉は発することができない。全身の血の気が一気に引けた。先ほどまで熱くなっていた頭ですら瞬間冷却される程の衝撃だった。

つい一時間前まで友達と思っていたものが、違うものになってしまったのだ。

まるでひしゃげた飴細工のように手足が首が有り得ない方向に曲がり、中には原型がどうなっているのか分からないほど切り刻まれていた者もいた。撒き散る血液と臓腑と脳漿でトンネル内の壁はアートのように真っ赤に染まっていた。

「お…おえ…」

それを目の当たりにした男には吐き気と寒気が襲い掛かる。

足はがくがくと振るえ、まともに立ってなどいられなかった。精神と肉体が切り離された状況では粹がる男もただの小動物でしかなかった。

「どうだい？これ以上はない報酬だろ？」

ゆっくりと男の背後に立つその悪魔は嬉しそうに惨劇の説明をする。しかしそんな言葉が恐怖に怯える男の耳に入ることはない。

「私の殺しの報酬は日本円に換算してそうだな…軽く一億はくだらない。これで三億円の仕事だ。どうだい？願ってもないことだろう」

「？」

「俺は…こんなこと…望んじゃいない…」

がくがくと振るえ続けながら男は最後の抵抗を見せる。

「あ…そうなの？しょうがない。それならただ働きで四億の仕事を
するよ」

そこまで話すと、男は血飛沫を舞い上げながらそこにいる者たち
と同じ末路を辿った。

自らの頬に付いた血をぺろりと舐めると、金髪男は、

「嬉しいね…月夜灯…これぐらいの課題は軽くクリアしてくれたか」

呟くとそのまま闇に消えていった。

11話

灯は海の手を引つ張っていた。

「どうしたの？父さん…」

いつもと様子の違う父親に海は困惑を隠せない様子だった。

「急いで出なくてはならなくてな。お前には悪いが私の友人の家に厄介になってもらう」

足早に住宅街の中を歩き、目的地を目指していた。

身に迫る危険は一人で十分、息子に危害が及ばないでほしいと心から願っていたからこそその決断である。そして閑静な住宅街には似つかわしくないほどの豪邸が目の前に聳え立つ。その敷地面積も相当であるが、門構えからまず圧倒されてしまう。

古くから立つ武家屋敷のような古風なたたずまいで、そこだけ時代が止まってしまっているかのようだった。分厚い門を開いて中に入ると、そこには灯よりも年上の男が立っていた。

「灯さん…お待ちしてました。連絡が入った時は驚きました。それで…大丈夫なんでしょうか？」

核心に迫る話を持ち出したこの男は、千草冬扇ちくさふせんとしげんといい護門徒を支える存在である守護人と呼ばれる者だった。

守護人は代々、護門徒をサポートして影から支えていた。それは

非常に密接な関係なのだが、灯より以前の就任者たちはそんな守護人をまるで邪魔者扱いしていた。

自分が護られるほど弱くないと思っていたからだ。

護門徒は類稀な能力を持ち、圧倒的な力を持っていないと就任されることはない。だから性格も傲慢で自己中心的な考えの者が多い。

それでも守護人は自らの役職を果たすことを選び、嫌がられても離れることをしなかった。

「こんなことは私も初めてでね…少々困惑気味なんです。早い段階で手を打っておかないと敵も何をするか分からないんです。海をよろしく願います。ほら…海」

挨拶をなさいと促すと、海は礼儀正しく一礼した。

「よろしく願います」

それを見た冬扇は笑みをこぼして喜んだ。

「海君。よろしくね。家には君と同じ年の娘がいるから良い遊び相手になってくれるはずだよ…中で待っているから入りなさい」

そんな二人のやり取りを見ていて灯はどこかほっとしていた。それから海は言われるがまま家の中に入っていった。その場に残った二人は海の前で出来ない会話を続けた。

「灯さんがここまでするってことは、相手は手強いようですね」

「ええ…相当の切れ者で、能力もありそうです。だからはっきりと

相手が見えない以上、軽率な行動は控えたいので…そして人を護ることに長けているあなたなら息子を護りきつてくれると信じています」

「ははは…光栄ですね。是非命に代えても護らせていただきます。それで灯さんは誰かが側にいなくても大丈夫ですか？何なら私が信頼の置ける人間を付けますが」

「大丈夫です。自分一人なら私は誰にも負けません…それに警察関係者からも強力な助っ人がいますから」

「ほ…灯さんにそこまで言わせる人も珍しいですね」

冬扇は感心しながらその人物に興味を示した。

「朱里^{あかり}ちゃんは元気ですか？しばらく会っていないものですから気になってね」

「あれはあれで、少々気が強くて困ってます。もう少し大人しくなってくれればと…」

「そうですね。でも元気なのはいいことです。きっとこれから海と長い付き合いになると思います。親子共々よろしくお願いします」

礼を言われた冬扇は主君に等しい人物にそこまでされると困るといった感じでおろおろするばかりだった。

12話

唐津紅蓮率いる八鬼の動きは最近めまぐるしくなっていた。

その要因は政治家が次々と殺されることで、警察関係者の人手が不足していることにあった。交通機関全ての検閲、各省庁、国会、政治家の自宅、関係者宅の警護、聞き込み、その他もろもろを一度に行うのに相当する人間が存在しなかった。

自衛という点でこの国の脆さが明るみに出た結果がこれだった。不意な事件に対応できずに傷口を広げてしまっている。責任を擦り付けるだけで、即決できる人間が存在しない中能力者は捕まえることが難しい。だからこそ、普段はあまり頼むことのない八鬼にも警察から応援要請が出た。

「紅蓮：君も最近のこの国の動きを知っているはずだ」

山の奥深くに存在する八鬼の巢窟に警察官僚は出向いていた。頭首である紅蓮と向き合い険しい表情をしていた。

一方で紅蓮は何を考えているのか分からない様子で茶をすすっていた。

「状況が悪化する今、君らにすぎるしかないんだ。能力者が絡んでいるのは分かっている。だからこそそいつらを駆逐することに特化している君直々にこうして頼みに来た」

普段頭を下げることなどない存在であるはずのこの男は土下座に近い形をとったが、そんな男の誠意の現れを紅蓮は冷めた目で眺め

るだけだった。

「引き受けてはくれないか？」

ずずつと茶を飲み干し、湯飲みを置くと

「面白そうだね」

子どものように無邪気な発言をした。

「え？」

その言葉の意味が分からず男は紅蓮を見上げた。

「いやさ…何でもいいよ。俺たちを楽しませてくれたら。それに困っている奴らがいるんだろ？それなら俺らは動くさ」

「紅蓮…」

「あんたらはくだらない体裁とやらでがんじがらめなんだろ？嫌だねえー…大人は…どうしてこう汚くなるんだか…でも俺らは違うよ。困っている人間がいるなら助ける。それがこの国のためになるんだからさ…」

「引き受けてくれると取っていいんだな？」

「ああ…正し、これは俺個人でやらせてもらう。かわいい部下たちを巻き込むのも嫌なんでね…」

全てを一人で請け負うというその提案に男は驚き説得した。

「お前一人でどうにかなると言うのか？相手はそんな生易しい相手じゃないんだぞ。何人で動いているかも背景も全く分からない。それに殺し方も異常だ…装備した人間が十数人警護に当たっていてもほんの数分で惨殺されている」

「あんたらトップの人間には分からないさ…そんな危ない人物が絡んでいるからこそ、部下を危険に晒したくない。今の八鬼は後任した若手ばかりでおいそれとそんな危ない場所に出せない…上の人間が動いて指し示すことがあいつらには良い刺激になる」

手本を示そうという姿勢ではあったが、男は無謀だと考えた。

「しかし…」

「口で語るんじゃないで、行動で示す。それが俺のやり方…それにこんな大きな事件は久しぶりだからわくわくもしているよ。どんな奴なんだか…」

それ以上何も言えなくなった男は、参考になるかもしれない事件の経緯や内容の書いてある資料を置くとそくささ帰っていった。

そして一人残った紅蓮は自分で新しい茶を湯飲みに注ぐと、一息ついた。

「頭でしか考えない人間にはなりたくないね」

13話

「灯さーん」

京香がぶんぶんと手を振りながら近づいてきた。まるで朗報だと言わんばかりの満面の笑みで…

「何か分かったようで…」

「はい！私がんばりましたよー」

「それで？何が？」

「それはご飯を食べながらにしましょうよ。私お腹ペーペーで…」

それならば、と灯は京香を連れていきつけの店へと歩き出した。

「わーい。デートだー」

京香は嬉しそうに灯の後を追っていた。

灯が案内したのは、古い喫茶店だった。デートなどは程遠そうな店構えに京香は少し残念そうな表情を見せた。中に入るなり、店のマスターが灯の姿を見て挨拶をした。

「お勧めの料理を二つ持ってきてくれないか？それと…適当に酒も」

奥の席に向かい合って座り、料理ができるのを待った。

店内に客は一人もおらず、店内にはジャズが流れていた。薄暗い照明とテーブルに置かれたグラスに入った蠟燭が独特の雰囲気をもし出していた。

「ここは行きつけの店なんですか？ 静かで大人っぽい感じですね」

きよろきよろしながら店内を見回していた。

「本題に入ってもいいかい？」

「え？ ああ… はい」

「例の殺人鬼の顔が割れたとか…」

「そうなんですよ。 いやー… 苦労しましたよ。 二日徹夜で全ての防犯カメラの記録を見直したんですから… それで、ようやく見つけたひとコマがこれです」

ずっと差し出したのはカメラに映ったものを写真にしたものだった。 荒い画像ではあったが、そこに写っていたのは髪の毛の長い男だった。 髪色は金髪、長身で血に染まったような真っ赤なスーツを着ていた。

「たったのひとコマの画像ではあったが、灯は確信した。 この男に違いない…」と。

「お目当ての人でした？」

「ああ… 助かったよ。 こいつはこんな顔をしていたのだとようやく見ることができた」

「それだけで十分なんですか？」

「十分さ…見えない相手が見えてしまう。それだけで戦況つてのは大きく変わるんだ。姿を全く見せない…それだけで先手を取られた気分だったからね」

それ以外にも何かありそうだったが、灯は話さなかった。

「話にも聞いていたと思いますが、京香さん。あなたはこのままこの人物とやりあう覚悟は出来ていますか？それを今日にも確認したかった」

灯は真面目な顔で京香を見た。殺し合いの覚悟ができているかという意思表示でもあった。すると京香は考えることもなく即答した。

「もちろんありますよ。私だってこう見えても警察官です。能力者との戦いで何人もの人が命を落としてきたのも知っています。救えない方が後悔に繋がるのは灯さんと同じですよ。だから心配しないで下さい、足手まといにはなりませんから…」

今までの態度からは想像できないような発言に確かな覚悟を受け取った。だから灯もそれ以上の詮索も警告もしなかった。

「あなたの能力を買っています。だから側にいてくれると心強いです」

励ますように温かい言葉で返してあげた。

「そんなー褒められると恥ずかしいじゃないですかあ。でも…言葉

じゃなくて態度で示してくださいよ。例えば…私に熱い…口付けなどを…むふふふふふ」

そんないつもの京香に戻った瞬間、良いタイミングで料理が運ばれてきた。

「さあ…食べようか」

京香はがくつと崩れ落ちて料理を運ぶマスターを睨んだ。

そして静かな店内にかちやかちやと食事をする音だけが響いていた。

少なくとも灯は京香の能力を評価していた。二日という短期間で誰も探し出せなかった、コンマ数秒に映る犯人を見つけたのだから。

14話

木元義弘きもとよしひろはいつもの場所であの男に会っていた。それは相手が仕事を終わると必ず落ち合う場所で、深夜の神社の境内だった。街灯などないこの場所では月明かりだけが唯一の光にしかならなかった。

木元は一見どこにでもいるようなサラリーマンにしか見えない。安いスーツに安いネクタイ、靴も高級品ではなかった。

じやりじやりと歩く音が聞こえた。

「やあ…首尾はどうだい？」

声を掛けたのは一連の騒ぎを起こしている渦中の人物だった。

「まずまずだな…護門徒には会えたのか？」

「いや…まだだね。軽く挨拶は済ませておいたけど、かなり優秀のようだ」

「ほう？最高峰の殺し屋と呼ばれるディード・レオドランド、お前がそこまで話すのは久しいな。楽しめそうか？」

「ああ…報酬以上に私が求めるのは、内容だからね。それにこの国の甘さにも笑える。後手に回っているのに気づくのがあまりにも遅いから傷口をどんどん広げている」

「そついうものだ…神徒協会を始め護門徒に頼りすぎ自衛を怠った結果だ。国のトップもアホなら神徒協会もぬるすぎる…今回のよう

な事態が起こらないとはなから決め付けているのだからな。傲慢な考え方だ」

「八鬼も動いているようだが？」

「ああ…先日、頭首の唐津紅蓮に国防のトップが接触したようだ。彼はよく知らんが、護門徒である月夜灯ほどの実力は持っていないだろう。無視して構わないさ…」

「なるほどね…カスカ。それで、あんたはどうする？ 真実の光の幹部が出るには早すぎないかい？」

「そうだな。とりあえずお前が月夜灯を殺したら動こうか。そこから神徒協会を叩くことに繋がるからな」

「それほどまでに護門徒の存在は大きいのかい？」

「ここが崩壊すれば国も崩壊し、協会内部にも混乱を生じさせられる。そうすることで本丸を攻め落とすことができるというもの。それまでは大人しくいつものように政治家の秘書を勤めているさ…」

不適な笑みを浮かべながら木元は自らの計画通りに進んでいることを喜んだ。

「しかしだ…デイド。月夜灯を軽視するなよ。あいつは十代半ばで神徒協会本部に程近い我らの組織の支部を壊滅させている。素質はお前と同等かそれ以上の殺し屋だということなのだ」

「ますます面白い。無能な人間を殺すのは飽きてきた所だ。やり方は何でもいいんだな？ 私のやり方で…」

「ああ…構わない。君が非人道的で残虐なのは知っている。だから何人もの人質を取っても構わないし、身近な人物でも何でも利用して血祭りにかけていい。勝つためならあらゆる手段を使ってくれ」

木元はデイド以上に冷酷な考え方の持ち主だった。平然とそのようなことを口にする、そのままいなくなった。

15話

雪がちらちらと降ってきた。

今年は例年に比べて初雪が早いのだと灯はのん気にその雪を眺めた。

灰色の空を眺めながら数少ない手がかりを頼りに殺戮の悪魔とも呼べるデイドの姿を追うことにした。しかしただ闇雲に探しても見つかるはずはない。ここ連日で続いていた殺人劇はぱたりと止み、目的を変えたことを伺わせるような流れが明らかになった。だから灯は原点に戻ろうと思った。

依頼主である政治家の一人、田辺正作の所に足を運んだ。

傍らには助手兼、相棒のような存在である京香がいた。場所は以前と同じ自宅で、電車を使いながら移動した。

「おおおおお…」

京香は豪邸を目の前に驚きの声を上げるばかりだった。そしてこんなでかい家を建てれる人間は悪いことをしているんですと、力説をしていたが、灯は軽く流していた。

「お待ちしていましたよ」

秘書の男が軽く会釈をすると家の中に案内された。以前と変わらない華やかな装飾品に囲まれたこの部屋も灯は見慣れてしまえば驚きもないといった様子だった。

しかしそれとは対象にはしゃぎまわる京香は、この壺はいくらするのだろう？あの絵はいくらなの？と勝手な品定めを始めて極めて落ち着きのない様子だった。それからソファーに腰を掛けると、早々にお茶が運ばれる。前回と同じ流れそのものである。

忙しいはずの家主、田辺正作は今日はたまたま家にいた。だから灯たちの前に顔を出した。

「前は顔合わせできなかったな…私が依頼主の田辺正作だ」

開口一番はそんな言葉だったが、政治家らしく傲慢な一言とも思えた。ふんぞり返った態度で灯のことを鼻で笑っているようだった。そんなことも気にも留めず、無言のまま灯は用意された茶をすすっていた。

「犯人は特定できたのか？目ぼしい情報は得られたか？」

事件の進展を知りたくて出た言葉だが、満足のいく結論は灯は出せずにいた。

「いえ…まだです」

現状を素直に答えたが、正作は怒り狂った。

「ふざけるな！これだけ人が殺されていて、何も成果がないだと？お前は国認定の最高警護の就任者のはずだ。能力者に対しての対抗策も練れる特異な人物だという話も聞いている。それなのにこのざまはなんだ？」

実利を求める者に経過は必要なかった。だから何も無いという結果に頭にきたのだ。

しかし灯は冷静だった。相手の態度に対して自らの態度を変えることをしない。

「怒りはごもつとも……しかしこちらは何もしていない訳ではないので……」

「言い逃れをするつもりか？いいか？今の状況でそんなことを話しても何の慰めにもならないんだぞ？」

火に油を注ぐとはこのことで、正作の怒り更に燃え上がる。

「いいか！これ以上結果を残せないのなら、神徒協会との付き合いを国も変えざるを得ないことを肝に銘じておけ！」

事実この男も国のトップの端くれではあるので、議会に持ち込めば可能と言えるだろう。しかし灯はそんなことを気にもしていないかった。

「私は忙しいんだ。これから殺された政治家の尻拭いで崩れた国政の建て直しをしなくてはならない。だからだ……次に会うときには朗報のみを用意しておけ！それ以外で家を訪ねるな！」

全てを言い切り、そのまま正作は表に車を回させるとどこかに出かけていった。

京香は事の始終を啞然と見守るしかないぐらい嵐の談義になっていた。

「灯さん…大丈夫なんですか？」

「え？何が？」

灯は優雅に煙草を取り出して一服していた。

16話

帰り道、京香は灯に質問した。

「灯さん…何がしたかったんですか？何も成果がなかったら報告しに行くこともないでしょうに…」

腑に落ちない様子で灯の後ろを歩いていた。

「裏がないか様子を伺ったんだよ」

「裏ですか？」

「ああ…私はこの国に来てかなり平和ボケしていたからね。こんなことに気づくのに時間がかかりすぎていた」

「何ですか？」

「依頼者を疑うことさ…」

「へ？」

「昔はよくあったのさ…依頼を装い自分の命を狙う者がね…しかしこの国ではないだろうって私が勝手に決め付けてしまっていた」

「それならあの人が灯さんの命を狙っているっていうことですか？
そうは見えませんが？」

「君はあの家のセキュリティを見たかい？命の狙われている政治

家は見えない恐怖から逃れるように必要以上にたくさんの監視カメラ、警備員を動因するものだ。しかしそこから考えても全てが少なすぎる。そして彼は私たちの前で堂々と外出したんだぞ？仮にも一国のトップクラスの人間だ。今の時期にそれは避けたい所じゃないのかな？」

「まさかあ…自分は襲われないという確信があるからってことですか？」

「その通り…私の見たところ、彼の動き一つにしても怯えるといった動作は何一つなかった。もしも長い間閉鎖空間に閉じ込められたとしたら、思考は低下し、良くないことばかり思い浮かべて何かしらの障害を見せる。恐怖から逃れるためにいろんなことを試みるのだからね…しかし彼は平常心を保ちつつあるうことか別の何か企んでいた。声色一つとってもそれははっきりとする…」

「なら、上辺で怒っていたんですか？」

「そうなるね…心底怒っていたのならもう少し気持ちが入っているものだが、彼のものは演技そのものだよ」

正作との短い会話でそれだけを見極め、分析してしまう灯に京香は感心してしまった。

「灯さん…そんなに人の心を見透かしてしまったら女の子はがっかりですよ？」

「え？」

「乙女心は分かりやすいんですから、そんな風に語られては引いて

「まいりますよ」

例えがめちゃくちゃだったが、灯は京香の話を黙って聞いていた。

「だから、女の子にはそんなことは直に話さないでくださいね。勿論、私にもですよ！」

念押しされたが、灯はどうしていいのか分からなかった。

「その話はさておいて…それで灯さんはどうするつもりなんですか？まさか、いきなりあの人を締め上げるとか？」

「そんな無謀なことはいしないよ…身内が絡んでいるのならそこから調べることも可能ということだ。だから…君の出番です」

「なるほど…官僚の裏を取るってことですね。正に懲戒免職ものの行為です」

「そこまでは話していないけど…」

「でも…私はやりますよ。愛の力で。こればかりは誰にも止められませんから…」

妄想でどこかにいってしまっている京香を止めることはできなさそうだったが、灯は期待していた。

「助かります…京香さんなら何とかしてくれると思っていますので。ひよっとしたら警察内部でも関与している人物も少なからずいると思いますので、隠密行動でよろしく願います」

「任せてください。今日中にも洗い出してやります。パソコンにハッキングでも監視総監を誘惑してでも何でもして…」

物騒な発言に灯も助言を一つ加えた。

「くれぐれも目立たないで下さいね」

17話

紅蓮は事件の痕跡を追っていた。

普段はまるで仕事をしない紅蓮だが、八鬼の頭首としてもやらないではない時にはしっかりと働くようだった。警察関係者にも上から許可があったので、殺人現場にもすんなりと入れた。そこで状況を見ながらもデイドという殺人鬼の気配を必死で追いかけた。

目に見えないものを追いかけるとはこのことで、紅蓮もかなりてこずっていた。

「どっしたものが…」

頭を悩ませながら暗闇の路地を歩いていた。

威勢よく啖呵は切ったがそこに計画性はない。そもそも紅蓮は感性で動くタイプなので後先のことをまったく考えなかった。それでもどうにかなるさと思えるのは、彼なりの強い部分でもあった。

唐津家は代々受け継ぐ能力があった。それは、八鬼全ての能力である。

創始者である唐津藤十郎は、選り出した八人の体を調べ上げ、その力の根源を自らの肉体にも宿した。元々唐津藤十郎の能力は他人の能力を自分の物にするというものがあつた。そして八鬼という組織を作る上で、仲間と力を共有する形で信頼関係を成り立たせたのだ。

それは受け継がれるものとして、唐津家には代々引き継がれていた。だから唐津紅蓮にもその能力は存在し、八つの能力を持つ異質な者となった。

空間固定、治癒能力、念力、外皮や内臓の突発的な変化なども可能のびつくり人間だった。しかしそれは、八鬼のメンバーの二番煎じのようなものなので、一つの力は、それを主として持つものには敵わなかった。

紅蓮はそんな能力に振り回されないようにもしていた。たくさん能力を持つと、それに頼り切ってしまう、自らが強いと過信してしまう。そして本来の姿を見失ってしまうとも思っていた。だからここぞと言うときにしか能力を使わないとも決めていた。

考え事をしながら歩いていると、路地を抜けてしまい、そのまま河川敷に出てしまった。

最近山奥の中にこもりっぱなしだったので、川を見るのは久しぶりだった。

下界に降り立つ神か悪魔の気分ではあったがそこまで文明から取り残されているわけでもない。ただ単純に懐かしいと感慨深く思うだけだった。

深夜のこの時間には誰もここを歩くものもない。冬の川岸は吹いてくる風も冷たかった。紅蓮は現代の服とは程遠い、僧侶のような格好をしていたので、寒そうに見えた。

あまり身なりに気をつけないので、衣類はぼろぼろ、頭もぼさぼさで、履いている草鞋も擦り切れていた。

「寒いなあ……」

白い息を吐きながら静かに流れる川を眺めていた。月明かりが水

面に映り、深夜にしか出せない独特の風情があった。

紅蓮は何をしているのか分からなかったが、直感でここに来ようと思って来ていた。それは少なからず間違いはなかった。紅蓮の持つ能力には自然と備わっている本来の能力もあった。自分の探しているものの場所に自然と足が向くというものである。

考えても駄目で、何も考えないで歩くとそこに自分の望むものがあつたりするのだ。

すると視界に向こうから歩いてくる一人の人間が入った。誰も着ないような真っ赤なスーツに身を纏う異様な人物。金髪の長髪で高身長、肌は白く、極寒地に住む外国人そのものだった。そう、あの冷酷な殺人鬼デイド・レオドランドである。

これは偶然である。デイドは獲物を刈るわけでもなく何気なく深夜に出歩いていただけだった。いわばプライベートタイムとでも言うべきであろうか：殺し屋といえども何も四六時中殺しをしているわけではない。何気ない行動も存在はするのだ。

デイドは目の前にいる紅蓮に何の興味も抱くことなく無警戒のままどんどん近づいてきた。そしてすれ違ふところまで来ると。

「あんた何者？」

先に声を掛けたのは紅蓮の方だった。

紅蓮はデイドの隠している僅かな血臭を犬のように嗅ぎ取ったのだ。

びっくりとその声に反応し、デイドは足を止めた。声を掛けた男が話している聞いていた唐津紅蓮とは知らなかった。

無視するつもりだったのに予想外の展開に戸惑ったからうっかりと口を滑らした。

「それはどういうことだ？」

紅蓮の反応を見るかのように質問で返した。すると紅蓮はにやりと笑っていた。

「何だ…やっぱり異質な存在かあ…」

「…」

「初対面の人間にいきなり変なことを話しかけられたら、だいたい無視するよ。けどあんたは即座に反応した。日本人でもない外国人なのに…おかしくないかい？自分に思い当たる節がありますって言ってるようなもんだよ？」

ぺらぺらと揚げ足とりのような発言をしたが、まんざら外れていく訳ではないのでデイドは驚くことよりも笑っていた。

「面白いな…君は…だとすると君も関係者とみなしていいのかな？」

急にデイドの全身から隠していた血なまぐさい殺気が漂う。周囲の空気を大地を支配するかのように湧き上がる。

「分かりやすいねえ…ほんの少しの会話だけでこころも尻尾出すとは…」

「私はまどろっこしいのが大嫌いだね。邪魔者には言い訳をするよりも殺してしまった方がよっぽど早いんだ…」

「根暗かい？口下手なんだね、あんた…」

そんな茶々を入れてみたが、デイドは無視をした。

「政治家を殺していたのもあんたかい？」

「さあな……」

デイドはそのように濁したが、紅蓮ははっきりとこの男がやったと確信していた。

デイドに取り巻く異質な空気は死者の怨念のようなものも加わっているようで、並みの殺人者には持ち合わせる事が不可能なものだった。

能力者だということも分かっていたが、その力は戦ってみないと分からない。

「政治家を殺して何を企んでいる？あんた一人の動きにも思えない。誰か絡んでいそうだよ……」

「さあな……」

二度目の質問も軽く流す。

紅蓮に情報を与えたくないのだろう。この男はプロである。いろんな痕跡を残さないように日頃努めているのでその習性だろう。何気ない会話から誘導されることを嫌がっていた。だからすぐに行動に移す……

「あんた……もうちょっとしゃべったら……」

紅蓮が戦闘態勢の整わない会話の最中に踏み込んだ。

抜き手を紅蓮の腹部に目掛けて突き刺そうとした。ただの抜き手であるが、この殺し屋の肉体は全てが凶器と化していた。

大木だろうが、鉄板だろうが軽く貫いてしまう。そんな凶器が肉体に刺さったのならどうなるかは一目瞭然である。

ぞつとする寒気を感じた紅蓮はどうかその抜き手に反応できた。

目で追うのよりも先に肉体が動いていた。直撃を避けるようにぐるんと体を回転させた。

しかしわき腹をかすらせた。

そのまま攻撃を流すがしつと腕を掴んだ。

「いやいや…物騒だねえ…」

ほつとした様子でデイドを見た。だが、このままでは終わらなかつたのだ。

どくん…

全身の力が急激に抜ける感覚に襲われる。

「あ…あ…」

がくがくと体が震え、掴んでいた腕も放してしまった。味わったことのない脱力感に動けなくなっていた。

「名前聞いてなかったな…というか、名乗れるか？」

それは最後の質問だったのかもしれない。圧倒的な力の差が存在する余裕だとも取れた。

「か…唐津…ぐ…紅蓮だ…あんたは？」

「デイド・レオドランド。私の体にずっと触れて生きているんだけどでも素晴らしいことだよ。さよなら…紅蓮」

そのまま無抵抗の紅蓮の腹部に抜き手を容赦なく突き刺すと、予想通りにデイドの手は背中から飛び出していた。

皮膚を破り、内臓を貫き、難なく肋骨をへし折った結果がこれである。

「く…は…」

鮮血が大量に流れ落ち紅蓮は意識を失う寸前だった。

デイドはそのまま紅蓮の体を石ころでも投げるかのように川に向かって軽々と放り込んだ。

下流に近いこの河川敷は深さも割りとあった。二メートル近くあった水位のために紅蓮の体は水の中に沈んでしまった。

「やっぱり話し通りにカスだったみたいだな。八鬼の頭首とやらは…」

「そんな捨て台詞を残してデイドはそこからいなくなった。」

「ぐう…」

水中で紅蓮はもがきながら必死に意識を保っていた。

気を抜けばそのまま絶命するのが明白だったからだ。

そして今成すべきことはただ一つだった。

ここでこの傷を塞がないと数分も待たずに出血多量で絶命するこ
とだった。

だからこそ紅蓮は恐ろしいほどの集中力で力をかき集めた。

自然の力と自らの治癒力を使い壊された細胞の修復を試みる。

それは紅蓮の持つ八つの能力の一つであるが、果たしてここまで
の傷を修復できることができるかは本人にも分からなかった。

水中であがくことをしないでじつと患部に手を押し当て回復を待
つ。

分裂した細胞が徐々に繋がり内蔵を骨を皮を形成していく…

しかし完全には無理で傷口を縮める作用しかない。

だが…それだけでも十分であった。

幸いだっただのは壊された臓器は肝臓で絶命に至る可能性が少なくなっていたからだ。

そのまま胎児に戻ったような感覚で水の中でじつと身を潜めながら回復を待つ…

それからしばらく時間は掛かったが、死の危険からは逃れることができた。

そしてようやく姿を水上に現すと、そこには誰もいなかった。

「はあ…はあ…はあ…」

這うような形で川岸にたどり着くと、紅蓮は自分の甘さを呪った。

殺し合いの場に出遅れ、相手に一方的な攻撃をさせてしまった。

このことは何よりも屈辱的だった。

これでもしも心臓を貫かれていたのなら一瞬である世行きだった。無警戒にもほどがある自分の行動を戒めた。

「くそ…このままでは済ませない」

いつもの温厚でふざけた態度とは一変して、デイド・レオドランドに確かな敵意を燃やした。

月夜灯の助手である京香は非常に優秀であった。ディードの顔を判明させただけではなく、その見えない背景までもあぶりだしていた。

灯に頼まれたとはいえ、政治家の裏を取るとはなかなか難しい。上司の平井が手助けをしたこともあったが、ほとんどは京香の独自の判断で調べ上げていた。

「くふふふ…私のネットワークを利用すればどんな人間も丸裸同然…」

意味不明なことを口にしながら京香はパソコンの画面を眺めている。

インターネットが普及したこのご時勢、機密事項までも容易に手に入ってしまうのが時代の流れである。京香は独自で開発した自動情報収集システムに依頼主の名前を軽快に打ち込んだ。すると、数分で彼のスケジュールから銀行口座の全てがさらけ出された。

「よっしゃー！」

それからその一つひとつを確認していくと、おかしな部分が多々あった。

スケジュールに定期的にある空白部分と、金の動きである。知られたくない誰かに会って金を払っているのだらうと京香は察した。

それが誰なのか…そう考えるとその先を知りたくなる。だから必死に接触しているであろう人物を検索してみた。

だが…敵はそんな電子世界に残らないような接触方法を試みているらしく痕跡が掴めることはなかった。

「敵もなかなかやるようですねあ…」

まるで自分が上の存在であるかのようにふんぞり返りながら画面を眺めていた。

深夜の二時…丑三つ時のこの時刻、職場には誰もおらず、広い部屋に京香が一人で残っていた。

「あうあう…お腹減ったよお…」

寂しさを紛らすかのように独り言を口にして、部屋を出て行った。その手には、一人暮らしの男のようにカップラーメンを持っていた。お湯を探しに署内をうろろしていたのだ。

しんと静まり返った廊下を歩く。革靴の音が響く様子は慣れていない。まるで自分しか存在しないようで嫌だった。給湯室を目指して歩いていると、目の前に見慣れない人物が目に入った。

誰だろうか？

フードコートにすっぽりと身に包む人物に知り合いはいなかった。だから単純に署内の関係者だと決め付けていた。気にすることも声を掛けることもなくそのままやり過ごそうと思ったが、京香を裏切る行動にその人物が出た。

右手にナイフを手にしたかと思うと、いきなり切りつけてきたのだ。

「うわぁ！」

初見で怪しいと判断したことが幸いした。京香はその人物と距離を取っていたのだ。

だからそいつは目測を誤った。

切っ先が京香の肉体を引き裂くことはなかったのだ。

びゅんつと空を切ったかと思うと、京香に反撃の余地を与えてしまった。

しかし…京香はすぐに反撃に転ずることはできなかった。

「あなた何者です？」

言葉を交わしてしまったのだ。殺し合いなど血なまぐさい生活は無縁の者の行動である。相手はその質問に答えるはずもなく、京香を殺すただけに動いた。その動きはまるで獣そのもので、ぐつと前傾姿勢の状態で突っ込んできたのだ。

「あの…」

言葉を発する余裕などない。京香は狭い廊下で無理やり殺し合いを挑まれた。

それをどのように対処するかは瞬間的に頭の中で考えることなど不可能だった。自然に動く体に判断を任せただ。格闘技の経験はなかった京香ではあったが、一つだけ人よりも優れたものがあつた。それは目である。

目というよりは見たものを脳に伝達する速さ動体視力が常人の数倍あつた。相手の動きをはっきりと見ると、その軌道が見えるのだ。だから…素人同然の彼女でも相手の攻撃を避けることはできた。

単純な直線の動きは読みやすいが、相手は獣のようにしなやかに動く。速度も威力も殺すには申し分なく、普通の人間なら頸動脈を心臓を切られるか貫かれていただろう。

しかし二度三度と振り回される武器は空を切るばかりで、逆に京香の反撃の一撃を脳天に食らうことになった。

たまたまそこにあつた設置された足つき灰皿が京香の武器だった。

「あ…」

灰と吸殻をその場にぶちまけながらその人物は倒れた。その隙に京香は逃げた。

署内に残っているのは自分だけではない。別の場所にいる者に応援を呼ぶことを考えた。

灰皿はそれほどの大きさでもなくステンレス製だったので、殴られた者にはたいしたダメージにはならなかった。すぐに立ち上がり京香の後を追う。

冷たい廊下を走る音が二つ聞こえる。

「やばいなあ…このままじゃ、応援呼ぶ前に追いつかれる…」

殺されるかもしれない状況でも京香は取り乱さなかった。曲がり角を曲がると、そのまま側の資料室に隠れた。それからあらゆることを想定しながら身構える。

21話

その時の京香の頭の中は良く回転した。

人は恐怖に直面すると思考は鈍るといっが、逆だった。彼女は逆境になると思考がよく働くらしい。そこを灯が買っている部分でもあったのだ。

使いたくはないが、拳銃の銃弾確認をしながら最悪の結果も考えていた。

「さて…」

暗闇に身を潜めて隠れていたが、背後から聞こえていた殺人鬼の足音が止まる。

気づかれたのだろうか？

高まる心臓を押さえながら、部屋の隅に隠れてドアの方を見た。

そして…かちやりとドアは開かれた。

そいつはまるで鼻が利くかのように京香の隠れ場所を迷うことなく探し出したのだ。

あちゃー…

心の中でそんなことを考えながらも、京香は想定内だと判断、行動に移った。本棚の影を利用しながらさっと回り込むと、相手が奥

まで進んだことを確認した。それから思い切ったように手前の本棚を勢いよく倒した。

手前の棚が一番重いを知っていた。だからドミノ倒しのようにはたばたと棚が三つほど標的に向かって倒れこんだ。背中をむけていたため、殺人鬼はそれに気がつくのは本棚が倒れる音を聞いてからだった。

どすん…ばらばらばら…

重い本棚が倒れ、本は散乱した。

この音を聞きつければ誰かが来るかも知れないという考えもあった。

静かになった部屋にひとりで立つ京香は忍ばせておいた拳銃をすっと抜くと、本棚の倒れた一番奥に標準を定めた。

できたらそのまま気絶していてくれと願っていた。そしてにじりよりながら確認作業をしようと思った瞬間、横からきらりと光り襲い掛かる刃。

すばっ…

予測不可能な出来事に左肩を切られてしまった。

「きゃあ！」

今度は京香が体勢を崩してしまう番だったが、尻餅つくことだけはできないと踏みとどまった。

殺人鬼は正に獣だった。本棚の雪崩を驚異的な身体能力で潜り抜けていたのだ。そして反撃に転じ、今がチャンスとばかりに再び京香との距離を有り得ない速さで縮めた。

京香の脳裏に浮かんだのは、このまま相手が勢いに任せてナイフを自らの肉体に食い込ませる映像。このままでは押し切られることは必然、そう見切るのが早いのか、京香の目がかつと見開かれると右腕に握られた拳銃は乾いた音を発した。

そしてその後金属の弾ける音が響く。

それは殺人鬼の手に握られていたナイフがその役目を果たさなくなった音ともとれた。

あろうことか、京香は銃弾でナイフの刃を壊したのだ。当然、その事実を受け止めることが瞬時にできない。相手の動きは硬直して、この先の動きに制限を与えられてしまった。

だが、京香の拳銃はそこで止まらない。続いて、二発、三発と追撃の一打に出ていたのだ。秒間三発、人の認識できる領域を遥かに超える速度で打ち込まれた銃弾は、敵の右肩と左太もものに的確にめり込んでいた。

「か……」

声を漏らすことのない相手が初めて搾り出したような声を出して動きを止めた。それから自身に何が起こったのかを遅れて理解したのだ。動きの中心である二つを封じられたと。

警察用拳銃 S & W M 36、小型リボルバーは五発まで打てる。残りの銃弾は二発残っていた。これだけあれが、目の前の敵に致命傷を与えることは可能であったが、相手は京香の力量を察してか、突如窓ガラスを破って逃げる選択を選んでいった。

嵐のような一連の動きに京香は正直参っていた。

姿が見えなくなり危険が去ったことを知ると、両膝をがくりとその場に落とした。

「はあああああ……」

あまり使いたくない銃を使ってしまったことに多少の後悔も抱いていたが、やむ終えないことだと自分に言い聞かせていた。

それから間もなくして騒ぎを聞きつけた警察官がそこを訪れた。

騒然とした警察署内を後にした殺人鬼は、逃げるように暗闇を走っていた。

負傷した体が痛み、思うように動けてはいなかった。引きずるように目的の場所まで時間を掛けてたどり着いていた。

そこは倉庫街の片隅。人目につかない無法地帯のような場所だった。

呼吸を荒げながら肩を押さえて、その人物の前までゆっくりと歩く。目の前に聳え立つ人物はあのデイドである。そしてデイドは一目で看破した。

「しくじったか…」

その一言だけで、フードコートの人物は震え上がっているようだった。

「あれ位の小娘なら、力を与えたお前なら血祭りにあげられるだろうと思っただが…期待外れだったな」

死刑宣告をされたような気分で、そいつは動けなくなっていた。

「怯えるな…お前は黙ってこのまま無に返ればいいだけのことだ…」
そして右の手のひらをそいつの頭にぼんと置いた。

「がはあ！」

そいつは鮮血を全身から噴出させると、そのまま息絶えてしまった。

真っ赤に染まった地面に屈服したような形である遺体を前にしてもデイドは何ら変わりはない。

「役立たずが…」

「そう一言漏らすだけだった。」

22話

「灯は京香のいる医務室まで走ってきた。」

連絡は京香が襲われた数十分後に入った。それも京香本人ではなく、彼女の上司で灯の知り合いでもある平井からだった。

電話口で、署内で襲われたから着てくれという短い言葉であったが、灯は電話を切るなり真っ先にその場所を目指していた。身の回りの人物に危険が迫るのは分かりきっていたのだが、現実に起こると自分のふがいなさを責めてしまう。

全ての人間を護りきるのは無理である。しかし灯は誰も殺させたくはなかったのだ。

三十分掛かるであろう距離も灯の身体能力では十分と掛からなかった。

署内に入ると、医務室を目指して再び走ったのだ。

「がちやり…」

ドアを開けるとそこには治療を終えた京香と平井の姿があった。

「お…」

平井は灯を見るなり、早かったなと軽く挨拶をした。そこには緊

迫した様子などなかった。そして京香も落ち着いた様子で、いつものようににこにこしていた。

そんな二人の表情とやり取りを見ただけで灯は安心したのだ。

「大丈夫ですか？」

京香の身を案じてそんな言葉を口にするが、京香は滅多にかけない優しい灯の対応に天まで昇るような気持ちだった。

「嬉しいですねえ…灯さんがこんなに心配してくれるなんて…むふふふ」

「襲われたと聞かされれば、誰だって驚きます。しかし…無事で良かった」

雪が降る寒さの中でも、休みなく走ったせいで汗が流れていた。そんな姿を見ているだけで京香は嬉しかった。

「灯さんが、熱い口付けでも交わしてくれば治るのも早いと思うのですが…」

調子に乗ってか京香はどんどんいつものペースに戻っていった。そして灯はそんな京香を可愛らしくも感じていた。良かった…いつもの京香さんのようだと。

ほっと、胸を撫で下ろす気持ちで、いつもの対応で軽く無視をした。

「平井さん。誰に襲われたんです？」

「ん？例の殺人鬼の関係者だろうな」

やはり…そう思いながら拳を強く握り締めていた。

「三階から飛び降りて逃げたそうだ…そんな芸当が普通の人間にできるか？それにだ、署内で警官に襲い掛かるなんて真似誰にできる？詳しい話はこいつから聞け…」

そこまで話すと、平井はコートと鞆を手に持つと身支度を整えて出る準備をした。

「京香：今回の件でびびるんじゃないぞ？こんなことこれから毎日常茶飯事なんだよ。前もいったが、能力者とやりあうつてのはこういうことなんだ。心が強くならなきゃ続けられない。お前が望んだ配属先だ、それなら最後まで責任を取れよな」

激励とは程遠いような厳しい言葉を京香に浴びせると、最後に一言だけ付け足すように話した。

「お前の能力は俺も灯も買ってる…そうじゃなきゃ、そいつはお前なんか全く相手にもしないんだよ」

そのままばたんとドアを閉めて出て行った。残された二人はまるで言葉の余韻に浸っているかのように無言だった。

恥ずかしさからか、灯は先ほどの平井の言葉に付け足すように話した。

「まあ…そついうことです」

そんな灯の姿を見て、京香も言葉に表せない様子だった。それから灯は京香に事の始終を聞くことにした。

23話

「襲われたばかりで申し訳ありませんが、状況を話していただけませんか？」

「ええ…」

頬を赤らめながらも京香はそのまま素直にあったことを話した。

京香は記憶力が良い。だから犯人の特徴と動きを細かく伝えることが出来た。それを聞いただけで、灯は明らかに人間の技ではないことを察した。

「そいつは…いじくられた人間…いわゆる操られている可能性が高いですね」

「え？」

「京香さんを殺すための捨て駒ですよ。話を聞くだけだと例の殺人鬼ではないです。残している匂いが違います…敵はもつと狡猾で残忍ですから。しかし…京香さんに拳銃を抜かせるとはね。相手も驚いたでしょう？」

「えと…まあ…それが原因で逃げましたが、あのまま捕まえておけば一番良かったですよねえ…」

「あの状況なら仕方ありません…しかし改めて驚かされます。銃弾でナイフの刃を折るなどあなたにしかできない技ですからね…」

灯は京香の拳銃の腕前を評価していた。それは、平井に初めて京香を紹介された時に知ったことだった。

署内でも特設された課で、異能力対策課というものがあつた。そこは火器、銃器の訓練が多様にされていたのだが、京香はそこで前代未聞の記録を残していた。

全銃弾を標的に向かって何秒でどれぐらいの正確さで打てるかという訓練があつた。

その結果、一秒台後半で全ての的を正確に射たのだ。

拳銃とシンクロしている…そんなことを思わせる出来事だったが、それだけではなかつた。空中に飛んでいる的、極めて小さい的、とんでもなく遠期的、速く動的、その全てをどんな状況でも確実に射抜いていたのだ。態勢がどうあれ一瞬でも見たものは外さないのだ。

「信じられない…」

そんな言葉ばかりが飛び交っていたが、平井はそこに無限の可能性を感じた。この先の能力者との戦いに大いに役立つと。だから灯にも率先して紹介したのだ。

京香はごく普通の人間であるのは灯も分かっていた。そして自分とどこか似ていることも…

灯は能力者ではないが、あらゆる面で人体の限界を超えていた。人の潜在能力は計り知れない。そしてそれが個人によってどう影響するかも分からない。能力差があることでスポーツの世界でも頭脳

の世界でも天才と呼ばれる者が存在するのだ。

他人と見ている景色が違う…

京香も同じように異色の存在であったのだ。

銃弾の当たる部分が先に見える、そんな弾道予測が常人の数倍あった。だからどんな不利な態勢でも一度目にしてしまえば、ピンポイントでその場所を狙える。しかしそんな自分の能力を京香は誇示することもなく、逆に抑える方に回っていた。

だから灯はそんな新人時代の京香に話して聞かせた。

「君が自分の力を恐れるのも分かる…でもね、ここぞという時には使わなくては意味がないんだよ。力無き者からしたら宝の持ち腐れだと怒るだろうからね」

「分かってはいます。それでも殺すかもしれないという行為にはまだ…その…抵抗があるのです…」

「使う時とその心を忘れなければ大丈夫だよ。逃れられない宿命というものには逆らえないのだから…君も私も同じだよ。決してそこから目を背けても駄目だ」

「え？」

まるで自分のことでも話すかのようだったが、京香はその一言で決心したのだ。

迷わず、自分の能力を使おうと…

そして今に至るわけだが、ふっきれた京香は予想以上に動いていた。能力を使うと決めてから自らの腕にも磨きをかけていた。いづれくるであろう、自分の能力の使い時まで錆び付かせないために…

そんな日ごろの努力もあるから灯から見た京香の評価は上がっていたのだ。彼女なら自分の良いパートナーとなってくれると…

「腕を切られただけで済んだのは幸いでした。まだまだこれからも灯さんの側で働きたいんですから！」

笑顔でそんなことを話していたが、強がりでもなんでもない。本当に心から思つての発言だった。だから灯もそんな気持ちを裏切ることはしない。

「頼みますよ。銃器において京香さん以上の逸材は存在しないのですから…」

ますます京香を喜ばせる結果となったが、そこをぐつと堪えて、一連の殺人鬼の背景に迫る話を持ち出した。

「灯さん…この文様に見覚えはないですか？」

そう言つてプリントアウトした紙を一枚手渡した。

そこには死体に描かれていたものと同じ模様がはっきりと描かれていた。

「死体に描かれたものと同じものかい？」

「ええ…私も気になつて調べたんですよ。そしたら変な教団名に行

き当たりまして…」

「教団…」

「真実の光という教団らしいです。しかし実在するものかも定かではなくて、表向きに出せるような健全なものかもどうかと…」

その名前を聞いた時に、灯は何かを思い出したようだった。自分の記憶を探るようにしばらく考えていた。

「灯さんの所属する神徒協会とも関連はないのかと思ひまして…」

独断で行った行動ではあったが、灯にはとてつもなく大きな情報だった。だから素直に喜んでいた。

「ありがとう。やはり君は素晴らしい…有力な手がかりには違い無い。これから調べてみるよ…」

姿の見えない相手が少しずつ見えてきたのだから、後手に回っていたものを回避できるかもしれないと思った。

「それならお礼は、デート二回じゃ足りないですからね。覚悟してくださいよ…朝まで寝かせませんからあ…ぐふふふ…」

灯は不適な笑みを浮かべた京香を見るなり、完全回復していることを再認識できてほっとしていた。

そのまま後で連絡すると話して部屋を出て行くと京香は一人取り残された。

「あれね…お礼のチューもなしですか…」

寂しく一人つぶやくだけだった。

一方で、灯は真実の光なるものを思い出そうと必死だった。

どこかで聞いたことがあるのは間違いない。それがどこでだったかだ…

記憶の糸を手繰り寄せる行為は生易しいものではない。時間を掛けてゆっくりとやるつもりだった。帰り道で煙草を口にくわえながら雪の降る空を見上げてた。

24話

市内のビジネスホテルにビジネスマンとは似つかわしくない者が宿泊していた。

時代錯誤も甚だしい格好で、ぼろぼろの上に水で濡れていたのだから従業員も対応に困っていた。しかし金は持っていた。だから渋谷部屋に案内することをした。

「何か御用の際には電話を利用してください」

従業員はお決まりのような台詞を口にして去っていくが、その男の耳には入っていないかった。一人部屋の真ん中に立つと、おもむろに服を脱ぎだし塞ぎきっていない傷口に手を当てた。

あの時はあくまで応急処置にすぎなかった。だからこれから本格的な治療に入るのだ。

「くっ…」

額から汗がにじみ滴り落ちる。ゆっくりと細胞の修復に時間を費やすこと数時間。傷口からの出血はどうかおさまった。それを見て紅蓮も山を越えたことを知り、少し安心した。

「はぁ…はぁ…」

それからあの時の状況を思い返し、敗北感を感じていた。

この国でも最強とうたわれていたはずの八鬼の頭首がこの様では

誰が信頼してくれようか…

怒りを露にしない紅蓮もこの時ばかりは、隠しきれなかった。握り締めた拳でベッドを叩きつけていた。

「あ…物に当たるのは良くないか…」

まるで自分に言い聞かせるように独り言をつぶやいた。それから鬱憤を晴らすかのように、ルームサービスがないのにも関わらず駄々っ子のように従業員に大量の甘いものを用意させていた。

夜中の十二時には怒りも収まったらしく、落ち着きを取り戻していた。それから思い立ったように部屋の電話の受話器を手にするとボタンを押した。

ブルルルルル…ブルルルルル…

コール音が鳴り響きながら紅蓮は早く出るとばかりに険しい表情をしていた。

それからまもなく相手が電話に出た。

「もしもし…」

電話口の相手は見慣れない番号に戸惑いながら出たような様子であったが、紅蓮はお構いなしだった。

「よう！あかりんかい？」

その言葉を聞いただけで、相手は電話を切りそうになった。

「その呼び方は止める！」

言うまでもなく電話口の主は月夜灯であった。珍しく大きな声で紅蓮に向かって怒鳴っていた。そんな灯の反応を知っていたのか、紅蓮は受話器から耳を離していた。

「やあ、やあ…ご機嫌はいかがかな？」

全く関係のない話をしていたが、そんな紅蓮の様子に灯は違和感を感じていた。

だからかもしれない、何かあったのだと察した。

「お前…何かあったな？」

そんな灯の言葉で逆に紅蓮が固まってしまった。

「ははは…何言ってるんだい？そんな訳ないじゃないか…今度一緒に飲む相談でもしようかと思っただけだよ…民でいいかい？」

片言な話し方で、不信感を募らせてしまう。灯も紅蓮が強がる性格だということを重々承知していた。だからこれは、彼の意思表示だと受け止めていた。

「御託はいい…要件を話せ。何かあったんだらう？」

真剣な話口調で紅蓮に問い詰めた。すると、紅蓮もこのままふざ

けるわけにもいかずにしばらく間を置いてから遂に本音で話した。

「負けたよ……」

「え？」

小さくて聞き取りにくい言葉に灯は思わず聞き返した。

すると、紅蓮は頭にきたのか、打って変わって大音量で同じことを話す。

「だ・か・ら・負けたって言うてんだよ！ちくしょあ！」

耳の奥がキーンと鳴り響く。

こいつは子どもか…そう灯がため息をついていた。

「誰に負けたんだ？」

「知らねえよ！どこの誰かもなあ…そいつに一撃で腹を突き刺されたんだよ。素手でだぞ。そんな経験今までにないっつーの！」

言葉がめちゃくちちゃで、灯も理解するのに困っていた。

「落ち着け…馬鹿。何を話してるか分からないだろうが……」

灯も頭にきていたのだろう、なだめるつもりでそんなことを言ったが、逆に逆なでしてしまった。

「馬鹿って言ったあー…うああああ…あかりんがが…俺のこと馬鹿

って言ったあ……」

そんな紅蓮の反応に、いい大人がそんなことでむきになるなど、灯はイラついていた。

「紅蓮……そいつはどんな奴だ？」

落ち着かせようと紅蓮を襲った者の特徴を聞くと、紅蓮はこと細かにその人物の話をした。そこで、灯の知る人物と符号したのだ。

「なるほどな……それなら納得だ」

そんな意味深な発言に紅蓮は食いついた。

「何だよ……お前も絡んでいるのか？」

いきなり素に戻ったので、灯は紅蓮が鎌をかけたのだと思った。

「分かったよ……お前に隠してもしょうがないから話すよ」

観念して自分の知っていることを全て話した。そこで紅蓮も自らの相談内容を話したのだ。そして二人は紛れもなく互いに同じ線上にいることを知ったのだ。

「この手の相談は真っ先に護門徒に行くと思ってたけどやっぱりそうなんだ」

嫉妬心を込めた言葉ではあったが、嫌味は感じられない。

「あのな……俺も八鬼までに話が及んでいるのは聞いてないんだ。だ

からお互い様だろ？こつちが能無しと思われたのかも知れないんだからな……」

「まあ……天秤にかける政府もどうかと思うが……灯はあいつとやりあったのか？」

「いや……直接会ったことはない。だからお前の話が重要なんだよ」

「俺を利用しようとしてるだろう、お前……」

「そうは言っていない……」

押し問答のような二人の時間が過ぎていく。しかしそんな中でも不思議と連帯感が出てくるのは互いに信頼しているからでもあった。

「はつきり言うとな、あいつは強いぞ。負けた俺が言っても説得力がないがな……」

「いや……お前が負けたとはつきり言うのは珍しいからな……だから俺はその言葉のままの意味に取るよ」

紅蓮の実力も認めていた。だから茶化すわけでもなくそのままの言葉の意味で捉えていた。

「そうしてくれ……だがな、あいつは俺が殺す。それだけは譲れない」

強い意志でそのことだけは伝えたいとはつきり話したのだ。それを聞いて灯はふっと笑っていた。こいつは負けず嫌いだっただなと昔を思い返すようだった。

25話

そもそも護門徒である月夜灯と昔から存在する警護組織八鬼との出会いはほんの数年前だったのだ。

「貴様！護門徒だな？」

のっけから大層な言葉だった。しかしそんなことにいちいち腹を立ててはきりが無い。

「はい…そうです。私、月夜灯はこの頭首である、唐津紅蓮氏に会いたくて来ました」

灯は戦争をする気などない。だから丁寧に対応しようとしていた。だが、その言葉が逆に相手を逆なでしていた。

「いい度胸だ。神徒協会と我々が敵対関係にあることを知りながら、ここに来るとはな。まさか、ここを潰しにでもきたのか？」

八鬼の本部であるこの山奥の家屋の入り口にも届かない場所で八鬼のメンバーの一人に足止めをされていた。すると、奥から一人の男が姿を現した。

そいつはどう見ても戦闘向きという人物ではなかったが、物腰がどこか目の前の人物と違う。だから灯は目が離せなかった。

「ここで話すのもなんだから、あがりなよ」

「しかし…こいつは、神徒協会の犬のような奴ですよ？」

「だから？俺が興味があるから、いいよと言ってるんだ。何か？」

圧力は相当なものだ…その言葉だけで、門番のような男はすぐに道を開けてしまった。

「さあ…どうぞ」

灯はそのままその男の後をついていった。

目の前の家屋はお世辞にも綺麗だとはいえなかったが、何も言わずに中へと入った。

「適当に座ってくれ…えっと…君は…コーヒー派かな？それとも紅茶派？」

「え？…なら…紅茶派で…」

「そうかい。奇遇だな。俺もだ。すぐに入れるよ」

普通だったらこの展開なら日本茶が出てきそうだったが、紅蓮は湯のみに紅茶を入れて持ってきた。

「どうも…」

灯は、それを受け取るとすぐに口に入れた。

するとそれを見た紅蓮の目が光った。

「ふふふ…掛かったね。君が飲んだその紅茶には…」

何だ？まさか毒が入っているのか？

灯は一瞬動きを止めてしまった。

「隠し味にブランデーを入れてある」

そんなふざけたことを口にした。しかし灯はそのまま何事もなかったかのように普通にその紅茶を飲んだ。それから一言。

「どつりで…香りがいいと…」

紅蓮はその発言に納得がいかなかったみたいで、駄々をこねた。

「おいおい…リアクションが薄いだろーもつとき、え？まさか！とか、俺を騙したのか！とか、あるだろう？何だよーその反応は」

いやいや…そんな反応しないから。心の中で灯はそう思っていた。

「そんな、せこいことをこの組織の頭首がするはずないでしょ？殺すなら真正面からすると思っんでね…」

灯は冷めた目で紅蓮を見た。すると紅蓮もふつと一笑すると、

「いいね…君。以前の護門徒とは違うみたいだ」

「え？」

「前に就任していた奴は冗談の一つも通じない堅物な奴だね。しかも傲慢というおまけ付きだったから本当にそりが合わなかった」

「前任の奴を知っているんですか？」

「まあね。こんな仕事してれば、自然と会う機会つてのもある…しかしその敬語止めてくれないか？ 気持ちが悪い…見たところ同じぐらいの年だし、お互いニツクネームで呼び合おう！ そうだな…君の名は月夜灯だったな。なら、あかりんだ！ そして俺の事は、グレグレでいいぞ！」

「いえ…遠慮します」

丁重にお断りした。

それから灯は紅蓮と他愛もない話をして、少しずつ打ち解けていった。紅蓮は表裏のない人間で素直に物を言う。だから灯も嫌いではなかった。護門徒という役職を取っ払って、紅蓮と友として付き合い合うようになっていったのだ。それから幾度となく酒を飲み交わしたり、鍛錬をしていた。そのような経緯があったからこそ今のようになくなったのだが、現実として神徒協会から見たらあまり面白くない話なのだ。

26話

紅蓮と京香が襲われたことで、敵も本格的に動きだしていることを知らされた灯は、「真実の光」なる組織の存在を突き止めることにした。

京香が調べられたのは名前だけで、その全貌も人数も把握できてない。京香が独自で作り上げた自動検索プログラム、「家政婦は見た2」でも無理だった結果だ。

だから灯はその名を頼りに裏ルートを遣うことにする。

灯が歩いていたのは高層ビルが立ち並ぶ、都会の中心地であった。

表ざたにならない存在の者たちが巣窟する場所がここにはあった。それはあるうことが都心のど真ん中に隠れるようにではなく、会社として成り立っていたのだ。一際高くて目立つ数十階建てのビルの中に入っているその会社は、経営コンサルトを名乗り信頼と実績を積み上げてきた会社だった。そして多方面からセキュリティが高いそのビルを始め目的の会社の前まで、灯はいつもと変わらない様子で入っていった。

大きなすりガラス状のドアを開くと、そこにはたくさんの机とパソコン、働く人々が芽に入り込んだ。スーツに身を包む者たちが、ドアを開けた灯に別段に気づいた様子もなく、黙々と目の前の仕事をこなしていた。そんな中で暇そうな若い女性が、お客か関係者だと思い近づいてきた。

「何か御用ですか？」

「はい…社長に合わせていただけませんか？私は月夜灯という者です。名前を言ってもらえば分かるはずです」

やさしい言葉でそのように女性に話すと、灯に不信感を抱くこともなく、そのまま奥にある社長室に進んだ。

本来、会社の関係者に会う場合、一階のロビーの受付を通すのだが、灯はこのような場所で痕跡を残すことを嫌がっていたので、裏から回ってきて現在に至る。それが暗黙の了解ということもあったのだから、これから会おうという人物も灯の名を聞いてすぐに反応した。

女性がすぐに戻ってくると、社長室に案内された。

広い室内の一角に存在する大きな個室の中には男が一人立っていた。

「久しぶりですね…灯さん」

「随分と派手に稼いでいるらしいな…」

その男が握手を求め、灯はそれに応えた。

「直接ここに来たということは、緊急の要件ですね…」

「察しが良くて助かるよ。今回の件はこの国を揺るがすものに繋がると…だから早目に手を打たないとんでもないことになると思っ
ね。悪いが協力してくれ…」

「灯さんに助けられ、居場所を与えてくれたんですから私たちは何

でも協力します。この会社にも数名の同士がいますし、裏の情報も逐一報告させてもらっています」

「お前たちが裏の情報屋に回ってくれることで、こちらも何かと動きやすいからな。そこで早速だが、真実の光なる組織を聞いたことはないか？」

「真実の光…ですか、ちょっと待ってくださいね。今照合してみますんで…」

男は目の前に会ったパソコンにかたかたとそのキーワードを打ち込んだ。

仕入れた全情報の中からその言葉に該当するものがあるのか探し出す。

すると見つかったのだ。

「ありましたね…断片的に残っているものを結合させることで僅かながらにですが…」

「それでもいいから、聞かせてくれ…」

たったの数分で見つけ出した男の情報網はすごかったが、完璧なものではなかった。

「世界各国でテロ活動をあちこち誘発させているのがこの組織のようです。それと…うーん…凄いのは自ら手を下さないで、いろんな組織内部に入りこんで組織同士の潰しあいを企んでいますね。その人物の経歴や的確な人数は不明ですが、たった数人で活動している

「ようですよ…」

男は、画面の文面を読みながらその組織の恐ろしさを表情で語った。

「だから探し当てることも困難だったんじゃないですか？堂々と旗揚げしているわけでもないようですよし…」

慰めたつもりであったが、灯はそんなこと関係ないといった様子だった。

「これだけ情報が飛び交う世界で、断片的に見えない組織は危険だと思わないか？」

「確かに…この内容にも驚かされます」

「それはそうと、最近の動きは分からないのか？」

「えっと…ですね…あ…ありましたが、これって私にはさっぱりです」

「何が？」

「名前で、デイド・レオドランドと書かれています。日付はここ最近のものなんです…」

その名前を聞いた瞬間に灯はなるほど一人で勝手に納得していた。

一連の行動を取ってみても高度な能力をもつ者だとは理解できて

もその人物像がまるで見えてこなかった。しかしその名を聞いて逆にほっとしていた。

「灯さんの知り合いの方ですか？」

灯の反応を見て男は質問した。すると灯は当たり前のように、

「その名を調べてみたら分かる……」

と男に再度要求した。言われるがまま先ほどと同じようにパソコンをいじくると、男は絶句した。

「……これは……」

「裏の世界でも有名な人だろ？」

画面に並んだ文字が意味するのは、大量の経歴内容だった。完遂と書かれた内容が数十件も並んでおり、任務失敗の字は存在しない。フリーの殺し屋でも世界最高峰を誇るということが証明されたものだった。

「こいつは……能力者の中でもレベルが違う存在ですよ？私から見たら格が違います。化け物だ……」

同じ能力者としてそう話したが、紛れもない事実だからこそはっきりと答えた。

「それに……能力はどんなものかもここでは解明されてません。恐らくその能力を見たものは死んでいるんでしょう……灯さんは知っているんですか？」

「いや…会ったことはない。しかし話だけは聞いたことがある。冷酷非道な上に金のためなら何でもやる奴だと。主に海外での活動が盛んだっただが、この国にも入りこんだということだ。手口を見る限り相手を絶命に陥れられる能力は備えているな…性格もひん曲がっているに違いない」

「え？」

「挑戦状を叩きつけられたよ。私があんまりにもつかつかしているからな…」

「灯さんに挑戦状ですか…それまた凄い自信の持ち主ですね。私はあなた以上の素質の持ち主を見たことがないですから、分かりませんがこいつも相当の能力を持っているからこそできる行為なんですよ。うね」

「そう思うよ…でも…遅れを取って余計な被害を出している現実だ。だからこいつの方が私を上回っているんだ」

灯は自分の力を過大評価などしない。常に信用ならないものだと決め付けていた。

だから自分よりも強かったり賢い相手がたくさんいるのは重々分かっていた。

「協力できることは何でも話してください。私も全力を尽くしますから。金銭面、情報面でしかお力になれませんが、それでもあなたの力にはなりたいたいです」

最大限の敬意を灯に証明するかのように男の目は真剣だった。

灯はそんな自分のことを慕ってくれる存在が心強かった。

「昔から変わらないその忠義…ありがたいよ。でも私の性格も知っているだろう？だからこれだけで十分だよ。相手の名前を知ることができたのと、組織の存在が分かっただけで大きな成果だ。これ以上は首を突っ込まないでくれ」

灯なりの配慮だった。そうしないと独断で調べ上げて危険な所まで踏み込んでしまうのが分かっていたから抑制させたのだ。

だから男も灯のそんな警告に似た温かい言葉に従うしかなかった。

「分かりました。しかし…困ったらいつでもここをたずねてくださいね」

最後まで協力できない自分に腹立たしさを感じながらも忠誠心だけは伝えた。

それから灯はその会社を後にして、外へ出た。

「さて…こちらからも動くのでしょうか」

そう話しながら灯は一枚の紙を眺めた。そこには、真実の光なる組織のこの国で起こった今までの活動分布図が描かれていた。そこから考えることで拠点が分かるかも知れないと思い、早速動き出した。

27話

京香は襲われた二日後にはいつもと変わらず仕事をしていた。

仕事といっても灯の助手的存在なので、組織の仕事ではなく、個人的に動ける仕事だった。だから時間に関係なく自由に行動し、後々に上司である平井に報告にいけば良かった。

襲われたことで京香の心には小さな炎が灯っていた。能力者を相手にしているのにあの様は酷かった。覚悟がまだまだ自分には足りない…

医務室でそんなことを何度も思い返していたのだ。だからもう迷わないとも決めていた。

そんな心持から踏み出す一歩は力強い、そして灯の元へと走っていった。

「灯さん何か分かったそうで…」

待ち合わせの場所は人通りの多い広場だった。

ベンチに二人で腰掛けながら目の前の噴水を眺めていた。

「ええ…真実の光なる組織が殺し屋を雇ったようです。その殺し屋が一連の犯人という訳なのですが…世界でもAランクの殺し屋で、

名前をデイド・レオドランドといいます」

「その人が、政治家を殺して回っていたんですか？」

「ええ…一人であれだけの大量殺人をやったのけたんです。嚴重な警備も彼に掛かっては意味を成さないようですね」

一人で行った行為というだけで京香の中でデイドの存在がどんどん大きくなっていった。

「紛れもなく能力者…そして任務遂行率は百パーセントで、能力も不明…」

「す…凄いですね」

京香は話だけで気持ちが悪さされ気味だった。そんな京香を灯は見逃してはいない。

この先に一緒に戦えるかどうかを試していたのかもしれない。だが、京香は怯まなかった。

「でも…大丈夫です。私たちも徐々に相手のことが分かってきたじやないですか。それに能力者の一人ぐらいなら私と灯さんでどこにできますって。援護は任せてくださいよ。私が灯さんより勝っているとしたらこれしかないんですから…」

灯はそんな京香の言葉を受けて、一笑した。

「ええ、任せますよ…あなたがいなければ私は勝てませんから…」

それからしばらく灯は知りえた情報を京香に伝え、京香も独自で調べ上げた手がかりを教えた。そこで数十分にわたって行われた議論により一つの結論が出た。

「依頼主の田辺正作を問い詰めましょう…」

そのことだった。

京香は灯に言われるがままに調べまくったのだが、結果彼についての有力な裏が取れなかった。しかし空いたスケジュールに不振な行動を取っていることも分かっていた。

実際に時間はなかった。だから強行突入にすることを決意したのだ。

「灯さんらしくない行動ですね」

「まあそうですね…そんなことを言っている場合ではないでしょう？」

顔は笑っていたが、ここから月夜灯の本質が始まるのだと、京香は少し寒気を感じていたのかもしれない。

政治家田辺正作の一日は多忙以外のなにものでもなかった。

連日で国営に関係する者が殺されたフォローをしなくてはならなかったからだ。それというのもいろんな経験のある正作でなければできない仕事ばかりだったからだ。

実に手際よく下の人間をいや、上の人間までも動かしていた。そしてそれと共にいるんな人間の信頼を確実に得てもいたのだ。

一つのことにはしか特化していない頭の固い政治家とは違い、正作は柔軟で見切りが速い。今正に自分の能力をフルで活用しているかのようにだった。

そんな最中、灯と京香は二度目の訪問を試みたのだ。深夜の田辺邸へ…

忙しくて取り合う間もない正作を正攻法で攻めても追い返されるのが関の山である。だから手荒い方法を取るようになった。しかし流石に国のトップに近い者の自宅は警備も万全である。監視カメラ、警備員の総数はその権力に値するだけの数である。

そんな多数の目を掻い潜るのは至難の業であるが、それを凌駕するだけの能力が灯にはあった。

元々暗殺を目的とした訓練を受けていた灯だったので、ディードに負けない位の素質はある。死角という死角を突いて、人の目とカメラの目を欺いていったのだ。京香はそんな灯の誘導に従うだけで

家の奥まで進むことができた。そして二人の目の前には正作の仕事場のドアが聳え立つ。灯は人の気配を中に感じていたのか、迷うことなくそのドアを開けた。

「む…」

中にいた正作はこんな時間に自分の部屋を訪れる者がいるとも露知らず、ただ驚きの顔を見せるだけだった。しかしその人物が知った人間だと知るなり、強気の状態へと翻した。

「月夜…灯か…貴様、何のようだ？というか、ここに無断で入ってきたな。無礼ではないか！」

分かりやすい返しに灯もため息交じりの気分だったが、そんな依頼主に甘い顔などするつもりは毛頭なかった。ずいっと前に出るとあるうことか敵意を丸出しにしたのだ。

「き…貴様。依頼を無視して私に歯向かおうというのか？私にこのようなことをすれば神徒協会との決議も今後なされないのだぞ」

言葉は強いが心が弱いのはすぐに見て取れた。だから灯はそのまま殺意を緩めることをしない。

ただただ相手の反応を伺うことにした。

「何か嘘についてはいませんか？」

「え？」

しらばっくれようとしたのか、声が上がっていた。だから灯は聞こえるようにはつきりと再度聞いた。

「私に嘘をついていませんか？」

氣迫に満ちたその言葉は相手に重圧を与えた。しかし正作は仮にも一国のトップの人間というプライドがあつたのだらう。このまま氣圧される気はないという心構えだつた。

「何のことだ：私は神徒協会との義理を果たすためにお前に依頼をしたまでだ。国の危機には最高責任者の護門徒が請け負うということとを約束されたのだからな：そこに何の間違ひがあるというのだ？」

正論を述べて自らの身を庇おうという魂胆も分かっていた。だから灯は静に怒りを抑えていた。

「確かに：そこはあなたの話す通りだと思います：しかし…」

そこまで話すと、灯はあろうことか依頼主である正作の胸倉を掴むとそのまま壁に叩きつけた。

老人に近い軽くて弱い体など灯からしてみれば片腕で十分だつた。枯れ木でも扱つかのように軽々と持ち上げると、壁から身動きができないように押さえつけていた。

「あなたが国の混乱の片棒を担いでいるなら別だ！いい加減、本当のことを話せ！さもなければ私があなたを跡形もなく解体するまでだが？」

急激に殺意を開放したものだから正作は耐えることができなくなつていた。下手すればその勢いだけで失神するだけだつた。

だが、そこまでには至らずどうにか踏みとどまっていた。

「や…止める…こ…殺さないでくれ」

先ほどまでの態度とは一転して弱い言葉に変わっていった。しかしそれはごく自然な行為でもあった。灯という男の本当の殺意を間近に感じてしまったら、何人たりとも耐えることはできないのだ。

「正直に話せ…誰と通じている？」

力を緩めて正作を地面に落とした。

一時の苦しさから開放された正作は、咳き込みながら必死に呼吸を整えた。

「こほ…はあ…はあ…はあ…し…真実の光という教団だ」

その言葉を聞いて、やはりかと灯の抱いていたものが確信に変わっていた。

「取引をしたのだ…この国の権力を得るために協力することを…」

「それでか…予期できた事態だから、あなたは様々な分野において迅速に対応できた。そうすることでいろんな者の信頼を獲得し、亡くなった政治家の持っていた地盤までも吸収した…」

うなずきはしなかったが、灯の話すとおりだということは明らかだった。

京香はそのことを聞いて苛立った。

「ふざけないで下さい！自分の出世欲のためだけに何人の命を犠牲にしたと思っっているんです！あなたは最低です。今すぐに政治家など辞めた方がいいです」

珍しく声を荒げる京香をなだめながら、灯は話を続けた。

「真実の光は何を企んでいる？」

「それは…護門徒を始め、神徒協会を壊滅させることらしいが…私も詳しいことは聞かされていないのだ…ただ、大人しく従えばいいとだけ知らされていたのだから…」

「あなたの浅はかな考えは置いておいて、彼らは危険だ…このまま野放しにしていたらこの国はあっという間にひっくり返される。不意な攻撃に対応できていないのだから…それで、あなたはどうやってその教団と接触した。知っていることを全て話してもらおうか」

灯が真実の光のことを聞き出そうとしたその時、正作の言葉をさえぎるように誰かの声が部屋の中にこだまする。

「それは駄目だよ…教えられるはずがない」

29話

「それは駄目だよ…教えられるはずがない」

気配を感じることもできなかったので、灯は焦りながら周囲を見回した。

だが、どこにも声の主の存在はなかった。

四方から聞こえる声はその場の全員を惑わし、恐怖を与えた。

「おしゃべりな奴は嫌いだ…」

誰のことを指しているのかは分からなかったが、その言葉の意味はその後すぐに分かった。

ずばっ！

鋭利な刃物が肉を切り裂く音が響き、何かが床を転がった。転がったものを見て京香は悲鳴を上げるのを必死で堪える。

それは正作の頭だった。胴体から切り離され、頭がごろごろと勢いよく転がる。

灯はすぐにその場から離れた。

京香も支配されそうな雰囲気から逃れるように壁に背を付けて警

戒する。何者かがこの部屋に入り込んだのだろうか、その姿を捉えることが出来ずにうろたえていた。

灯は意識を集中し、正作を死に追い詰めた者の軌跡を探した。相手が悠長に待ってくれるはずもないから、数秒でその行為をしなくてはならなかった。迷いは多少あったかもしれない。しかし灯は殺し合いの中では冷静だった。それから大気の僅かな乱れ、流れを肌と感じ、次に来るであろう死の一撃を見極めた。

「くっ…」

突如大きく体を反らし体勢を崩す灯を京香は不思議な目で見ていた。

誰もいないのにいきなり灯が動いたからである。しかしそんな灯の行動で、誰かがここにいるのは違いないと判断した。

姿が見えないというだけで…

「灯さん！」

京香は声を上げて心配したが、灯は大丈夫といった様子でそこを動かないように指示を出した。灯は転びそうになるものの正作の机に手をついて踏ん張っていた。

「勘のいい奴だ…」

声だけが聞こえ、気配は相変わらず感じなかった。じりじりと何かが迫ってくるのは分かっていたが、肝心の姿と気配がしなくて流石の灯も切り刻まれることが目に見えているとも相手は思っ

た。

それは油断だったのかもしれない。自分が有利に立ったと戦況を見て勝手な判断をし真つ先に動いた。

灯という男の本質も知らないで…

見えない人物が正作を切り落とした武器を灯目掛けて一直線に振り下ろす。

大気が切れ、その音も微かにするが、人間の耳に入るはずもない。しかし灯は聞いていた。五感の鋭さは人間を凌駕しているのだから。

大体の場所を把握すると、先ほどよろけた時に正作の机から失敬しておいたペーパーナイフを迷わず投げつけた。

弾道のように目にも映ることを許さないその速さは見えない相手を驚かした。

「な…」

今度は立場が逆転し、そいつはぐらりと態勢を崩してしまった。しかし直撃を避ける行為としては上出来であり、ほっとしていた。しかし灯の本当の目的までは読めなかった。

標的を逸れたペーパーナイフはそのまま部屋の電気スイッチに突き刺さったのだ。

その瞬間、部屋は暗闇に変わった。

そのせいで見えない相手は灯の姿を見失ってしまったのだ。

その後の灯の動きに無駄はない。手にしていたのはペーパーナイフだけではなくメモ帳台におかれた万年筆もあった。

暗闇に変わると同時に相手の背後に回りこむと、首筋に突き刺したのだ。

「ぐあああああああああ」

叫び声が暗い部屋の中に響き渡った。

京香には訳が分からず、灯の指示通りに動かずじっとしているだけだった。そして何かが動き回っていることしか分からなかった。

それから灯はスイッチの所に行き、明かりをつけた。するとそこには鮮血が撒き散らされた光景が広がっていた。

「ぐ…はあ…はあ…」

空中から何故か血が流れ出す。そこで京香もそこに誰かがいるのだとはつきり理解した。

「ま…まさか…そんなに速く…行動できるとは…」

出血量から見てもその人物は確実な致命傷を負っていた。

「お前…真実の光の手のものか？」

灯はその人物の前に立ち、聞き出そうとした。だが、相手はそんな質問に聞く耳を持たなかった。

「つ…月夜…灯…これほどの実力の持ち主とは…誤算だった…」

「話せ、お前らはどこに存在する？」

「それは…無理な質問だ…任務に失敗したら…死ぬだけなのだからな…ぐ…はあ…」

出血が止まらなかった。それは動脈を傷つけられたことの証でもあった。

「持つて後…数分か…それなら」

何も語ろうとしない暗殺者が最後の暴拳に出ようとしたのも灯には分かっていた。だから相手の次の言葉を待たずに京香を抱きかかえると、窓ガラスを割って外に飛び出したのだ。それから時差で正作の部屋から爆発音が炸裂した。

自爆用の爆弾が爆発したのだ。

息もつかせない攻防に京香の脳内は容量を超えていた。自分の今の状況を整理するまで時間が掛かってしまった。

「はあ…はあ…」

呼吸も自然と荒くなり、落ち着かせようとしていると、灯は優しく声を掛けた。

「ごめんね…まさか、いきなりあんな展開になるとも思わなかったから。でも良かった怪我がなくて…」

そつと降ろすと、灯はそのままこの場から急いで離れることを提案した。

断る理由もないので京香はただ黙ってその行動に従った。

暗闇を二人で駆ける光景は月明かりに映し出されていた。

爆発音を聞きつければすぐに誰かが駆けつけ、面倒なことになってしまう。だから一刻を争うと灯は思っていた。

並みの人間ならそこまで気が回ることはなく、現状に動転し立ち尽くすだろう。

30話

正作邸から数分離れた場所にある公園で一息つくことにした。ベンチに座って待っている京香に灯は温かい缶コーヒーを差し出した。

「あ…ありがとうございます」

いつものような元気はなかった。

京香の隣に座ると、灯はコーヒーを一口飲んだ。

「これが…私の世界だよ」

隠すこともなくそんなことを口にした。

それを聞いて京香は何も話せずぎゅっと、もらった缶を握り締めた。

「知ってますよ…だからって、私は逃げませんから。絶対に…絶対に…」

自分を奮い立たせるように話したが、若干の弱弱しさもあった。それを灯は察してか、

「いいんだよ。強がらなくても…君の決意は知っているから。強がって死ぬのと、決意を胸に逃げるのでは意味が違うから」

「え？」

「非情かもしれないが、もしも君がまずいと思ったなら逃げ出していんだよ。そのことだけを覚えておいてくれ…例えば私が殺されてもね」

「いや…それは…」

「そうしてくれないと私が困るんだ。君の実力を知っている。だから適わないと本能で考えたら逃げるんだ…果敢に立ち向かうことだけが全てじゃない。勇気じゃないんだ」

真実の光の実力を見込んでの発言だと京香は思った。しかし灯がそんなことを話してくれたから吹っ切れることもできた。自分の命を賭しても相手を倒そうと意気込んでいたから尚更だった。どこか安心した。そんな感じで京香の表情は柔らかくなっていった。

「なら…そうですねえ…やばくなったら逃げますよ。でもその時は恨まないでくださいね。愛する人の命令に従順に従っていると思っ
てください」

「ふふふ…」

いつもなら受け流すところだが、京香がどうにか踏みとどまったことを嬉しく思っていた。優しい笑みを浮かべていた。

「君は強い…普通なら一度決意してもそれは上辺だけで現実を見ればごろっと変わってしまうのだからね。これからもこんなことが日常茶飯事。だから君にも良い経験になったとも私は思うよ」

そんな実技研修のような感じで話したが、京香も真摯にその通りだと受け止めた。

「灯さん…聞いてもいいですか？」

「ん？」

「何で、あいつの位置を特定できたんです？透明人間で気配も武器も見えなかったのに…」

「ああ…あれかい。大気の揺れる感覚、絨毯の踏まれる足音と擦れる位置、それを全て捉えられれば出来ることだよ…そして相手は普通の人間同様に目に頼っていたから暗闇にしてしまうことで状況を同じにしてやったんだ」

なるほど、と京香は納得したが、そんなことを簡単にやってのける灯のことをますます尊敬していた。

「やはり…異常に五感が研ぎ澄まされているんですね」

「ああ…私は暗闇でも戦えるからね」

さらっと話すが誰にも真似できない。

「それで、依頼主の正作さん死んでしまいましたか、どうしますか？」

「そうだね…秘書の木元がいるからそこを探ってみよう。何かを知っているかもしれない。あの屋敷を出入りしている関係者全員も調べないと…敵は手段を選ばないから迅速に動かないと被害者は増える。京香さん…明日一日で正作の会った人物を洗い出してください」

そう告げると灯は立ち上がりまたどこかに向かった。

31話

京香は再び灯との別行動になり、不機嫌だった。

肝心な時に自分はこのまま居残りになってしまふのだろうか…そんないらいらもあつてか、地下の射撃訓練所へと向かう。これは京香の日課でもあつた。自分の能力は知っていたが、錆び付かせては意味がない。いつ何時も同じ力を用いることができれば、そんな能力は宝の持ち腐れなのだ。だから鍛錬を怠らない。

特設されたこの場所は、あらゆる武器が使用できる。能力者と対等にやりあうために必要な訓練をするためにはもってこいであつた。昨夜のことを考えつつ、気を引き締めながら短銃を握り締める。そんな京香の前にはあらゆる種類の銃がばらばらに並べてあつた。口径も違えば、装填方式も違う銃が五丁。これがいつもの京香の訓練方法であつた。

どんな体勢でも、どんな銃でも確実に的を射抜く。その力を落とさないための一つの課題である。

的までの距離は三十メートル。強風まで自動設定で吹かせていた。この射撃場は通常と違い、四方八方からのホログラムで出現する。そしてその的を銃弾で射抜くとコンピューターが分析し、成功率を計測し結果として出してくれるのだ。

常人なら秒間一枚から二枚の割合で出される的も京香はその倍の四枚の設定にしていた。

達人の域ならそれぐらい可能かもしれないが、打っただけで精一杯

なのが現実である。しかも強風では弾道もずれしまつから困難なところの上なしである。しかし京香はそれを平然とやってのけた。

あらゆる銃でことごとく的を正確に射抜き、違う種類の銃にも即座に順応していたのだ。

正に武器と肉体が一体化しているかのごとく、標的を撃破する。その姿は普段のふざけた態度から想像もつかなかった。数分後には全弾を撃ち切り、側に置いてあったペットボトルを手にすると、それを飲んだ。

「ふうー…」

集中力を極限までに高めていたらしく、どつと疲れが押し寄せた感じだった。椅子に腰掛けると、スピーカーから全弾命中の音声が流れた。

京香はそれを聞くまでもないといった様子であった。なぜなら、銃弾を放った瞬間に感覚で当たるか否かは分かっていたのだ。

そこへ、平井がひよっこりと姿を現した。

「よう…相変わらず熱心なことだ」

相変わらず仕事をしているのかどうか分からない様子であったが、京香は慌ててくつろいでいる姿を直した。

「しっかし…凄い腕前だな。お前ほどの逸材は今まで見たこともないぞ？能力者でもないのになあ…」

「ありがとうございます…」

「田辺正作が殺されたんだってな…灯から聞いたよ。だけど怪我がなくて何よりだ。能力者が絡んでいけば無傷で済まされるはずがないからな…そこでだ、お前一人では難儀だと思って俺も調べておいたぞ…」

「え？」

そこまで話すと正作の身辺調査の結果の入った調査書が詰まった封筒を置いた。

「頭脳もぴかーだが、今はその射撃の腕をあいつの役に立たせるんだな…」

平井はそのまま無駄話をすることもなく階段を上がって姿を消した。

「平井さん…」

そんな平井の背中を見守りつつ、京香は一言呟いていた。

「私に惚れているんですね」

そんな勘違いを抱きながら京香は後片付けをした。

灯は昔のことをふと考えていた。

真実の光なるものの存在とどこかで接点があったのか…

微かに残る記憶にその名はどこかに存在していた。だから反応したのだ。だがはつきりと思い出せない。記憶違いなのかとも思うが、それだけでは済まされない気がしていた。

以前と違い殺人事件は起こらなかったが、逆にそれが不気味にも思っていた。正作が真実の光と絡んでいるのなら、あいつを利用して国でも乗っ取ることを決意していたのだろうか？しかしそんな正作も殺され目的を失ってしまった。

だとすすれば、正作はもう用済みか、関係なかったということになる。灯はいろんな展開を想定してみたが、いまひとつ結びつくものがなかった。はつきりと分かることは神徒協会を潰すということだけだが、どうやってやろうとしているのか…

だから灯は時間の猶予があるかどうかは定かでないが、殺された政治家の共通点を探すことにしたのだ。慣れない機械と向き合いながらそれぞれの行動を細かく洗い出す。

アナログ人間の灯からすれば、こういうときに京香の存在はありがたいものだった。だが、彼女にも別件を頼んでいるので、ここは何とかしようと思っていた。そして三件目にしてようやく一筋の光を見ることができた。政治家が関わっていた仕事の一つに「加田木ダム計画」というものがあったのだ。表向きは普通のダム建築と変わらないものなのだが、何かを隠すかのようにカモフラージュされていた。

裏の裏まで詳しく調べ上げると、灯が行き当たったものは加田木

山の伝説の一つだった。

昔から言い伝わる伝承にこの地には凶悪な鬼が住んでいたというものだが、いつの時代かは明白ではない。五メートル程の巨人の鬼が大暴れし、村を丸ごと消滅させたり、山を崩壊させたりと暴れまわっていたと書物に残っていた。そんな絵空事のような出来事を最後に締めくくったのは、高貴な退魔師らしいのだが、その名は分からなかったし、曖昧な表現にしか表されていないかった。

その巨人の鬼は殺すのではなく、その地へ封じ込められたのだ。殺すのは不可能な位の力を持っていたことが伺えたが、所詮は伝説にしか過ぎなかった。しかし灯はこの世界に存在する異能力者のことを考えれば、そんな輩が存在したとしても不思議ではないとも思っていた。それが昔なら誇張表現されていても無理はないとも。

つまり加田木の土地に強大な力を持つ能力者が封印されたということだと端的に話をまとめていた。そんな人物がいる土地へ関与される者が次々と殺されるのにも理由があるともそこから導き出し一つの結論に達する。

そこから考えられるのは一つだった。その伝説の鬼を復活させようとしているのだろうか。

真実の光が神徒協会を滅ぼす切り札として、その生物兵器を使おうという魂胆が見えてきた。しかし何故、政治家は真実の光に協力をしようと思ったのだろうか？

そんなことも考えつつ、一連の報告を京香にも済ませたが、京香も正作の行動を調べてその事実にとどり着いていたところだった。そして二人が決めたのは加田木の山へ向かうという結論だった。

32話

木元は一人加田木の地を踏んでいた。

灯の予測通りにここには人ではないものの存在があったのだ。大地の奥深く埋められたそれは、ダム計画という名の大規模による掘削作業で存在の片鱗を見せていた。

何年封じられていたのかは木元にも分からなかったが、側にいるだけでもこいつが生きているということは、はっきりと分かっていた。人外なる強大な力を持ち、威圧感まで漂わせる…もしも完全に自分がこいつを従えられたらそれこそ世界の全権は自分の者だとも思えるほどだった。

「月夜灯…お前と出会う時までにはこいつは起こさないでおこうか？」

余裕からそんな言葉すら漏れてしまった。駒が揃った喜びと、この国の崩壊を確信したために出てしまう笑みも隠せなかった。

「神徒協会…許すものか…お前らに虐げられた能力者の恨みを今思い知るのだ」

木元はふるふると震えながら過去を思い出し、それからこれから訪れるであろう絶対的な自分の勝利に酔っていた。そうやって過去の自分を思い出すことで、達成感も大きなものとなるのだ。

木元の目の前には封じられた魔人が眠りから覚めるのを待っているかのようだった。

「首尾はどうだ？」

背後からデイドが忍び寄った。機嫌の良い木元の様子からも特に警戒するものはないと思っていた。

「悪くない…ここまでは寸分の狂いもなく進んでいる…京香という小娘を仕留めそこなったのも大した痛手ではない。こちらのカードを全て切ればそんな小物も一瞬で姿を消す」

「大した自信で何よりだ…だが、月夜灯は私にやらせてくれる約束だよな。そこは反故しないでほしいのだが…」

「その契約は守ろう。君も裏世界での一番を決めたいところのようだからな」

「ああ…彼に纏わる話はいろいろ聞かされ正直イラついてはいるんだ。自分が行った仕事内容が陳腐に思えるほどな…その月夜灯を殺したとなれば私の評価も格段に上がるさ。まあ、私はそれで満足なのだがあんたはあくまで神徒協会の壊滅を望むのかい？」

「そのつもりだ…あいつらを地獄に葬り去ることができればそれで構わない…その後のことも深くは考えていないさ…」

「この地に住む悪魔を蘇らせてまですることなのだから、確かな覚悟だな…しかし何故、そこまで神徒協会に固執する？」

そこまで話すと陽気だった木元の表情が一変した。それを見てしまったデイドも今の発言が失言であったことを知らされた。

「余計な詮索はしないでおこう…それにしても策略家として活躍す

るよりも暗殺者の方が向いているのではないか？あんたの威圧感
並ではない……」

生粋の暗殺者にそこまで言わせる木元の気迫は凄まじいものであ
ったのだろう。デイドが身を引いてしまっただったのだから。

「くだらないおしゃべりはここまでだ……そろそろ客人がここに向か
っている。君は月夜灯と……ん……もう一つ大きな気配を感じるが……」

木元は森の奥から独特の赤いオーラを放つ者の存在を感じ取っ
ていた。感じたことのない殺気に戸惑いすら見せていた。

それはデイドも例外ではなかった。そして舌打ちをして浮かな
い表情をしていた。

「生きていたか……」

知っていたような口ぶりに木元は質問した。

「誰だ？知り合いか？」

「ああ……殺したと思った相手だ。あんたもよくご存知の唐津紅蓮だ
よ……」

その名を聞いても木元は動じない。所詮は怖い存在ではないと頭
から決め付けていたからだ。

「ほう……仕留め損なっていたのか……お前らしくもないな」

「そのつもりはなかったが、運が良かったんだろう。私もあの時、

そこまで気持ちが入っていなかったから死体を確認するまでしなかった。感触だけで殺したと思ったただけなのだから…」

「暗殺者にプライベートか…そんなもの存在するのかい？」

からかっているかのようにデイドに話しかけたが、本人は笑えなかった。

「気の緩みが生んだ結果だ…プロとしてあるまじき行為ではある」

恥じているかのように思ったが、木元はそんなのは大したミスではないと庇ってくれた。

「ここで完全に殺せばいい。あの時は君もプライベートでの出来事なんだ。多少の気の緩みもある…殺す気で最初から挑めばそんな悩みも解消されるだろう…」

「それは分かりやすくいい…今度は五体をばらばらにして死を確定してやるさ…」

「頼もしいな…しかし月夜灯との連戦に耐えられるだけの余力は残しておいてほしいものだが？」

確認の意味でそんなことを聞いたが、愚問のようだった。デイドは「三分で終わらせる」と紅蓮が何の足かせにもならないことを公言した。

「口だけの奴はごまんというが、君はそうでない願うよ…」

木元が激励とは違った言葉を掛けると、デイドはすぐに紅蓮の

いる場所へと向かった。

そんな走っていくディードの後姿を木元はどこか冷ややかな目で見ていた。

33話

唐津紅蓮が何故ここにいるかという話をすると数時間前に遡る。

きっかけは灯の電話であった。

灯はこの地にある伝説の情報を集めるべく、紅蓮にも連絡を取ったのだ。紅蓮は仮にも八鬼という千年近く存在する組織に在住していた。それならば、このような類には強いのではないかという灯の単純な発想だった。しかしその考えは間違いではなかった。紅蓮はその手の話に詳しかったのだ。

唐津家は代々としてこの国で起こった不可思議な事象に細かく資料を残していた。再度同じことが起きても対処できるようにという配慮であったが、一番にあったのは八鬼が国務を預かるものがさじを投げるほどの異能力とたくさん渡り歩いてきた結果であった。

積み上げてきたものの重みは計り知れないが、それが現代にまで残っているのは凄いなと灯は感心すらしていた。神徒協会は過去の事件等の細かい記載など一切することもせず、常にその場の対応をすることしかしなかったのだ。

そんなお役所体勢の組織に灯も頭を悩ませながら紅蓮の話を聞いていた。そして電話口で紅蓮は自分の知りうる話を全てした。

「加田木の異能力者といえば…初代が封じた黒い悪魔だろうな…」

「悪魔？西洋のものなのか？」

「いやいや…言葉のあやつて奴だよ。何でも名称付けるの好きでしょ？俺があかりんと呼ぶのと一緒だって…」

「気持ち悪いから止めると何度も話したが、誰かさんは全く聞く耳を持たない…」

「まあ、まあ…それで、その黒い悪魔ってのは最強とまで呼ばれた初代唐津藤十郎を相当苦しめたらしい。一説によれば藤十郎は右腕を持っていかれたらしいが、それが封印の鍵にもなつたらしいのさ…」

「右腕犠牲にして、それを封印の代償にしたってのか？」

「多分な…だが、八鬼ってのは封印術といった退魔の類はない。だから動かせなくしたつてのが本心だろ…そんな程度だからその黒い悪魔とやらを復活させるのも手間ではないさ。しいて言うなら地中深くに沈めたその人物を掘り起こす金の心配だけだな」

それも政治家が協力すればあっさりと解決できるのだと、灯は心の中で思った。

「しかしそんな危ない奴を生き返らすのによく手を貸したものだ…」

「それも京香さんが裏を取ってくれたよ。どうやら莫大な見返りを与えられたらしいのが一つにあるが、本人たちもそんなものが埋まっているのかは知らされていなかったらしい。名目は古代遺跡の発掘らしい…」

「金に目がくらんで手伝っていたが、殺されては意味がないな…最初からこの件に関わったものは殺すつもりだったんだろっな」

「ああ…私の依頼主も最後まで生かされていたが、それもこの国を動かすためだけの駒として利用されただけということだ…これからその場所に向かおうと思うのだが」

そこまで話すと、紅蓮は当然行くよと返答した。いつになくやる気を出している態度に意外とも思ったが、デイドとの出会いが忘れられず齒がゆい思いをしたのだろうと察した。

34話

こうして紅蓮はこの地を踏んでいるわけだが、雲行きがどんどん怪しくなる山の雰囲気警戒心を抱いていた。かつて初代の唐津藤十郎が右腕を犠牲にまでしなくては抑えることのできない猛獣がいるのだと思うとそれだけで、気が引き締まるのだ。

山道は歩きなれていたが、畏が存在することも想定しながら動き回っていた。

夕刻のこの時間帯はまだ暗闇というほどではない。だから足場を十分確認できる余裕はあったから目的の人物に出会う前に怪我を負うこともなかった。

気配でデイドがいることは分かっていた。奥に進めば進むほど、相手の気配は大きくなる。そして彼は待っているのだと思った。木々の間を潜り抜け、山の中腹までたどり着くと紅蓮の予想通りにデイドはそこに立っていた。

まるで遅かったなと言わんばかりに不適な笑みを浮かべていた。その表情を見るなり、紅蓮も自分のことなど眼中にない存在と決め付けているのだと認識した。

「どうして俺を待っていた？」

紅蓮のその問いにもデイドはくすくすと笑うばかりだった。

「自分の完璧な経歴に汚点がつくような行為が目の前にあつたらどうする？見逃すことはしないだろ？そういうことだ…」

紅蓮を生かしてしまったことを汚点だと言いたいらしかった。そんな挑発にも紅蓮は乗らなかった。

「あの時はお前が八鬼の頭首、唐津紅蓮だとは気づかなかったからな…あっさり殺したつもりでいたよ。しかしそのしぶとさは評価しよう。正面から出会った者が、二度私の正面に立つことなど依頼人以外に有り得ないのだからな」

余裕からであろう。そんな軽口も叩いた。

「しかし…木元には聞いていたが、手を合わせて正直がっかりしたものだ…あの程度でこの国の警護役を長年預かっていたというのだから」

「木元というのはお前の雇い主か？」

「そうだな。ここまで来たのならお前もある程度の話聞いてはいるだろう。真実の光は神徒協会と戦争をするのを目的としているよ。うだ。それは容易な事ではない。だからまず手始めにこの国を落とすことを考えた…最強の兵器までも手にして」

「黒い悪魔のことだな…」

「封じられているものはそういう名称がついているのか？しかし私にもあれを手なずけられるかは疑問だよ」

「随分と客観的な意見ばかりじゃないか。そういうお前は何を企んでいる？」

「企むも何も…組織同士の戦いは勝手にやってくれと思っている。」

私は裏の世界での最強の称号が欲しいだけだからな」

割り切った態度だったが、そこに騙そうという意味はなかった。

「そのためには月夜灯を殺さなくてはならない…お前のような小物に構っている時間は勿体無いが、先も話したとおり自らの経歴に傷はつけたくないからな。ここで生かしておいたままにしたら信用問題に関わるのだ」

「ほう…まいったな…そこまで言われると笑えてくるよ。お前と話をしていると俺がどんどんか弱い存在に思えてくる…」

事実そうだろうとデイドは無言で訴えかけていた。

「なあ、どうしたらお前の驚く顔が見れるんだ？」

何を馬鹿なことをと言いかけた瞬間に紅蓮は一気に間合いを詰めて、首を刈り取るような蹴りを放った。が…それを読んでか、まばたきをすることも体勢を崩すこともなくデイドは重い一撃を右手の甲で受け止めていた。

「嬉しいよ…再びお前に絶望を味合わせることができるのだからな…」

そしてその発言が開戦の合図となった。

35話

京香と灯は二人で目的の場所を目指していた。紅蓮と同時期であったが、灯たちのほうが木元の場所には近かった。灯の身体能力に京香はついていくのが精一杯であったので、山を駆け抜ける速度は少し遅かった。

そんな中で木々の中から不意に何かが灯を狙った。

音はせずに飛んでくる鉛の塊。夢中で走っている人間なら気づくこともないその一撃も灯は感じてひらりとかわしていた。ばすつと生木にめり込む音だけがその後には響いた。そこで京香は誰かに狙われていることに気がついた。

二人はその場から急いで離れると、草陰に隠れながらその場を見回した。

どこから狙っていたのか場所を特定しなくては動くのが危険だからだ。しかし肝心のその主の特定ができないのは気配を完全に消している証拠だった。それだけを見ても灯は暗殺に長けている人物の動きと判断し、すぐに飛び出ることを控えた。

灯と京香は固まっただけでは狙われやすいことを知っていたので、同じ場所にはいなかった。声を出すとそれだけで相手に場所を特定されてしまうこともあり、灯と京香は手話で会話をしていた。そして京香は手で、私に構わず先に進んでくださいとサインを出した。それを見た灯は少し悩んだが、京香のことを信頼していたから自分が先に動くことを決意した。

抑え気味であった灯の移動速度を最大にすることで、標的を絞る

ことは難しい。灯が通り過ぎた後に先ほどと同じ乾いた音だけがこたましていた。

三度見れば京香も相手の場所が特定できた。そこに京香の愛用の一つであるベレッタM92の弾丸を二発撃ち込んだ。

威嚇になったのだろうか、その反動で灯を狙うことはできなくなっていた。そのかいあって灯の姿はどんどん小さくなりそのまま安全圏内まで移動を完了させることができた。

静けさの漂う中に一人取り残された京香はぎゅっと自分の胸を押さえつけた。

プレッシャーに負けてはならないと…

そんな京香の気持ちとは裏腹に、灯を仕留めそこなった人物は、舌打ちをしてその姿を惜しげもなく現した。

「おい…そこに隠れてるんだろ。出て来いよ」

京香のいる場所をはっきりと指定し声をかけてきた。それには驚きを隠すことができなかつたが、京香は平然を装って立ち上がった。

迎えるその人物は以外にも京香と同じ女性だった。身長は百七十を超えるであろう長身で、金色の短髪。両腕には刺青が施してあり幾多の戦場を駆け巡ったような風貌をしていた。

「へえ…あなたがあの月夜灯の右腕かい？これはこれは…かわいい娘さんだあ…」

年齢は京香よりも少し上というところであったが、西洋人のその

人物は何歳か分からないぐらいに大人の女だった。なめまわすように京香を見ると、がっかりした様子だった。

「木元もやきが回ったのかねえ…こんな弱そうな奴を私に相手させるなんて」

「え？」

「月夜灯に関わった者を全て殺すことが目的だとしても…酷すぎるな…これでは私も理性が抑えられそうにないよ」

意味不明なことを口に出しているので、京香もどうしていいのか分からなかった。しかしその答えはすぐに分かった。

「満足できない相手だと…私の火照った体を押さえることができないからとつても惨忍になりそうだよ」

ぞくりと京香の背後を何かが這っていく。雰囲気だけでも飲まれそうだが、京香は怯まない。寧ろ覚悟が決まった。ここは戦場だ。弱いものは殺される…私は無駄に殺されるためだけにここにいる訳じゃない。そうだ。やってやろうじゃないか。

逆境に強いとはこのことで、京香の心にも火がついたのだ。

「へえ…脅しにも屈しないのは褒めてあげるよ。でもね。ただの間と私のような能力者じゃ力は雲泥の差だ。見たところあんた、殺しの経験ないだろ。どこまで足掻けるか楽しみだ」

するとどこから出すわけでもなくすつと両手にナイフが現れた。いや…手がナイフになったのだ。

「私はね…あらゆる武器と同化できる能力があるんだよ…銃だろうがナイフだろうが、剣だろうが一度手に触れたものをね…どうだい、何も知らないで死ぬよりはいいだろ？」

まるでウサギを狩る猛獣の立場を振りかざすようだった。しかし京香はただのウサギではない。自分の武器をひたすら磨き続け、自分よりも強いものに挑む勇氣のある小動物なのだ。だから銃身を女に躊躇することなく構えていた。

「あなた…名は？」

「京香よ…」

「私はジュラスよ…さあ、お互い楽しみましょう？その身を真っ赤に染めながら…」

36話

灯はあれから木元の前に立つことができていた。京香が足止めをしてくれたことは大きかった。ものの数分で目的地まで到達できたのだから。

目的の場所は山頂に近い開けた所で見晴らしもよく、掘削の跡があちこちに見えていた。

その中の一つに例の怪物が眠っていることも知っていた。どこなのかは分からないが木元が立っている側にあるのあらうと思っただ。

木元は灯が目の前にきても嬉しそうな素振りは見せなかった。ただ空ろな目で灯を眺めるだけだった。そして手には木元には似つかわしくない刀まで握り締めていた。

灯も木元という人間が良く分からなかった。素性を隠し何度か会った時には、他愛もない会話もした。笑顔も見せていた。人間味もあったのだからこの変わりようについていけなかったのだ。

「木元：私個人がここまでお前に恨みを買った覚えはないが？」

何から話していいのか分からず、灯はそんな言葉が浮かんだのだ。

「お前に恨みなどない。お前は次のステップの踏み台に過ぎないのだから。そう、神徒協会壊滅のためのな。しかしこの場所ではなくてはならないんだ」

「かつて八鬼の創始者であった唐津藤十郎が押さえ込んだという魔

人のことか？」

「ああ、そうだ…この国を落とすことを考えたのはそのこともあったからだ」

「あれが人の扱える代物だと思っっているのか？我々にすら古代の異能力者のことなど何も解明できていないのだぞ？下手すれば世界を壊滅させる行為に繋がるかもしれないのに」

「くくく…そこまで私も浅はかじゃないさ。掘削作業の傍らでこいつの分析は済んでいたからな」

「分析だと…」

「ああ…それが私の異能力だ。あらゆる分析と解明。この力があるからこそ、人心掌握、策略を打ち出すことができる…そして悲しいかな…非力なのだよ」

「解せないな…そこまで自分の能力を認めておきながら私と対峙するなど」

非力と名乗っているのに、仮にも最強の称号を持つ月夜灯と正面から向かい合う理由がなかった。しかし勝算のない戦いをこの男がするはずはないと灯は考えていた。

「そこから考えて、どうして私がここに立っている分らないか？」

自分で考えてみるとばかりに話すと、灯の脳裏に何かが過ぎった。

「まさか…」

「お前との実力差を認めながらもここに立っているのは、私がお前に対抗できる力を付けたからだ。しかし何もしないで急に力を得ることができると思うか？できるはずはない。私はな…ただ体を貸したんだよ…」

木元はすでにあの伝説の魔人を解放していたのだ。そして自らの体に寄生させた。

言い伝えとは捻じ曲がって伝わることが多いので、黒い悪魔の正体をはつきりと知るものはいなかった。あれは人に取り付くことで力を発揮する異能力者だったのだ。体を持たずに大気中をふわふわと漂う存在であるが、知能も意識もあった。

偶然から生まれた生物とは呼べないこの生き物は、たくさん人間に転移することで力を蓄え、知識を持ち始め強力になっていった。当然寿命などに縛られることもなかった。

一見無敵にも思えるこの生物にも弱点もあったのだ。それは、寄生してしまうとその者が死なない限り抜け出せないということと、大気がないと身動きが取れないということだった。

だから封じ込められてしまった。本来の姿は捕らえることも不可能に近いが、一旦寄生してしまえば、そこから動きを奪うのは容易いのだ。千年近く前に唐津藤十郎も寄生していた人物をそのまま地中の奥深くに閉じ込めてしまった。

外気に触れられない状態では抜け出すこともできず、その場にとどまることを強制された。

木元は初期発掘の段階でその生物の場所を特定し、能力も分析し

ていた。

だからその能力も彼にしか分からなかったのだ。

「寄生することで、強大な力を与えるこの能力者にも野望があるよ
うだ…」

「姿もない存在に意思が？」

「ああ…無いように見えるが、こいつの意思が私の体に働きかけて
来るんだよ…自分以外の能力者を滅ぼせと。強く強く…細胞に訴え
かけ私を動かそうとしている」

今にも襲い掛かりそうな勢いの相手に灯は神経を研ぎ澄ませてい
た。じりじりと圧力だけが迫ってくるような感覚に押しつぶされそ
うにもなっていた。

「そこまでして神徒協会を恨む理由はなんだ？」

木元の目的をまず知りたかった。そうしないと、木元をここで潰
しても意思を受け継ぐ者が存在すればこの戦いは無限に続くのだ。

だが、灯は答えてくれることに期待はしていなかった。木元の性
格を考えても無駄なことをしない主義だということが明確だったか
らだ。だから、そんなことお構いなしに攻撃でも仕掛けてくるのだ
ろうと決め付けていた。しかし力を手に入れた木元はいつもよりも
饒舌になってしまったのだろうか、普段なら話すこともない自分の
過去を灯になら話しても良いのだろうかという気になっていた。

「時間もまだある…何も知らずに死ぬこともないか…」

自分が勝つこと的前提の発言ではあったが、話してくれるなら幸
いだと灯も黙ってその話を聞いた。

37話

三十年前

木元義弘は十三歳になろうとしていた。彼は生まれながらに特異な能力を持っていた。それはあらゆる物や人を分析して見抜くというもので、物が壊れればどこが悪いのか、人が病気になるれば、どこが悪いのか一目で看破できた。

しかしそんなことを幼い少年が話しても誰も聞く耳を持たない。みんな相手にしないで笑って済ませてしまふ程度だった。

両親は早くに亡くなり、施設に預けられた義弘はやはりどこか浮いている存在だった。

人と違う能力を持っている人間は少なからず、普通の人間と同調できないのである。だから友達もいなくて一人であることが多い。それでも自分の居場所があることはありがたいことだとも心の隅で思ってはいたのだ。徐々に施設の仲間とも打ち解けて普通に笑ったり話したりできるようになった。そして中学に上がる頃には分別もつき、自分はこの能力のことを完全に隠そうと思っていたのだ。しかしそれを許すほど義弘の世界は甘いものではなかった。

義弘の人生を変える出来事はその年の冬に起こった。

さくさくといつものように雪の小道を歩きながら帰路につく義弘は自分の帰る家の方角が明るいことに気がついた。

「あれは……」

遠目で見ても明らかに火が燃えていることは分かった。しかしそれが自分の帰る場所だとその時は思いもしない。どこか別の場所が燃えているのだから程度に思いながら、消防車のサイレンを聞きながらゆっくりと歩いていた。

時刻は七時近かったので日はすっかり落ち、真っ暗な中で雪がちらつきながら街灯を頼りに進む。するとそこに道を阻むように一人の男が立っている姿が見えた。

その男はニット帽をかぶり、うつすらと髭を生やした四十代で別に変わった様子はなかった。しかしその時、義弘はたまたま男をじっくりと見てしまった。普段なら無視して通り過ぎるはずなのにその時は本当に偶然だった。

だが、その瞬間に凍りついた。

こいつは…普通じゃない。そう思った後に自分の胸が貫かれたことに気がついた。

「え?」

真っ白な雪の中にくくと頭から倒れた。自分に何が起こったのかなど理解できるはずもない。真っ赤に染まる雪を眺めながら意識を失った。

目覚めたのはそれから一時間後だった。人通りのないこの小道では誰にも発見されることもなかった。おそらくそれを知っていて、自分を襲ったのだということも分かっていた。

しかし軌跡とはこのことで、義弘の臓器や動脈を傷つけることなく

相手が出した武器はすり抜けていたのだ。

「う……う……」

重たい体をどうにか引き起こして、立ち上がった。未だに眩暈がして体も揺れている。

刺された胸部はずきずきと痛んでいたが、死にたくない一心で施設を目指そうと思っていた。自分が何故襲われたのかも考える余裕などなかった。手足が動くと分かっただけで十分で、そのままゆくりと施設に向かって歩いていった。

時間にすればほんの二、三分だがその程度の距離も長く感じる。しかしあの場所に帰れば誰かが自分を迎え入れてくれる。それだけで落ち着ける……そんなことを信じて自分の家の前に立った。しかしそこは黒こげた瓦礫へと姿を変えていたのだ。

「……これは……」

自分の思い描いた結末とは違ったことに対応できるはずもなく、義弘はその場に腰を落としてしまった。

警察、消防関係者が立ち、野次馬も数人いた。

義弘は胸部を押さえながら、事実を受け入れることができなかった。ほんの一時時間前まではいつもと変わらぬ日常だったのに、異世界に飛び込んだ気分だった。

「放火らしいよ……」

野次馬の声が聞こえてきた。

「中の人って助かったの？」

「それがさ…みんな駄目だったみたい。一酸化中毒ってやつ？」

「うっそー…こわーい」

無責任な言葉が飛び交い、義弘をどんどん追い詰めていく。

その言葉を聞くだけで、家族が死んだということが分かった。とめどなく涙も出ていた。

少なくとも短い時間ではあったが、そこにいた者たちの影響は大きかった。成長期でも多感な時期に与えられたものが多すぎた。義弘は決して冷めてなどいない。だから自然と涙もあふれ出たのだ。

昨日まで話していた同級生も、自分を兄のように慕ってくれた年下の子達も、まるで両親のように自分の心配をしてくれた職員も違うものになってしまった。もう二度と会えない姿に…

どうして…その言葉が何度も頭の中を堂々巡りするだけで、答えなど見つからなかった。

頭の良い義弘は自分が襲われたことも、この火事も絶対に裏がある思った。

火事を起こしたとしても何人も人間が出入りするこんな時間に起こるのはまず有り得ない。そして放火だとしても全員が死ぬことなども有り得ないのだ。寝ているのならそんなことも起こるかもしれない。

れないが、七時ではまだ起きている。火がついていることを知ったら逃げるか消火活動を行うのが当然だ。それをできなかったとしたら殺されてから火を放たれた以外に考えられなかった。

義弘は自分がここでこのまま挫けていても何にもならないと考え、傷を癒すことを選んだ。そして救急の病院に運ばれて適切な処置を受けた。

数日後に警察が発表したのは義弘の予想通りの出来事だった。

施設に入り込んだ何者かが大量殺人をして、火を放った。義弘はそのニュースを見て、何故そんなことになったのか知りたかった。

殺されなければならぬ理由があつたのだろうか？自分を突き動かしていたのは理不尽な殺人に対する怒りだったのだ。しかし知らなくて殺された者が浮かばれない。自分に能力があるならそれを惜しみなく使い切つてやろう。そう決意した日から、義弘は学校へは行かなくなった。人と違う日常を送る裏の世界へ足を踏み入れ、少しずつ情報を集めていた。

能力者は普通に暮らせないものがほとんどである。精神に肉体に偏重をきたし、その姿を見られると自然と疎外されてしまうのだ。だからそんな者たちは八鬼とまではいかないが、集まって暮らしたりしていた。そんな者たちから話を聞くうちに義弘は有力な手がかりを幾らか手に入れることができた。

「また来たのか…坊主も熱心だな」

義弘を呆れた様子で眺めながらも、どこか認めているようだった。

「こいつは必死なのさ…俺たちのように、あきらめて生きてる者とは違うからな…」

「それも、楽な生き方だとも思うがな」

「人の考え方はいろいろだ。若ければ若いほどな…」

それぞれに勝手な人生論を持ち出す能力者は、何らそこらの人間と違いがなかった。しかしこんな裏の街道でなければ生きられない理由もあるのだ。

義弘は自分はどうならないと決め付けているかのように真っ直ぐな目をしていた。

「変わったことかい？そっいゃ、最近たくさん能力者が殺されてる…それも警察関係者とかじゃない」

「そうそう…何でも神徒協会関係らしいぞ？」

「はあ？何だそれ？あいつらも普通の人間じゃないと噂で聞くぞ。それが事実だとすれば同胞殺しをしてるということになる」

「目的なんか知らないな…しかし神徒協会に出入りしている人間の仕業らしい」

「お前見たのか？」

「ああ…たまたまだが、気の弱そうな能力者の一人が殺されたのを見たよ。それで…そいつの後をつけたらびっくりだ。あの護門徒と会っていたんだからな」

「おいおい…護門徒って言えば、神徒協会直属の最高位に匹敵する人間じゃないか…それならその話も間違いではないということか…」

「そこまで黙って聞いていた義弘もその話を切り出した男に質問した。」

「その能力者を殺した奴はどんな格好だった？」

「ん？…ああ…ニット帽をかぶった男だったな。死んだような目をして、気持ちの悪い奴だったのは覚えてる。そいつはお前の探している奴か？」

「やはりか…そう思い、義弘はそれからその男の情報を集めていくことになる。」

そして神徒協会との繋がりのある男の居場所を突き止めることが

出来たのは、あれから三ヶ月後のことだった。能力者ばかりを殺している話を聞いていたので、次に襲われそうな人物を分析して張り込んでいた。それは地道な行動であったが、実を結ぶ結果となったので、今となつてはどうでもいいことだった。

その時は自分が襲われた状況と同じように人通りの少ない橋の下でその行為は行われた。

ニット帽の男は容赦なく目当ての能力者を切り刻んだのだ。その光景を見て、自分があの程度で済んだことが、幸運だったことを思い知らされた。それと同時にとてつもない手際の良さにここで飛び出した所で無残に殺されるのは分かっていた。だから殺した後の足取りを掴むことにしたのだ。背景が見えなければ自分の復讐劇はあつさりと言えてしまう。

ニット帽の男の力もある程度理解できた。もしもやりあうことになったとしても、こちらも対抗できるぐらいの武器は用意している。そう考えながら、懐に忍ばせていた冷たい拳銃を手にしていった。

闇市で手に入れた本物で、訓練も数ヶ月欠かさず行い、殺傷能力を高めていたのだ。相手が斬撃で挑むのなら、こちらは遠距離攻撃を仕掛けるのが得策という判断である。

いくらか心に余裕を持ちながらも自らの気配を悟られないように慎重に後をつけた。するとニット帽の男は数十分後、とある人物に会っていた。話に聞いていた、あの護門徒だった。

名は椎葉緑哉こばやし りくや、ニット帽の男の話を片手間に聞いている感じで、紙を捲つて何かを考えていた。

「ああ…こちらの殲滅はほぼ完了らしいな。しかし西地区にはまだまだ能力者がいるようだ。潜んでいる奴も含めれば数十になる…」

「緑哉さん…あなたの依頼とはいえ心苦しい部分もある…いささか殺しすぎだと…」

「それが何か？」

「警察機関でもここまで乱暴にはやらない。能力者とはいえ、全てが悪とは限らない気がする…それにあんたも能力者だろ？」

殺すことが嫌になってきているかのようにニット帽の男は話した。その根底に、自分も能力者だから同胞殺しを否定している部分があったのだ。

「愚鈍な考えだな。いいか…膨れ上がる能力者は人数を減らすべきなんだよ。選ばれた者だけが残ればいい。それに毒は早いうちに出してしまった方がいいのだ。どんな小さな芽でも見逃すとそれが組織を揺るがす行為に繋がるかもしれないだから…増えすぎるとそれが管理できなくなる」

言い訳のようなことを話していたが、これが神徒協会の意思なのか男も知りたかった。

「神徒協会はそれを望んでいるのか？」

問いただそうとしたが、緑哉は話したくないといった様子だった。

「お前にそこまで話す義務はない。大人しく従っていればいいんだ。俺の話す言葉は神徒協会の意思と思ってな…」

あくまで横柄な態度でニット帽の男に接するで、男もいい加減頭にもきていた。

「全く…付き合いきれいな…」

呆れ顔でそんなことを話すと、緑哉の目つきは変わった。いや、それ以上に空気が変わった。

「おい…俺に反論する気か？」

ぎろりと睨む緑哉の眼光は鋭い。まるで全てを飲み込むかのような威圧感を相手に与えていた。まるでニット帽の男の心臓を素手で握るかのように…

そんな緑哉の姿を見て、ニット帽の男も隠れて見ていた義弘も凍りついた。がくがくと手足が振るえ、動けなくなっていたのだ。

どうして？何度もそう思ったが、答えは一つだった。能力者であるから相手の力量が瞬時で理解できたからである。何も持たない人間ならそんなことは感じない。しかし同色だからこそ、僅かにしか思えないような色の違いもはっきりと分かるのだ。

このままではまずい！

義弘は縛られたかのように未だに動かない手足を引きちぎるかのようは無理やり動かすと、その場からすぐに立ち去った。無我夢中で走りながら、敵の強大さを思い知り、絶望も感じた。ニット帽の男なら何とかなるだろうという考え方がそもそも甘かったのだ。まさかこんな強敵が後ろに待ち構えているなど予測もつかなかった。

ちくしょう…ちくしょう…と、何度も自分の弱さを憎んだ。こんなにも自分が弱い存在だと知らなかっただけに衝撃も大きかったのだ。だが、義弘の判断は正しかった。もしもあそこで玉砕覚悟で踏み出したり、いつまでも留まっていたらそれこそ命はなかったのだ。そこで自らの思い描く未来も終わってしまった。それをしなかったことは、負けではない。未来に繋がるのだ。そうも考えていた。

だから弱い自分を変えるには、これからいろいろ模索するしかないのだと心に決めていた。力も、情報も資金もまだ足りない自分にできることは、地道な活動しかない。何年掛かるうが、あの力に匹敵する武器を手に入れれば、全てを変えてやる。そう誓っていた。それからの義弘はどんどん裏社会に身を沈め生きるための術と復讐の武器を手に入れていった。

39話

義弘が護門徒である椎葉緑哉との出会いから五年が経った。

幼さの残る顔立ちもその経験を証明するかのようになり精悍な顔つきへと変貌を遂げていた。

そしてこの五年で、義弘は緑哉が何故能力者を殺しているのか知ることができた。

「いやいや…あいつの周りを嗅ぎまわるのは困難だったよ…」

義弘の仲間の一人である香月かじきがそんなことをぼやきながら、資料を手渡した。

香月は義弘の考えに賛同を持つものとして、三年前から行動を共にしていた。彼も能力者であらゆる物を透明に出来た。そう、自らの体ですら可能だったのだ。だから隠密行動には向いていたので、義弘が飼いならすことにした。

年は義弘よりも三つほど上だったが、彼の頭脳の素晴らしさに感服したのか、対立することは望まなかった。だから逆に義弘は扱いやすかったのだ。

「ここまでたどり着くには…まあ…何人が死んだけど…お前も本望だろ？」

核心に迫れば文句はなかりとうという言葉だったのかもしれないが、義弘はそんな態度に眉一つ動かさなかった。ただ、資料を興味

深く読むだけだった。

「護門徒とかってさ…自分の痕跡を全く残さないから俺ら以上だな…でもよ、あいつらのやっっていることにはケチがつかないが、俺らと同じことやったら殺されるって不平等だよな…」

ぶつくさと文句を言いながらコーヒーをカップに注いでいた。そして仕事の後の一服といった様子で和んでいた。黙々と集めた資料に目を通して数分、義弘は怒りを覚えていた。握っていた紙がくしゃくしゃになるくらいに露にしていた。

「おいおい…」

資料の内容を知らない香月は、どうしたんだと言わんばかりだった。

「はは…笑えてくるよ…」

「何がだ？」

「こいつのちんけな野望だよ…」

「野望？」

「ああ…能力者縮図計画…そんなものを打ち立てていたんだ」

そんなことをいきなり話されても香月にはちんぷんかんぷんだった。だから順序だてて説明することを要求した。

「分かりやすく話すと、この世界に存在するたくさん能力者を仕

分けするんだよ。必要かそうでないか…そうやって選別され残った者を神徒協会に引き入れる。そうすることで、いずれ神徒協会に脅威となる存在を除外するってことらしいが…こいつの本当の目的はそれを実行に移すことで、高く自分を評価してもらい神徒協会の幹部に仲間入りするつもりらしい…ここに書かれていなくても全ての計画がそれを物語っている…」

「幹部候補？」

「この世界を裏で操っているのは神徒協会と言っても過言ではない。そんな巨大組織の幹部になれば覇権を手にしたようなものだ。何に自由ない暮らしが約束される…俺らのような者を踏み台にしてな…」

義弘はまとめて話したが、それだけでも香月に感情の同調を得ることは容易だった。

「ちっ…俺たちは物かよ…酷い話だな」

あからさまに嫌悪感を丸出しにしていたのだ。

「あいつの第一の目的は、まず大幅に能力者の数を減らすことだった。無数に存在する能力者を判別するには時間が掛かる。だから第一次予選をしたんだ。運が良いものだけが生き残れるっていう理不尽なふるいにかけてな」

立て続けに知らされ香月も流石に動揺を隠せなかった。あまりにも身勝手な内容に自分の存在が何なのか分からなくなってしまったからだ。

「なら…義弘が襲われたのも運が悪かっただけということなのか？」

「そうなるな。だからこの五年で百に届く人数の能力者を無作為に殺していたのがここに書いてある…」

香月だけが怒っている訳ではない。義弘がふるふると怒りを必死に抑えているのが見て取れたが、香月は何も話さなかった。

「そして第二段階は交渉に回るんだろうな…勿論手段を選ばずな。数の減った能力者ならゆっくりと話もできるし反抗

したら殺せばいい…第一段階の効果が大きく出ているからやりやすいだろうよ…くくっ…笑ってしまうよ。意味もなく殺された者がこんなにもいるんだぞ？ただ運が悪いということだけで…」

あの日の出来事を鮮明に思い出して、義弘は憎悪の炎は激しく燃え上がっていた。

自分をここまで虫けらのように扱い、追いこんで本人は淡々と選別作業をしているのだ。

それが許されるのだろうか？いや、許されるはずがない。

「あいつは…その計画を一人では困難と思えば外部の人間にも持ちかけ行動していた。だから警察関係も協力して不可思議な事件には全て隠蔽工作を施していたんだ」

警察としては能力者の数が減るのは願ってもないことだったのだろう。だからそんな大量虐殺を提案した緑哉の提案をすんなり飲んでいた。

彼の起こした行動の尻拭いを政府まで巻き込んで行ったのだ。

「これだけの仕打ちを受けて…何もなかったかのように傍観できるか？命が助かっただけで儲けものだ…」

義弘は自分が生き残ったことには訳があるのだとその時はつきりと思っただ。

そうだ、こいつらに天罰を下すために俺は生かされたのだ。だからこの五年間ひっそりと息を潜めていた。

「義弘：俺は何も言わない。お前に協力するだけだ。お前が望む世界が俺の世界でもあるんだからな。それは初めてお前に会ったときから決めている。だから仲間をもっと増やしてお前が道を指し示せ」

激励にも似た言葉を投げかけたが、義弘の反応はいまいちである。当然だという態度で持っている紙を投げ捨てた。

「あの組織に対抗しうる力を持つまでもう少し…俺はこの痛みを忘れることはないだろう。しかし…いずれ…無限の地獄をあいづらにも味合わせてやるよ。それだけは約束してやる」

神徒協会の強大さを知りつつも、それに挑む心意気は芯から強いものだった。死を覚悟した者に失うものなど何もなかった。だから前に進むしかない、そう自分を突き動かす感覚が義弘の背中を押し続けた。

そしてその翌年、義弘はその言葉を実行に移していた。

40話

仲間は義弘を含めて全部で五人だった。

それは義弘が集めた能力者で特に有能だと見極めた者たちだった。それぞれが一小隊の実力を持ち、小規模の町なら壊滅させられるだけの力を備えていた。

義弘の組織のあり方として決めていたことが、大人数で成り立つてはいけないということがある。そうしなければ、自分の目の届く範囲で賄えないことがたくさん出てくるからだ。もしかしたら裏切りに会うかもしれない。そんな内部のいざこざも少人数ならすぐに把握できるし、事が起こる前に対応できるからだ。人心掌握に長けている義弘ならではの考え方ではあるが、信頼を勝ち取るには必要不可欠の行為でもあった。

そして組織の名を「真実の光」と命名し、自分たちが本当の救世主だということを神徒協会に知らしめようとしていた。

隠密行動がモットーで、その組織の内情を決して漏らさないように勤めた。情報も極力分散させかく乱した。そうすることで、組織があるのかわからないのかわからない存在に仕立て上げた。義弘がプランを立てて、他のメンバーがその筋書き通りに動いた。神徒協会が関係する世界各国の機関に狙いを定めていた。

それから年に数回大きなテロ行為を行っていた。

義弘の目的の一つに護門徒である椎葉緑哉を殺すことが含まれていたが、今の自分では到底及ばないことが分かっていたので後回しにしていた。

まずは力を付けるために小規模のテロ活動から始まり徐々に規模を大きくしていた。慎重な義弘はそうすることで、全員の力を見極め、成長に繋がるとも思っていたのだ。現に数度行われると、メンバーにも慣れは出てきた。そして手際も良くなり大きな仕事を任せられるようになっていたのだ。そして組織設立から一年後にはより大胆な計画に手を出すことができていた。

その一つに航空機を一台落とすという大胆な筋書きがあった。それが意味するのは、神徒協会に宣戦布告をするということだった。神徒協会が北欧に本部を置いていることは、大体把握していたが、詳しい場所までは掴めない。だから北欧に向かう便の搭乗者名簿を調べ上げ、神徒協会の関係者が多数乗っている飛行機を狙うことにした。それを撃墜することで神徒協会に何らかのアクションを起せると考えていたのだ。

しかし義弘は直接手を下さない。

地元のゲリラを直接会わずに上手に操っていたのだ。彼らには神徒協会が政治的に絡んでいることや宗教的観点からもゲリラの信仰の妨げになるなどの情報をパソコンから与えていた。

始めはただのいたずらかと相手にしていなかったゲリラもその情報内容が細かいところまで作り上げていたので見てみない振りはできなかつた。内情に詳しい誰かではないと知りえない情報が含まれていたからだ。そこから始まり作戦は数ヶ月を掛け、相手を完全に信用させてから実行へと移る。そして実行の数週間前には重要人物がその航空機に乗って神徒協会に向かうことを教えていた。

人の心は義弘からしたら操りやすかつた。相手が煙たがる存在を

自分も嫌っていると同調して話すだけで、いろいろ動かせるのだから。そこから始まる地道な下地が功を奏したのか、誰も与えた情報を疑うことはなかった。そして完全に信用していた。

「そうだ、我々の神の信仰の妨げとなつて居るのは、神徒協会が居ることだ…それなら抑制…いや排除すべきなのは当然の行為なのだよ。義弘、君の意思は我々にもはっきりと伝わっている…君が動けない状態だというのなら君の体になつて我々が動くだけだ」

その会話からも分かるように、義弘は体が動けないということになつて居る。だからネット上でしかやり取りができないのも相手は納得していた。ご丁寧に義弘は偽造した自らの写真と経歴までも送つていたから信じるしかなかった。

だからゲリラも頭脳として動いて欲しいと要求していたのだ。今まで小さな規模でのテロ行為も支援していたから当然の要求だった。

「君のような多大な情報を持つものが、我々にはこれからも必要だから、今回の件も全て引き受けよう…そうすることで君との絆の誓いになるのだから」

パソコン越しに義弘は笑つて居た。何とも扱いやすい奴らだと…これで、わざわざ遠くに出向かなくても勝手に神徒協会に宣戦布告をしてくれるとほくそ笑んで居た。

しかしその反面、義弘はきっとゲリラは殲滅されるだろうとも予測して居た。神徒協会はそんな生易しいただの宗教団体ではない。護門徒なるものを各国に置いているのと、その存在が想像を絶する強さなのだから、本部の人間は明らかに護門徒を上回る存在なのだ。

そんな神徒協会から見たら義弘たちはちっぽけなものかもしれないが、長い年月を掛けてでも潰してやるうと生きる目標を持っていたのだ。

それから数日後：義弘が立てたプラン通りに飛行機の撃墜は行われた。神徒協会に属する重要幹部数名の命がそこで絶たれたのだ。

生存者は皆無と記事には書かれていた。しかしその中に偶然的にも生き残った一人の少年がいたのだ。その名は月夜灯といった。

「それから数年後に更に部下を増やした俺は、俺を襲った能力者と護門徒である緑哉の命を奪うことに成功した：そこまでは予定通りだった：」

義弘は過去を振り返っていたが、そこで苦い思い出を思い出すことになった。

「だが：それからすぐに神徒協会に返り討ちにあった：僅かな油断でな：」

思い出したくもないといった様子だが、義弘は灯には話しておこうと決めていた。

「俺は見誤っていたんだ：緑哉を殺したことで満足して、神徒協会本部のことまで頭になかった。だから神徒協会の力もそんなものだと決め付けてしまっていたのだ」

何があつたのだろうか？ 灯には分からない出来事だったのでそのまま話を聞いた。

「そんな心が彼らの突入を防ぐことができなくなっていた。慢心した心でいた俺らの組織は神徒協会上層部の人間によつていとも簡単に崩壊させられた…圧倒的な力というのがこういうものなのかということもその時に理解できた。しかし…俺は生き残つたのだ。二名の部下と共に…そして二度も生かされたことには意味があるともはつきり感じた」

「自分が神徒協会を崩壊させるという使命感にでも酔つたのか？」

「そうかもしれない…だが、俺が生きている以上はそうするしかないんだ。誰に何と言われようがな…だから必死に立て直した。十数年近く掛かつたがな…そして今の自分があるんだ。灯、お前は神徒協会のこのような仕打ちを正しいと思うか？ 他人の生き死にを自らの意思で判断することは正しいのか？」

そのことに何も返答できなかった。しかし灯は同情をすることはしなかつた。これが神徒協会のあり方だとしても敵の意見に左右され裏切ることはできなかった。

「そんな論議をお前と交わしたところで何も進まないか…それなら、ここはお前らの好きな力とやらで白黒はつきりさせるとしよう」

こうして義弘は未知なる力を手にして灯と初めて殺し合いをすることを決意していた。しかし灯は未だに何の動きもしないで自然体を貫き通すだけだった。

それぞれの戦いが今正に始まるつとじていた。

41話

デイドは、唐津紅蓮を軽視していた。その証拠に一つ一つの動きに驚かされていた。

八鬼の頭首を勤めるだけあって軽やかな身のこなしと、鋭い攻撃を当たり前のように使いこなし追い詰めていた。

大きなモーションは相手に隙を与える。だから最小限のけん制の攻撃と最大の術を交互に放つことで戦術を読みづらくさせていた。

「くっ…」

間合いを広げることが出来ずに焦っていたのか、デイドの表情は曇るばかりだった。相手の大きな空振りを期待しても一向にその動作は出ることはない。ぎりぎりの攻防をすることで体力も精神力もそぎ取られる。このままでは自滅することも分かっていた。

自分から動かなくては…

頭の中で逆転の一手を思案するが、速すぎる相手の動きにそんな余裕すらなかった。

しなる蹴りをかわしたと思えば、いきなり炎が目の前に飛び出す。豪腕の一撃をすれすれで避けても地面から槍のような一撃が飛び出す。

能力者とも数限りなく殺し合いをしたが、これまでの戦いの中で当てはまるものは一つもなかった。

「貴様…いくつ能力を持っている…」

これまでの攻撃を直撃することなく避けるデイドは紅蓮から見ても脅威だった。初見でここまで避けられたのはなかったからだ。しかしここで辛い顔を見せれば相手に逆襲のチャンスを与える。そう思いぐつと堪えながら精密に攻撃権を維持していた。

「さあねえ…」

冷静さを貫き通して長距離攻撃も合間に入れてみることにした。視界に写ることのない空気の弓矢。圧縮した空気の塊が銃弾に匹敵する速さで襲い掛かる。それは鋼鉄すら貫き通すほどの威力であったが…デイドは殺気という感覚だけでそれを全て見切る。

四方向に放たれた矢も確実にデイドの肉体を捕らえることができなかつた。くそつと心の中で叫びつつも紅蓮は地面に手を付ける。

するとデイドを取り囲むように植物が勢いよく飛び出して体を覆いつくす。

「う…」

弓矢を避けたばかりだったので、次の一手を読むことができなかつた。だからデイドは植物の海に飲み込まれてしまったのだ。その圧力は車を軽々と粉碎してしまう…人間の体など簡単に握りつぶされてしまう。

ごくりと紅蓮はその一部始終を見守る。飲み込まれしばかりの沈黙があつたが、そこからぼんつと爆ぜる音が響き渡つた。明らかに

中から破壊されるような音で、植物という檻は簡単に破られてしまった。そんなことも想定内だったのだろうか、紅蓮に動揺の様子は見られない。

「生物の…生命の流れを操る能力かい…」

自分が味わったことを思い出しながら険しい表情をしていた。

「その通り…」

ゆらりと姿を見せたデイドは完全に殺戮体勢に入っていたのだろう。一通り紅蓮の手の内を見て判断材料が得ることができたことで自分の有利さを確信していた。

「お前同様に殺す相手にしか自分の能力を見せない…」

「そうかい…」

「私の能力はエネルギーの循環、吸収と開放だ。以前私と触れたことでそれを理解できたようだ。しかし…それだけではどうにもならない。触れるだけで全て終わってしまうのはお前にも分かるはずだからな。感心するのはお前の生命力だけだ…以前手合わせした時に殺した者と同じ末路を辿らせようと触れたんだが力を奪うのに留まらなかった…」

「なら触れたらお前の勝ちだな…さて…」

怖い能力だとも思っていた。しかし紅蓮はあくまで真っ向から勝負を挑むことに決めていた。だから後退の選択は頭の中にない。ただ進むだけだと再度デイドとの距離を詰めていった。

42話

大地を何度蹴り上げたのか分からないが、繰り返される攻撃に無駄はない。先ほどの手合わせである程度相手の身体能力の分析は終わっていた。能力以外は普通の人間より少し強靱だということだけだ。だとしたら能力を使わせなければいいのだ。

相手よりも速く動けばいい…相手よりも強い攻撃を仕掛ければいい…

その考えは間違っていないかった。紅蓮はどんどん自分のペースに相手を動かしていく。有効打はないが精神的に追い詰めることには成功していた。デイドには余裕の表情が見られなくなっていた。

紅蓮に触れさえすれば終わる。たったの一瞬で…だから今は耐える時だと念じていた。

「打撃、斬撃、遠距離攻撃、術の一つ一つを間違えることなく、確実に受け流す。そこが一流の殺し屋の所以でもある。ぎりぎりの攻防を汗をかくこともなく冷静に処理しているのだ。そんな息もつかせない閃光のような交差が数度行われた時、紅蓮は突如ぐらりと大きく体を崩した。

「うー！」

攻撃一色の紅蓮にも疲れが出てしまったのだろうか？高速の攻撃は足に負担が掛かっていたのも事実で、無意識に膝が落ちてしまったのだ。しかもデイドの至近距離で…

しめた！そう判断するが早いか、デイドは大きく腕を伸ばしていた。その無防備な紅蓮の肉体に目掛けて…触れればこれで終わりだと自分の勝利を確信したのだろう。思わず笑みまでこぼれていた。

お前は…それまでの男。私の足元にも及ばないのだ。

そしてそのまま紅蓮の腹部に手が触れた…が…その刹那！違和感を感じるのと同時に悪寒を感じる。

「う…」

「ようやく…顔を上げてくれたかい…」

にやりと笑う紅蓮。その体は干からびてなどいなかった。反撃の一手を仕込んでいたのだ。

「くそ…」

デイドは初めて自分のミスに気がついたが、その時には爆音と共に後方へと吹き飛ばされていた。

これも紅蓮の能力の一つで大気中成分を操り水素爆発を起こしたのだ。もはや無敵にも近い男だが、そういうわけではない。術の一つ一つの威力はその道に卓越した者には適わない。それを本人が自覚していたからデイドが致命傷に至らないことも分かっている。

すぐに吹き飛んだ場所へと追撃のための移動を開始していた。

しかしそこにはデイドの姿はなかった。そんな生ぬるい衝撃ではないはずだと思ってもいたが、爆煙漂う中で殺気を背後に感じた

紅蓮は急いでその場から離脱した。

「浅はかだった…まさか私が…こんな形で罠に掛かるとはな…」

爆煙の中からは荒々しく呼吸し、体の至る所が焼け焦げ、吐血している重傷のデイドがいた。しかしその目から闘志の炎が消えることはなかった。

「どうだい？過信ばかりしているお前に向いている戦法だろ？」

紅蓮もその姿を見てダメージの確認をした。火傷の中でも一番危険とされる三度の皮膚全層熱傷と爆破の衝撃で数本骨折、おそらく内臓破裂もしている…

「自分の能力に勝てる者がいないと決め付けてるから、こんな単純な罠に掛かるんだよ」

「自らの体にお得意の空間干渉能力で薄い膜を作り上げたな？私の手が触れたのはその気膜だという訳だ」

「ああ…俺は器用に操れる方じゃないから広範囲は無理なんだよな。だからお前が触れるであろう一部分だけにね…」

驕り高ぶる殺し屋はまんまと紅蓮の策に引っかかったのだ。今までの高速の紅蓮の攻撃はこのためのものだった。全く隙を見せない相手がたった一度隙をみせたらそれは勝機だと思ってしまうのが人間だ。ましてデイドは自分が負けることなどないと決め付けていたのだから。そんな二重の勘違いが重なることで手痛い仕打ちを受けることになった。

「しかし自分の力の非力さは呪ってしまふよ。至近距離での爆撃で死に至らしめないのだからな…ま…それでも上出来でしょ？あのままあっさりと死んでしまつたらお前を怒らせることができなかつたのだからな」

「何だと…」

「どうだい？逆に見下される気分は？俺はお前に与えられた屈辱を忘れてはいない。お前を見下した上で殺してやるよ」

くすくすと嘲り笑うようにデイドを見る紅蓮の目は冷たかつた。

一方で自らのプライドをはずたずにされてしまつたデイドに正気を保つだけの理性は残っていないかつた。肉体が破壊され意識を必死に保つことも馬鹿のように思えてしまつたのだろうか？冷静な殺し屋は壊れてしまつたのだ。

「ぐああああああああああ」

獣のような雄たけびを上げると、紅蓮に策もなく突っ込んできた。

ぼろぼろの体に以前のような軽快な動きなどない。怒りに身を任せて突っ込むだけの単純な動きだつた。燃え盛る炎のようにデイドは本能だけで紅蓮の姿を追いかけた。

「哀れな…」

新たな策を講じてくるかとも思つたがそんなこともしないデイドを軽蔑した。プロなら最後まで自分の意思を貫けとでも言いたかつたのだらう。

紅蓮は容赦などしなかった。襲い掛かる哀れな獣を空間干渉能力で狙いを定めると業火でその身を纏わせた。

火柱がごとと上がるとそこからデイド・レオドランドという人物は姿を消していた。

「いやあ…俺も自分の汚点を拭い去ることができて良かったよ」

そんな一言をつぶやくと紅蓮は先へと足を進めた。

43話

森林の中を駆け回る二つの影が交錯することはなかった。互いにけん制をしあつてなのか、なかなか距離を縮めることができなかった。開戦の合図でジュラスは至近距離での戦闘を試みたが、京香は刃の類には、向かつてこない。その目を利用し、地形を巧みに利用して逃げるだけだった。空を切る回数が増えるにつれてジュラスも苛立つてきた。

「くそっ……」

ジュラスの体には無数の武器が同化しているが、刀、ナイフ、槍といった近距離戦闘のものが多数を占めていたので、相手に離れられると少し部が悪いこともあつた。それでも銃やライフル、マシンガンといった類もあるので身を隠しながら逃げる相手に対していよいよ戦闘方式を変えることにした。

それからその場には派手な攻防から一転して静けさが流れていたのだ。

ジュラスから見たら京香など素人の小娘に等しかった。このまま追いかけてもいずれば捕まえられるだろうとも思っていた。しかしそれをしない。深追いは危険だということも体に叩き込まれていたからである。それとも一つの理由に相手が弱い存在だとしても慎重にならなくてはならない。驕ってはならないという心構えもあつた。だから一気に距離を詰めることをしないで京香の動向を自分も隠れながらうかがっていたのだ。

どんだん前に出ようとすするデイドとは対照的とも思えるこの女

性も木元の部下であった。幼少に拾われ徹底的な暗殺者になるように都合よく育てられたのだ。その実力は木元が側に置くだけあつて抜きん出た才能もあつた。

対武器に彼女の右に出るものがいなかった。どんな武器でも対処してしまうのだから味方としては心強かった。だから京香の持つている拳銃という武器など、今までの経験からしたら大した脅威にもならない。それでも頭を狙われたらおしまいなので、相手の出方が分からない以上はそんなに軽率に前にもでなかった。

京香は初めての殺し合いで多少力んでいたのだろう、相手の姿がちらちらと見えると、すぐにそこに銃弾を打ち込んでいた。いくらのを外さないという特異な力があつてもはつきりと相手を見れない状態では意味がなかった。ただ虚しく弾を無駄にするだけだった。

室内の訓練所とは違いここは外で、障害物のたくさんある森林という状況も京香には部が悪かった。

数発、等間隔に発砲音が響き渡るとジユラスは京香の戦力を分析し終わっていた。

そして出した決断が、自分の脅威にはならない存在だということだった。初動が遅ければ変わった能力もない…ただの人間だ。むやみに発砲する弾に当たらなければ問題ない。それにあの様子だと的に当たるのも難しそうだ…

いろんなことを考えながら、木々を掻き分けながら静かに速く京香の背後に回りこんでいく。

そんなジユラスの動きを京香が把握できるはずもなく、闇雲に目

でジュラスを追い求めた。

どこだ…どこだ…どこだ…

気配を感じることをできない京香は圧倒的に不利だった。一流の暗殺者になれば姿が見えなくても相手がどこにいるのかぐらいは把握できる。目で追っている時点で京香が素人だということが証明されジュラスの勝算が高くなっていく。

五十メートル離れた位置から背後を捉えたジュラスは自らの手をライフルに変化させて京香に狙いを定めた。

未だにきよろきよろと目で自分の姿を追っている京香を見てため息を思わずついていた。

頭…心臓？どこでも狙えるが一発で終わらせたら面白くもない。ここまで実力差があるならもう少し遊んでもいいのではないだろうか？そんなことすら頭の中を過ぎっていた。

そして決断したのは右ふとももを狙うことだった。

ここを打ち抜くことでどう反応するのか見たい…それもあつたが、足を打ち抜けば素早く動くことも不可能になり自分が思い通りに戦況を動かすことができると考えた。

だから迷わずトリガーをゆっくりと引く…標準を合わせるのと同じ時に。

ぱあん！

「ぐ…」

ジュラスの弾丸は正確に京香の右太もを貫いた。背後から撃たれたこともそうだが、不意に自分の体が機能しなくなることは経験がなかった。だから、がくと意思とは関係なしに倒れてしまったのだ。

このままでは的になってしまう。そのことは頭の中にあつたから、痛みを感じるよりもそのことだけで転がりながら体を必死に動かして藪の中へと身を隠した。

「はあ…はあ…」

自分の足を見て観察すると銃弾が貫通していたので多少の安心感があった。そして足が機能するのだが…やはり無理のようで片足で行動するしかなかった。

ほふく前進のような形でその場から離脱しようと試みるが、それをジュラスは許さなかった。

全てを有利な状況で見ていたので逃げた場所もすぐに特定できた。京香は丸裸も同前だったのだ。

今度は左腕を打ち抜かれた。

「ぐあー！」

姿が見えないはずなのにどうして？そう思っていたが、考えが甘

かった。ジュラスは京香がその場から離脱すると同時に移動していたのだ。相手を追い詰める術を知っている人間ならではの、自分の場所を特定させないための手段でもあった。

右太ももを撃たれて間もなく左腕を撃たれた京香に冷静な判断は到底無理とも思われた。しかし違った。京香はこんな最悪の状況に追い込まれても必死に頭の中をフル回転させていたのだ。

ここでもしも何も考えず気を抜いたら、その時点で死が確定する。考える…思考できるのなら僅かなことでもいいから何かを考える…

負傷した体を引きずりながらも場所を移動する。が…その後に発砲音が響き渡る。

がん！

眼鏡のふちを撃たれて眼鏡が弾き飛んだ。弄ぶかのようにこんな芸当を披露している相手の手に掛ければ自分が殺されることは明白だった。

「むっっっ…」

京香はそれでも思案を続けていた。何度も諦めずに…何度も何度も何度も…

だが、そんな京香を嘲り笑うかのように次は左太ももを打ち抜かれた。

「があ！」

これで動きの基盤を完全に失ってしまったのだ。羽をもがれた蝶のようにばたつくしかない。生かすも殺すも相手次第という選択肢のない状況が作られてしまった。

44話

「くくく…どうだ？お前に反撃ができるか？」

もう脅威はないだろうとジュラスは姿を見せないものの遠くから話しかけた。

「次はお前の右腕を打ち抜く…これで終わりだ。後はじっくりと殺させてもらう…生きたまま内臓を引き出しても面白いし…胴体を二つに分けてもいいか…くくくく…」

それは地獄へと突き落とす言葉に似ていた。なぜなら両手両足を打ち抜かれたらもう京香に残っている逆転劇は存在しないだろう。

今唯一残っている反撃の一撃を食らわせられるのは生きている右手だけだった。きつとそれを分かっていてジュラスもあえて右手を残しておいたのだろう。どうもがき苦しんで反撃するのが見たくて…

反撃の一撃を出せるものなら出してみろよ…そう言っているかのように、この究極のサディストはどんどん京香を追い詰めていく。

しかし…京香は目をつぶって集中しながら何かを呟いていた。

「二時…四時…六時…八時…」

そんな言葉はジュラスに届くはずもなく、次に打ち抜かれる瞬間を待つしかなかった。

ジュラスは満面の笑みで標的に標準を合わせると勝利を確信した。相手に自分の姿は見えていない。

だが…

「十時方向、十五秒ジャスト！」

そんな言葉を口にすると、握り締めていた拳銃を自らが指し示した方向目掛けて三発放った。

京香の目に相手の姿など映っていなかった。しかしそこにいるのは分かっている。そういう気持ちで迷いもなかった。勢いよく発射される弾丸は全て同じ軌道をたどると、ジュラスが引き金を引くよりも速くその肉体に命中した。

「ぐうあああああ！」

叫び声が森林に響き渡りその声を聞くと、京香はその隙に体を転がしながら、身を隠せる場所に移動していた。油断は禁物だ。そのことを一番分かっていたから、追撃するようなことはしなかった。

一方でジュラスは京香の見せた予測不能の弾丸によって致命傷を負わされていた。心臓を僅かにそれたが、三発の銃弾は肺を貫き体の機能を奪い去っていた。

慌てて京香のいた場所を見たが、そこにはもういなかった。

まずい…

屈強の殺し屋は怒り狂うどころか自分の身の危険を感じていたのだ。相手がどうやって自分の位置を知りえたのか分からない状況では、自分が丸裸同然で逆に狙われる立場に変わってしまう。何故、

自分の位置がはつきり分かった。そのことばかりが頭の中を過ぎる。

その理由はジュラスの規則正しい攻撃にあった。京香は自分の体を銃弾で撃ち抜かれながらもその秒間と方向をしつかり記憶していたのだ。ジュラスは京香を中心に等間隔に円を描くように移動しながら襲撃していた。移動の秒間は十秒。そしてそこから銃弾発射まで五秒。それを計算しながら京香は反撃の一手を待っていたのだ。相手はそこにいるとはつきり感じるまで…

どんな形であれ深手を負ってしまったのは違いなかった。ジュラスは鈍くなった体を無理やり動かして木の陰に隠れることにした。

「はあ…はあ…はあ…」

自らのダメージを木に寄りかかりながら確認する。この出血量は…あと数分もつかどうかも分からない。しかし木元の所まで行けるなら助かる可能性もある。

任務を優先させるか自分の身の安全を確保するのが先か悩んでいた。相手は両足と左腕を打ち抜かれているからそうそう速く動けない。だが自分は負傷しながらもまだ歩くことはできる。肉体の一部を盾に変化させれば有り得ないまぐれの銃弾にも当たることなくここから離脱できるかもしれない。そんなことを考えてしまった。

数秒そこで思案をすると、決断した。一旦ここから引き上げて回復を待つのが得策だと。

だから両腕を厚い盾に変化させると自分の体を覆った。そのままゆっくりであるが山頂目指して歩き始めたのだ。京香との距離は五十メートル以上離れている…ここからでは京香の持っている武器の

射程距離を越えている。だからライフルでもない限りの絞るのにはむずかしい。そんな安直な考えから自分を奮い立たせていた。

ずりずりと足を引きずるようにジュラスは姿を見せたが、京香はそれを木陰から見ていた。体を起こすこともままならないので、寝た状態ではつきりと見ることができた。

「…」

京香は絶句した。なぜならその姿は鉄の塊が歩いているようだったからだ。ジュラスは自らの両腕を硬質化させ薄く延ばし自らの体を覆いかぶせていた。

しかし京香はそんな姿を目の当たりにしても動揺はしなかった。銃を構えると標準を頭部のあるであろう位置に合わせる。

そしてぱぁん！と間髪いれずに打ち込むと、がん！と音がして銃弾は弾かれた。

「くく…」

その音を聞くなり、中にいたジュラスは自分の身が安全だということをはつきりと感じた。このままやり過ごせば、反撃に転じることもできる。だから今は引くときだ。そう言い聞かせながら目指す方向に進んでいた。

このままではどんどん京香から離れて射程圏内どころの話でなくなり、殺傷すらできなくなる距離になるのだ。

だから京香は諦めない。立て続けに銃弾を放つ。正確に何度も何

度もその場所に。

「無駄なのに…諦めの悪い奴だ…しかし…よくあれだけ離れていながらも当てられるものだ…」

がんと定期的に何度も銃弾が撃ち当たる音が中に響き渡る。

「無駄無駄…それでも拳銃だけの能力なら上ということか…それだけ…褒めてやるよ…」

そんなことを口走っていると、不意に銃弾がジュラスのこめかみをずんと打ち抜いた。

「え？…ええ？」

何が起こったのかなど理解することはできない。覆っていた鉄の塊もその瞬間にぱちんと弾けるかのように能力を失いジュラスは無様な姿をさらけ出した。当然一歩も歩くことができず、そのまま朽木が倒れるように地面に倒れ落ちた。

そしてこめかみに空いた穴からはどくどくと血が流れていた。

「あ…ああ…どうして…」

意識が薄れる中で自らの右腕を見るとぼっかり穴が開いていた。

「…そういうことが…はは…薄く伸ばしたことが…仇と…なった…か…」

がくと頭が落ちるとそのまま口を利くこともできなくなっ

まった。ジュラスはそこで命を絶たれたのだ。自らの犯した過ちを
はっきりと理解しながら…

「はあ…はあ…」

京香は感覚で打ち抜いたことも殺したことも理解していた。そして
今考えても先ほどの神業をできたことを思い出しても振るえがき
た。

京香は針の穴に糸を通すように寝ながらピンポイントで同じ箇所
を連続で打ち抜いていた。その数九発：射程圏内から離れた場所で
こんな芸当ができるのは世界を探しても見つからないだろう。そし
てジュラスは自分の身を護ることで精一杯だったこともあり二つの
過ちを犯していた。

一つは装甲を伸ばしすぎて硬度を失ってしまったこと。もう一つ
は視界までも覆ってしまったことで外の様子が分からなかったこと
である。その二つが重なることで京香に勝利をもたらしたのだ。

緊張感から開放されるとどっと疲れが押し寄せ、そのまま大の字
になって何も考えず空を見た。

「あ…」

夕焼けに染まった空はまるで血のように真っ赤だった。

45話

最後の戦いの火蓋が切って落とされた。そこには普通の人間が入り込むような余地もなく明らかに違った生き物同士の世界になっていた。互いに警戒しながらも僅かな動き、呼吸、思考を感じ取り先を読みあっている。何も話さなくても伝わるのがたくさんあるとはこのことである。木元は手にした刀を無造作に持っているが、灯にはそれがそういう型なのか理解ができなかった。

張り詰めた空気とは違い、力を抜いた緩やかな空気であったが見えない攻防がそこには幾度となくなされていた。

数分のにらみ合いから木元は先陣を切るようにゆらりと動く、灯の反応速度を上回る動きで飛び込んできた。いたはずの場所にはない。灯がそう判断した時には後ろに回りこまれている。気配だけでそれを知ることができたのだが、そんな経験などしたこともないから対応するのに困った。

「な……」

無理やり体を動かすのも初めての経験で、思考が体を急かしているような感じだった。だから灯は相手の動きを見るのではなく勘だけで動いていた。

シュン！

木元の手に握られていた刀が空気を切り裂く。それは鋭く速い。

音速を超える域であった。しかし灯の体を捕らえることはできなかった。残像を斬ったと思わせるほどの鮮やかな動きに木元も多少の戸惑いはあったが、そんなこと構わなかった。その先を見据えていたのだから…

相手が避けることも想定内。だからその先の姿を脳内に焼き付ける。どのように逃げるのか…どのように反撃するのか…考えられる全ての行動は木元の頭の中だった。

彼の弱点は攻撃の部分だった。頭がいくら良かろうが、どんな策を練られようが、相手の心を掴めようが、肉体がそれに伴わなければ意味がない。しかし古代の魔なる能力を手に入れた木元はその弱点の全てを補ってしまったのだ。だから思い描く自分の構想にその肉体を当てはめられた。

灯の動きなど手にとるように分かる。右に逃げた…だからそこに先回りをする。灯がそれに気がつき後退するなら前進して距離を詰めた。

灯はどこに逃げても先回りされるのだから休まる間もない。自分の考えていることがいとも簡単に相手に知られている以上、頭で動くのではなく感覚で動くしかなかった。しかしそれは灯が日常にしていることで、さほど難しいことでもなかった。

先手を取られるものの相手の攻撃は全てかわしていた。

刃が肉体に一度でも食い込めば、死を意味するかもしれないのにそんなぎりぎりの状態を灯は好んでいるかのようにだった。髪を斬らせ、服をかすらせ、皮膚にもわずかに触れさせた。

木元はそんな一連の流れを見てやはりおかしいと思ったのだろう。息もつかせないほどの動きを急にぴたりと止めてしまった。

「お前：俺をからかっているのか？それとも余裕からなのか？全てを完璧にかわしながら何もしないと…」

痺れを切らしたかのように木元は話したが、灯は正直に答えた。

「俺の体は目覚めが悪いんでな：徐々に慣れてきている状態だ。それにな：反撃はしていないんじゃない。できないんだよ：お前の動きは速すぎる」

そんな灯の発言は火に油を注ぐ行為だったのだろう。木元は苛立ちを隠せなかった。

「そついうことを普通に話せることが余裕があるというのだ。だからだ：是非ともお前には絶望を感じさせたいものだ」

木元の気迫が伝わっているかのように大気は震え、自分に触れるもの全てを弾き飛ばす勢いを感じさせる。しかし灯はそんな圧力に屈することもせずにあくまで自然体を貫き通す。

「お前に一つ問いたい：何故武器を持たない？今までの戦い方を調べたが、お前が特有の武器を保持するのは聞いたことがない。それに戦った情報がほとんどない…」

月夜灯という人物について解明できる部分が少ないのは事実で、木元が今までの経歴やら能力を暴くことはできなかった。痕跡を残さないという事は難しいことで、あの暗殺者の世界でも名高いデイド・レオドランドですら何かしらの形で残っていたのだ。

だから本当の殺戮者というのは月夜灯を指しているかもしれないのだ。

「お前には謎が多すぎる…古代の力を手に入れ身体能力ではお前を上回っているはずの俺ですら未だにお前に対する不安は拭いきれていないのだから…」

「随分とはつきり認めるんだな…過大な力を持ったものはもう少し驕り高ぶるものなのだが…」

「だからデイドは敗れた…」

気配だけで唐津紅蓮に敗北していたのを察していた。

「仲間が死んでも割り切っているところは流石だよ…策略家としては最高だ」

「そういうお前は何者なんだ？何も能力を持たない、武器も持たないのに我々と渡り合える？」

能力者は必ず体の一部が変化したり精神に変化が見られるので、灯のような存在は能力者としては有り得ないのだ。だから能力者としては認めていない。しかしかといって普通の人間を上回る力を持っているからそこに矛盾が生じてしまうのだ。

そんな疑問点に灯は答えることにした。

「私は元々普通の人間だった…しかし十数年前の飛行機事故で人としての潜在能力を開眼させてしまったのだ。あの日…燃え盛る炎の

中で絶望を味わうことで今こうして生きていられるのだ…」

その目は思い出したくもないあの日の光景を見ているかのように
だった。

46話

あの時、俺の目の前が真っ暗になったのは良く覚えている。しかもそれは空の上を飛んでいる最中だ。

何があつた？ 思い出せない…

強い衝撃で記憶も断片的にしかなかった。覚えているのは、自分が日本人で、年は十三歳、名は：なんだっけ？

目の前に広がる光景は赤と黒の世界だ。焼けた匂いと黒煙のコーポレーションは俺の心を深く抉るものとなった。しかしこれが現実なのか理解できるまでに時間は掛かった。

状況を整理しようにも思考が働いていない。このまま眠った方がいいのかな？

きつと寝てしまえば、これが夢だったと思って再び目覚めるのだろう。

そんな浅はかな考えのまま目を瞑ろうとすると、人のうめき声が聞こえて、現実に戻された。

「うつつうつつうつつうつつ」

それは地の底から響くような、人のうなり声だった。苦しそうで、声にならない声のようだった。

俺は目を開いてその声のする方を見た。すると、そこには体に無数の鉄骨が突き刺さった男がこつちを睨んでいた。

「た…助けて…くれ…ご…ご…がはっ…」

喉に詰まった血液が大量に吐き出された。

俺はふらふらと立ち上がり、その惨劇の正体を改めて見た。そこには巨大な鉄の乗り物の無惨な姿が曝け出されていたのだ。胴体が何箇所かに分かれ、座席、荷物、そして人があちこちに放り投げだされていた。

当然、人の体も様々だった。

手足はもちろんのこと、あらゆる臓物が飛び散り、焦げ臭い匂いは人を焼いている匂いでもあった。首が転がり、こっちを眺めている。瀕死の人物の体は、ずたずたで、欠けているパーツが多すぎた。このままでは死ぬのは時間の問題だ。

俺はどうなっている？

慌てて自らの肉体の再確認をするが、五体満足でどこもちぎれていなかった。しかしあちこちが軋むように痛かった。

「た…助けて…」

「死にたくない…」

「嫌だ…」

断末魔の声があちこちから聞こえてきた。

俺は動けるのに、動けないちぎれた体の持ち主が、か細い声を上

げながら次々と息絶えていった。

頭がおかしくなりそうだ…

大量の死体、断末魔の叫び、極地の寒さは、神経を蝕んでいった。

壊れる…このままでは壊れてしまう…

もしも救助が数日後に来たとしても、俺はまともでいられる自信がない。

人が…あんなにも醜い姿で、最後を迎え、更には自分に助けを求め、それを救えないでいる…こんなものってあるのか？

そればかりが頭の中を巡っていった。

こんな生き地獄を見せられる位ならいつその事死んだ方がましだった。

ちくしょう…何で、俺だけ生き残ったんだよ。

そう思い、自らの周りを見回すと、両親だと思われる人物の遺体があった。

二人は手を取り合い何かを守るように死んでいたのだ。それが自分だということは何となく分かっていた。だが…記憶がない…この人たちは父親と母親なのだろうか？

そんな疑問が残ったからだ。でも、自然と涙だけは出ていた。

「く…うつ…うあああああああ」

記憶も無い、人の死を見続けこの場にいらなくてはならない。そんな過酷な状況を余儀なくされ俺は呆然と立っていた。

「助けて…足が…足があ…腕が…どこかにいつてしまったわあ…」

「目が…目が見えない…ここは、どこだ？」

「誰かいるのか？体を…俺の体を捜してくれ」

止めてくれ…

「死にたくない…死にたくないよお…」

「助けてよ。お母さん…どこにいるの？ねえ…返事をしてよ」

止めてくれ、止めてくれ…

「く…苦しい…」

「痛い…痛い…嫌だよ、こんな痛いのは…」

「死にたい…死にたい…」

「殺して…」

止めてくれ、止めてくれ、止めてくれ。

「止めてくれえ！止めてくれよお！俺は…俺には何も出来ないんだよお！頼むから静かにしてくれ！」

俺は両耳を塞いだ。いや寧ろ引きちぎりたかった。生きながら地獄を見続けなくてはならないのか…それなら…このまま凍死したほうがいい。

ここは極寒の地だ。何もしないでこのまま眠っていれば、死ぬ。無理に生きようとしても…俺の頭が壊れてしまう。

そして俺は考えることを止めた。そのまま黙って静かに眠ることだけを考えた。

すると、二度目の暗闇が自分に襲い掛かった。

47話

「そこでお前は神徒協会に拾われたのだな？」

話し半ばではあったが木元は大筋の流れでそのように解釈した。

「私は…事故の後遺症でしばらくの間、記憶喪失と失語症になった。あの事故は多大な能力の開花に繋がったのかもしれないが、犠牲も大きかった…地獄のような出来事から私という人間は全く違う道を歩むことになったのだ」

灯は自分の力を呪っているかのようだった。それは灯の深刻な表情からも汲み取ることができるが、逆に木元は上機嫌だった。

「くく…はははは！これは面白い…」

何故こいつはここでそんな反応をする？灯はそんな異変を感じ取ったかのように木元の様子を伺っていた。しかしその理由もすぐに分かった。

「奇遇だ…奇遇だよ…俺の立てたプランの一つにお前の乗っている飛行機が存在したなんてな。ははは…これは笑わずにはいられない…」

高笑いする木元に反して灯は恐ろしいほど冷静だった。殺意をむき出しにするわけでも取り乱すこともしなかった。

「あの事は鮮明に覚えているよ…何しろ俺の記念すべき第一回のテロ活動だったのだから」

満足げに話す木元は灯よりも優位な立場に立っている気分になっていたのだらう。饒舌にその出来事を話していた。

「神徒協会関係者が多く乗る飛行機に的を絞り、近隣のゲリラに襲わせた…そして任務は完璧に遂行されたが、その後そのゲリラの村が突如崩壊した…それは…お前の仕業なんだらう？月夜灯よ」

木元にとってゲリラが滅ぼされることなどどうでも良かった。ただ神徒協会に一太刀食らわせることが目的だったのだ。

灯はそんな木元の挑発に乗ることはしなかった。冷静な顔のままで別にそんなことはどうでも良いという感じだった。だから木元はつまらなかつたのだらう。もっと感情を露にしてほしかったのに何の反応も見せない灯に舌打ちをしてしまう。

「お前はあくまで冷静を貫き通すというのか？くだらない…それは本心か？それとも見せかけのスタイルなのか？」

にじり寄りながら灯の表情を伺う。

「お前は誤解している」

「何だと？」

「私にだって感情はあるさ…両親を殺した原因がお前だということなら憎いとも思う。だが、それ以上に神徒協会に死ぬしかないあの時に命を救われた以上、彼らが私の両親だということに揺るぎはないのだ…」

「それは肉親を捨ててまでのことなのか？」

「忠義を尽くすことで成り立つ人生…それが私の生き方かもしれない」

灯は自分に生きる道と力を授けてくれた神徒協会に全てを差し出す覚悟だった。そしてそれをはつきりと木元も理解することができた。

「不憫な生き方だ。自由などない永劫の束縛。しかも間違った方向へと人を導く宗教団体の言いなりだ…あわよくばお前が護門徒を辞めてくれるかとも期待したが無駄のようだな。我々はあくまで生き死にでしか決着をつけられないようだ…」

「それには同感だ。くだらない御託やら交渉は望まない」

灯は空手のままだが、木元を挑発し逆に戦うきっかけを作ったのだ。

その言葉に触発されるかのように木元は腹をくくった。自ら握る赤い剣に自らの魂を注ぎ込むかのごとく闘気を漂わせた。

先ほどの攻撃が生易しいことを思い知らされるかのような突風が吹き荒れ、素振りだけでも目の前にいる者の魂を切り取ってしまうのではないかと思わされた。

相手の力量を見ても灯に余裕などなかった。呼吸、目線、足先、指先の動きに目を配り些細な動作も見逃さないつもりでいた。

「膨大な量の殺意の塊をお前はその身で受けているのだ…並の人間

ならこれだけで精神の崩壊を起こしかねない。なのにお前は平然と踏みとどまっている…流石だ。俺に寄生しているこの能力は封じられたその瞬間からいずれ日の目を見ることを信じて力を蓄え続け開放を待っていた。だからどの能力者よりも現代では力を持っている…しかしお前はそれを受け流すかのような姿勢で構えている。お目にかかれない業とはこのことだな…」

灯は自然の力と人間の力との調和を重視していた。それは人間という種族の無限の可能性を信じていたからかもしれないが、自分が人間という生物の限界を引き出すことができるからこそであった。だが、そんな灯に対して木元は圧倒的な力で一蹴することを選んでいった。

「お前が強いのも分かっている…しかしどうにもならないこともあるんだ…それを証明して見せよう」

そう話しながらゆっくりと剣の柄を握りしめると殺気も引っ込み僅かではあるが一時の静けさが流れた。そこに多少の緊張感も残っていたが灯は警戒を緩めることもなく木元の姿をじっと見つめた。そこで木元がふつと息を一つ吐く。その刹那鞘に収められていたはずの赤き魔剣は眼に映ることもなく高速で抜かれた。

「…」

その瞬間に数メートル離れていた灯は、ここにははまらずいと直感で感じ取っていた。だから頭で考えるよりも速く足がぴくりと反応していた。

木元の抜かれた剣先からは溜め込んだ力が突風を巻き起こし衝撃波となつて灯に襲い掛かっていた。その速度は弾丸の如く速く鋭い。

赤い竜巻はまるでレーザー光線のように灯の背後の盛り土に激突して爆発音と共に土埃を撒き散らした。もしもあと少し灯の判断が遅かったらきつと体は跡形もなく吹き飛んでいただろう。その威力は凄まじく山のような盛り土に半径五メートル程の風穴を開けていた。

速度と威力がなければ土の山に空洞を空けることはできない。そんな芸当を木元はたったの一振りだけでやってのけた。

どうにかかわした灯に安息の時間などない。木元は灯の背後に姿

を現すとその刀で力まかせに斬りつけてきたのだ。

ドゴン！

紙一重で避けられた攻撃はそのまま地面を割った。硬い地盤が煎餅のように碎ける。その刀の重量がまるで数トンあるように。

灯はそのまま森林に身を隠そうとしたが、追撃は止まない。速さというよりも力だけで押してくる相手は吹っ切れているようだった。そこから辺の障害物ももろともしないで灯に向かって力という力をぶつけてきたのだ。

灯は流れる動きでその全てを見切りながら、避ける。もしもどれか一つが肉体にかすらせるようなことがあれば肉体は分断されるか、粉々のどちらかの選択しかなかった。そんな死を予感させる攻撃は速さがなくても数があれば重圧に耐えられなくなるものである。しかし灯は心をしっかりと持ち攻撃をしっかりと見ていた。

飛び散る瓦礫や木片、側にあつた重機までも豆腐のように壊され飛び散る始末であつたが、鋭い五感だけでそのほとんどを受け流していた。

だが、自分の逃げる空間全てに飛び散る障害物を避けられるほど万能ではない。だから体に食い込む破片も何個かあつたのだ。集中力を切らした訳ではないし、それが致命傷に至らないとはいえ、思考が鈍るのは事実でこれが確実なる致命傷への一打に繋がることもある。

木元が力を解放して荒々しく動くことで辺りの地形はめちやくちやだった。地面が歪み土砂の山は粉塵と姿を変え、木々は次々となぎ倒されていた。正に人間兵器とはこのことで、小さな軍事力にも木元の能力だけで対抗できる。そしてこの全てが一人の人間の手によって行われたなど誰も信じられないだろう。迫り来る圧力がどんどん増していく。

「くそっ……」

受け流すのにも限界がある。莫大な力を最小限の動きで避けても肝心の攻撃の一手が灯にはなかったのだ。

灯は未だに何も持っていない。そのことを木元もずっと警戒していたが、そんなことを考えるのも無意味だと判断した。だからこそこんな大胆な行動に移すことができたのだ。

赤い刀から惜しげもなく放たれる無数の衝撃波。

目には見えないものの灯は殺気を感じ取りひらりとかわす。背後には爆音が響き破壊の連鎖が止まらない。

木元は遠距離攻撃と近距離攻撃を使い分けていた。遠くから衝撃波で大きな隙を作らせ、その間に距離を詰めての近距離攻撃というように。

刀の刃が肉体に触れるか触れないかの段階で灯は体を回転させてその衝撃を流す。その行為そのものが見事なのだが、相手は台風のような存在である。刀圧と風圧だけで側にいる灯を軽々と吹き飛ばした。

「ぐっぐっ…」

後方に吹き飛ばされると、どうにか踏みとどまっていたが、追撃の赤い衝撃波が休むまもなく飛び交っていた。

まずい…

そして灯はかすらせることのなかった攻撃を初めてかすらせることになったのだ。

胸の部分の衣服を削り取るように衝撃波は空高く舞い上がっていた。その反動でがくりと膝を落としそうになるが、倒れなかった。

ぼたぼたとすぐに血が滴り落ち、その範囲はかなり広範囲に広がっていた。胸部は真っ赤に染まっていたのだ。

「ほう…運がいいな…肉を数センチ斬らせるだけとは…」

木元が初めて傷らしい傷を負った灯を見て嬉しそうだった。相手は化け物とまで呼ばれた存在だ、二重三重と対抗策をいろいろ張り巡らしていたのだが、ようやく追い詰めることができた、と勝機に近いものを見つけ出すことができたのだ。

灯はこのままだ黙って立っではまずいと思ったのだろう。すぐに足に力を込めると地面に落ちていた重機の壊された鋭く尖った金属片を握り締め移動を開始した。

これが今の灯の武器である。

真正面から木元に突っ込むと、木元は刀を構えて目の前に迫る灯に向かって地面と水平に大きく斬りつけた。しかし灯はその攻撃を意図も容易く避けて飛び上がった。しなやかに滞空時間の長い跳躍だった。ゆづに二メートルは跳んでいただろう。

灯は先ほどの攻撃で木元の攻撃の弱点を見つけていた。攻撃を避けられても尚存在する刀圧と風圧は木元を点として筒状に外に広がるのだと…球状でなければ頭上はがら空きとなり唯一の攻撃は上空しかないと判断した。

だから攻撃をやり過ぎ、刀圧と風圧の壁を突き破り両手で握り締めた金属片で全体重を乗せながら脳天目掛けて迷うことなく突き刺した。

金属片は鋭利に尖っているので頭蓋骨など楽勝で貫くだろうと思っていた。手に来る感触もそんなに重くはないとも考えていた。

だが、有り得ない音と感触と共に全ての予想を裏切って弾かれたのだ。

「な……」

流石の灯もこの時ばかりは冷静さを保っていられなかった。まさか頭蓋がこんな硬い人間など経験したことがないからだ。弾かれた手のほうがじんじんと痛んで、逆に相手は無傷だった。

そして頭を攻撃されたこともお構いなしとばかりに木元はそのまま刀を振るった。体勢が体勢だけに灯に分が悪かった。

間近に迫る狂気の刀を握り締めていた金属片でどうにか受け止めたのだが、ぶつかり合う勢いもろともそのまま体ごと吹き飛ばされた。巨人の一撃を受けるかの如く、灯の体重がまるでないかのよう空中を有り得ない速度で走った。そして一直線に背後にあった森林の中に潜り込むと一本の大木に激突して動きを無理やり止めた。衝撃音は木をへし折ってしまうのではないかというほどで、灯の体はバウンドして地面に倒れた。

「随分と遠くへ飛んだものだ……」

追撃しようにも数十メートル先に吹き飛ばした灯にそれは無理だった。しかし確かな手ごたえを感じたので、木元の優位は動くことがなかった。

だからだろうか今までのような素早い動きでの追跡ではなく、ゆ

つくりと余裕を持って森林の中に入った。

森林は暗闇に等しかった。夕刻を過ぎ夜を迎えようとしていたので、見晴らしの良い場所ならまだ日がかろうじて照ってはいるものの空の見えないここでは夜同然だった。

ひよっとしたらこのまま逃げられてしまったのかもしれないとも木元は歩きながら考えたが、それは絶対にならないと言い聞かせていた。相手は裏の世界でも名高い男で、決して任務を放棄するような相手ではないし、何よりも逃げるくらいなら死を選ぶ人間だということも知っていたのだ。

だからだろう、灯の姿を目の前にした時に木元はやはりなという表情を見せていた。

「嬉しいね…俺を待っていてくれたのか？」

ゆらりと立っている灯はどうみても戦えるような体ではない。胸部からは出血が続き、先ほどの一撃で骨にも異常が見られていた。内臓破裂してもおかしくない一撃だったのでこの程度で済んでいるのは運が良いとも言えた。

「先ほどの一撃はなかなかのものだったぞ？まさか脳天をあのような形で攻撃されるなど経験がないからな。だが残念だったな…俺が得た力は体の硬度まで変えてしまったのだ。近距離の銃弾でも貫くことはできないだろうな」

「なるほど…道理で硬い頭だな…」

「しかし…解せないことはまだ残っている…先ほども聞いたが何故武器を持たない。見たところお前が素手だけで渡り歩ける存在だとは思っていない。殺しには必ず何を用いていたはずだ」

そんな木元の疑問に灯はふっと一笑した。

「本当の殺し屋っていうのは武器の痕跡すら残さない。だからその場にあるもので今まで全ての任務をこなしてきた。それが昔からスタイルだったからな…」

「神徒協会の教えという訳か？」

「そうかもな…私は事故により五感が優れるようになった。しかしそこで常に同じ武器を頼りにしては能力に蓋をする行為だと何度も言われた。どんな状況でも生き残るにはその場所その状況に応じた戦い方を頭の中で組み立てると…その繰り返しで私がどんな能力者にも負けない武器を身に付けることができたのだ」

その話を聞いて木元は納得していた。能力者というのは元来その能力に振り回されるのだ。だから自分のそのたった一つの力に固執し、それを伸ばそうとする。だが、その唯一の武器が失われたら対策はなくなり丸裸になってしまう。灯のように最初から武器を持たなければ、どんな状況でも順応できるし、逆境に強い生き方になるのだ。

感心しながらも木元は黙って聞いていた。だからこそ、灯という人間が勿体無いとも考えた。こんなに真っ直ぐな人間がどうして神徒協会などに仕えているのだろうか？と。

「お前がそこまでして神徒協会に肩入れする義理はあるのか？あ

つらは利己的な考えで俺たちを排除しようと考えているんだぞ？お前は正義だと思うのか？」

急に質問の内容が変わったが灯が迷うことはない。

「何度話しても同じだ。生かされたことは事実なんだ…その恩義に反する行為は私の選択にはない。だから彼らが正義だと話せばそれは正義なんだ」

揺ぎ無い灯の言葉に説得など無理だということがはっきりと分かった。だから木元もそれ以上何も言えなかった。

「そうか…ならお前を復讐の手段として利用させてもらおう」

赤い刀を再び構えると灯に殺気をむき出しにした。もう迷うこともないだろう。森林を破壊しつくしてもこの男を殺してやると決めた。双方は十メートルは離れて向かい合っていた。木元が警戒しているのもその距離で分かる。

それを見て灯は、懐から持つことを嫌っていた唯一の武器である短剣をすつと取り出した。短剣とは言うもののそれほどの大きさもなく、ペーパーナイフと言った方が正確なような感じに見えてしまう。そして見事な装飾が施されたその短剣は白い刃の先端センチが金色に光っていた。見たことのないような武器に木元は戸惑いも見せたが、まずは怒りを露にした。武器を持たないと話した灯が持っているのだから当然だった。

「貴様：先ほどの話は嘘だったのか？武器を持っているではないか！」

今まで灯のことを敵ながらも信頼していた部分があったので裏切られたような気分だった。しかし灯はそんな自分は何も間違っていないという様子だった。

「そう、かつかしないでくれ。私は使わないというだけで武器を持っていないなど一言も話していない。ただ殺されるのは嫌だからな。これは最後の悪あがき、奥の手だと思ってくれよ。正直、古代の寄生能力者など私にも予想外で未知の存在だ。私にこれを握らせたお前は、それだけ強敵だという証だ」

相手を認めたらこそ出したものだと言った。灯は話した。それに対して

半ば呆れ顔で木元は答えた。

「くくく…面白い。太い金属片でも貫けなかった俺の体をそんな細い枝のような短剣一本で殺そうというのか？悪あがきにもほどがあるよ。やれよ…お前のことだ、ただの短剣ではないのだろう。そのぼろぼろの体で逆転されたのなら言い訳のしようがない…知らない力とぶつかりあうのはお前も同じだっただからちようど良い」

どんな企みがあるのかは知らないが、自分が灯を近づけなければ全ては終わると思っていた。それにあの細い短剣では自らの体を貫くことが不可能なものも知っていた。

木元の頭の中では今までの灯の動きが全て入っていたので、どう動くかどう対処するか全て予想がついていた。分析能力がここで生十分にかされ自分の負ける確率など皆無に等しかったのだ。

灯は普通に立っているが、本当はいつ倒れてもおかしくない状況だった。強がってはいるものの内心では一撃で決めなければまずいと考えていたのだ。今しかできない。もう後はないのだ。

「さあ…最後の決着を付けよう」

その言葉を皮切りに覚悟を決めた木元はぐつと柄に力を入れるとまたあの衝撃波をつぎつぎと生み出した。

木々をなぎ倒して視界を塞いでいくが、灯は的確に相手の攻撃を読んでいる。斬られた木をするするとよけて、襲い掛かる衝撃波をかいくぐり、木元に接近していった。

体が痛み、悲鳴を上げる中での細かい作業は難しかったが苦戦を

何度も体験してきた灯の精神力はそんなところで底を尽きることもどしない。いつものようにその身体能力を十分に引き出して最小限の動きだけで木元に数メートルまで迫った。

小ざかしいと思ったのだろうか、木元は赤い刃を地面に向かっておもむろに斬りつけ地盤を壊す。まるで龍が地を這うが如く地面が割れながら灯に近づいた。

ぐらりと揺らぐ大地を灯はあの見事な跳躍で跳び越すと、空中をひらりと舞っていた。

それを見た木元は待つてましたとばかりに空中の灯に向かって刀の標準を合わせ、斬撃を再び飛ばす。空中なら避けることも無理だと思つての行動だが、その裏をかかれた。

灯は側にあつた木々を蹴り飛ばしながら二、三度軌道を変えたのだ。猿のような動きに木元も目で追うことができなかつた。木元の放つた攻撃は全て無へと帰りその効力をなさなかつた。

木元の足元に降り立つたが、灯は地面に擦りつくような低い獣のような体勢で着地していた。

だから木元の視界には未だに灯の姿は捕らえられない。木元の伝達回路は普通の人間と同じであるから変則的な動きを見せる灯の姿を追うことができていない。この場所を戦闘に選んだことがそもそも間違いであつたのだ。灯は人の伝達回路を上回る動きができる。それが入り組んだ場所なら好都合で、相手の目をかく乱させられる条件は整っていた。

一撃で決めなければ自分が死ぬことも分かっていたからこそ、集

中力は格段に跳ね上がり痛みなど気にせずこのような動きをすることもできた。そして木元の目に灯の姿が映った時には、もう灯の短剣が彼の肉体を突き刺していた。

「あ……」

自分の胸に刺さった短剣を見ることで事を理解した木元であったが、納得がいかなかった。

どうして刺さっている？

そのことばかりが頭の中を過ぎっていたのだ。銃弾の衝撃にも耐えられ、鋭利な刃物にも耐えられるはずの体にめり込む切っ先を起こつてはならない出来事だと決めつけていた。

万物に完全なものは存在しない。

ほころびはどこかに必ず存在するのだ。木元義弘という人間にもそれがあつたという話だがそれは木元だけに当てはまるものではなかった。

一瞬の間が開いてから灯は突き刺した短剣を勢いよく引き抜くと木元の様子を慎重に伺う。

51話

一瞬の間が開いてから灯は突き刺した短剣を勢いよく引き抜くと木元の様子を慎重に伺う。

「ぐっぐっぐっぐっぐっぐっ」

重低音で響く唸り声は灯の行った行為の結果を物語っているかのようだった。胸をかきむしるようにしながらもがき苦しんでいた。

たった数センチの小さな刺し傷ではあるが、どこかに確実なダメージを与えていたのだ。

「貴様…何を…くうう…」

全く理解できない状態が続く木元にとってもこの痛みは味わったことがなかった。絶叫を上げながら言葉にならない言葉で灯に語りかける。

そんな木元を見ても灯は冷静だった。諭すように静かにゆっくりと話しかけた。

「能力者を殺すもの…それがこの剣だ。いや、寧ろ、この切っ先の鉞物だ」

短剣の切っ先は黄金に輝き金とも思わせるような輝きを放っていた。

「それは…何だ？」

呼吸を荒々しく吸い込みながらよだれを垂らしてその武器を指差す。

「時の雫の塊だよ。頭の良いお前ならもう能力者の仕組みは知っているだろう？この星に存在する時の雫の欠片を体内に含むことで異能力者が誕生するということもな。時の雫とはより大きいものに吸収されやすいという性質を持っている。数年前に私は独自で探し当てた僅かなこの欠片も一人の人間に存在する時の雫から見たら数千倍に匹敵する。だからこれに刺されると異能の力の元凶は全て吸収されてしまうのさ……」

「そんな…ものが……」

「お前の力は危険すぎる。古代の寄生する異能者など聞いたこともないし、お前そのものの人格ですら乗っ取られるかもしれないのだぞ？そんな舵取りもできない状況での圧倒的な力は虚しい生物兵器にしかない」

「くう……」

「だが…お前は純粹に復讐に命を賭けた。何度も何度も地面を這い蹲りながら…神徒協会の善し悪しはいるんな視点で見れば変わるのも私自身が知っている。きれいごとだけではこれまで大きな組織にすることはできないのだから…しかしそんな場所でしか生きられないのが私だ。残念だ…もっと早く私に出会っていたなら別の選択肢もあつただろうに……」

「くく…確かに…お前は以前の護門徒とは大きくかけ離れている…人間としての器の大きさも何もかも違う…しかし…神徒協会の言

いなりのままでは一生俺たちが交わることなどない」

力が吸収されつくした木元には体の原型を留めておくことが容易ではないことが理解できた。体が透けてきていたのだ。寄生していた能力者そのものを殺したことはそれだけ大きなことだったのだ。

「それも誤解だ…ある一点を除き、私は…神徒協会の言いなりにはならない」

きっぱりと全てを覆す言葉を灯が口にした時、短剣同様の驚きを木元は見せた。

「な…忠義を果たすのでは…ないのか？」

「忠義は果たす。しかし…もしも主君が裏切り不必要に信頼関係を壊そうとするなら…私も黙ってはいない。その時は自らの手で神徒協会を潰す…」

木元にせめてものはなむけのように語る灯の目は本気だった。

「何だそれ…神徒協会が死ぬと言えば…お前は死ぬかと思ったのにな…」

「…」

海という子どもと出会ってから彼は少し変わってしまったのかも知れない。殺伐とした世界にいたことが長かったことで自分という人間が分からなくなっていた時だったのでそれも仕方ないことだった。当たり前のように目的のためだけに生きていることは間違いだど知り、自らの枷を解くことにしたのだ。

だから不憫な能力者の救済や地盤作りもしていたのである。我が子の未来のためにと…

簡単に死ぬことはできない…そのことが今の灯の根底にあった。

「いいだろう…お前が話すことは全て信用に足るものだ…上辺だけでは語らない…信念そのものだ…」

灯の発言を素直に受け止めると木元は微笑んでいた。

「俺のような能力者はまだたくさんいる…神徒協会に虐げられた者たちはまだまだだな…俺がそんな者たちの礎となったのなら…まあ…本望だ…」

それは灯に救えない能力者のことを頼むとでも話しているかのようだった。しかし灯は何も語らず消えそうな木元を見守っていた。

そんな木元は自らの死を受け入れることができたのだろう。表情は穏やかになっていた。灯に恨みつらみを話すわけでも苦し紛れに恫喝するような行為もせずただ一言だけ静かに言葉を発した。

「なかなか…楽しかった…」

その言葉を最後に木元の姿はそこから忽然と消えてしまった。

灯はその姿をしつかりと目に焼きつけ、自分のすべきことの大事さを再び思い知った。

木元義弘は不遇な存在であった。運命にあがなうこともできずに

自分同様に翻弄されている。だが…変わることもできるのだと灯は強く願った。

人の生き方はそれぞれ違えば、望む結末も違う。だから難しい…

自分の結末もどうなるのか分からないが、そんなもの知りたくもないと灯は思っていた。

成すべきことだけをやるだけなのだから…

52話

一連の騒動が全て片付き収まったのはあれから一ヶ月後だった。

真実の光なる組織は完全に壊滅した。世界各国に存在していた数名のメンバーも神徒協会の名の下に駆逐されてしまったのだ。そして政府が大々的な人事異動を済ませ、麻痺した機関、省庁の建て直しを迅速に行い、首謀者である木元義弘の存在は隠すようにした。

大々的なテロ活動家と思われていたこの事件も濁した形で世間には明確に伝わることはなかった。

月夜灯はそれから日常の生活に戻っていたが、怪我した体を癒すことにまずは専念していた。

木元との戦いが壮絶だったことを物語るかのように体に刻まれた傷は、入院付きの全治二ヶ月との診断が下った。しかしそんな医者 of 診断を無視するかのように灯は病室からは飛び出し、自宅に戻っていた。

海に心配を掛けてはなるまいという配慮であったが、飛び出された医者にとっては迷惑な話である。

京香はそんな灯を心配してか様子を伺いにいきなり家に押し付けていた。

「こんにちはー…押しかけ女房でえーす」

平日の午前中に現れる京香を見て灯は仕事をしているのだろうか、と逆に心配になっていた。だが、そんなことお構いなしとばかりに

京香はいつものように灯の家に入りこんだ。

「大分落ち着いたようですねえー…灯さんの容態も世間も…」

思い返すようにあの死闘を振り返って、静かな日常を味わっているようである。

「そうですね。世間の目を欺くことはなかなか難しいでしょうが大惨事にならなくて済んだことは幸いです」

「またまた謙虚ですねえー…灯さんが食い止めたっていうのに」

「いや…私一人では無理でした。京香さんと紅蓮がいなければ特にな」

京香はそんな言葉に発情する。

「いやーん。そんなこと言われたらどこまでもいつちやいそうですよあー。大丈夫です。今日は念入りに体を洗ってきましたから…」

暴走する京香を無視しながら灯は会話を続けた。

「平井さんはどうです？あれから忙しかったんじゃないかと心配になつてね」

「むう…また無視ですか…いいですよ…それも愛の形ですから…えつと…平井さんは相変わらずの方なのでテキパキ人を動かして、隠蔽工作もばっちりという感じです。ほとんど寝てないようだけどあの人寝なくても平気な人みたいなんで…鉄人という代名詞は正にあなたの人ですね」

まるで人事のように話されたが、平井の手腕を買っているからそれぐらいは当たり前のようにこなすか、とどこか納得していた。

しばらくして灯はコーヒーを入れて京香に差し出した。

「あ…どうも…」

入れてもらったコーヒーをすすりながら京香は灯の怪我していた部分を見た。しかし服の上からなのでどうなっているかは分からなかった。

「怪我の状態が気になります？」

「え？まあ…やっぱりあれだけの傷だったので…」

「裂傷はふさがり、骨折もくっつきました。一週間ぐらい前からは問題なく生活できてます」

「ええ！あれだけの怪我ですよ。灯さんの体の構造どうなっているんですか？何なら脱がして見せてもらいたいぐらいです」

「…五感同様に自然治癒能力も常人よりは高いようです…」

「便利な体ですねえ…」

「そういう京香さんはどうなんですか？私同様に相当の傷を負っていたようですし」

「え？私ですか？まあ…包帯が取れませんが経過は順調です。この

通り歩けるようにもなりましたしね…」

「そうですね。くれぐれも無理はしないで下さいね」

そこまで話すと灯は自ら入れたコーヒーを一口飲んだ

「あの…海くんは学校ですか？」

部屋をきよろきよろ見回しながらそう話すと、灯はそうだと答えた。京香はそんな普通に子どもを持っている灯のことを不思議にも感じていた。

こんな殺伐とした世界に生きていて、しかも最高峰の殺し屋とまで恐れられているのにどうして平穏な生活を共有していられるのだろうか。

だが、逆にそれが灯の強さなのだと薄々気づいていた。

護る者がいることできつと強くなれるのだと。

それ以上は何も聞かないで、他愛もない話と報告混ざりの仕事の話を進ませると京香はそのまま大人しく帰っていった。

53話

唐津紅蓮は不機嫌な様子だった。

灯が久し振りに訪ねて来たとうきつきしていたら、仕事の話のみだったからだ。

「そんなにむくれるな…私だって忙しい身なんだよ…」

「お前はいつつもそうだ…そうやって俺との約束を守らないで自分の都合ばかり押し付ける。いい加減にしないと俺もすねちゃうぞ」

いい大人がぶりっこする姿は気持ち悪いことこの上なかった。だから灯もあっさりと流してしまった。

「はいはい…次は付き合ってやるから、今日は仕事の話だけで勘弁してくれよ」

「む…」

ふくれつつらを見せたが灯が譲歩することもなく話を続ける。

「話はお偉いさんからいつてると思うが、能力者の対策は私に全て回してくれよ…別にお前の組織を蔑ろにするって訳じゃない。その辺は誤解しないでくれ…」

木元義弘との一件から灯はすぐに動いていた。

政府にも働きかけて能力者の対策を自分が請け負うことを宣言したのだ。凶悪なものから些細なものまで。だから八鬼の頭首である紅蓮にもその通達は自然と流れた。だから紅蓮はつまらなそうに話していた。

「知ってるよ。お前はそういう奴じゃないからな。でも…全てを救うのは無理だぞ？理想論の域だ…それを踏まえて本当に分かっているのか？」

「ああ…それも分かっている。一人の人間にできることは限られているからな。何も私一人で全てをどうしようとは思っていない。警察関係者、八鬼と協力して行っさ。それに…全てを救えるなんてこれっぽちも思っていないさ。完全に手遅れの存在もあるからな」

そこまで話すと紅蓮もそれが分かっているならいいといった様子を見せた。

「精神が崩壊したものは説得しようが、医者に見せようが、絶対に元には戻らないからな…時の雫というものはそれだけ影響力が強いということだ…それに…謎が多いのは事実だが、神徒協会がそれを独り占めしている可能性だってあるんだぞ？それを…お前はどうか受け止めているんだ？」

灯の今後の生き方を問うかのような質問に灯は黙っていた。

「今は何とも言えない。私は自分のできることを行っただけだ」

「ほう…立派だな。そんなお前だから俺は好きなんだ。早く神徒協会なんか抜けてこっちに来いよ。その方が俺が楽しいからな」

「あんな…八鬼なのに私が入ったら九鬼になるだろうが。今までの歴史はどうするんだよ。先祖が泣くぞ？」

「俺の時代からはグローバルなんだよ。フリーダムなんだよ。だから問題ナツシングなんだ！」

「変な日本語使うな。八鬼もお前のような楽観主義の馬鹿が頭首だと大変だな」

「おいおい…褒めてるのかあ？」

「話聞いているのか？皮肉以外のなにものでもないだろうが！」

紅蓮との会話はかみ合わないまま一時間ほど続いたが、ある程度まとまってきたらそれを見計らって灯は立ち去ろうとした。すると去り際に紅蓮は言葉を掛けた。

「こんな世界にお前は…何を望む？」

そんな言葉を投げかけられても灯は迷うことはなかった。ただ自分の本心のままに答えていた。

「私以外の存在が幸せになることだ」

まるで自らは幸せになる資格はないということを決言しているかのようにだったが、灯は自己犠牲をすることで幸せなのだということも理解できた。だから紅蓮はお前らしい考え方だとそれを否定することなく認めていたのだ。

「また訪ねて来いよ。そして今度は美味しい酒でも持ってこい」

「分かったよ」

そのまま見晴らしの良い山奥から麓の村まで数時間掛けて降り立つと、数本しか来ない各駅停車の電車を待っていた。

季節はすっかり冬である。

ちらつく雪はどんどん大きな粒へと姿を変えて降り積もる。

ホームには灯一人しかいなかった。煙草を取り出すと白い息と共に吐き出し一時の休息を味わっていた。あの事件に関係した人間の所全てを回り終わり少しほっとしていたのだろう。何故ならこの数ヶ月は事件の後処理ばかりで大忙しだったからろくに家にも帰れていなかった。

遠くから電車の近づく音が聞こえて、灯はようやく家に帰れると思いつつ煙草をもみ消した。我が子の顔を思い浮かべつつ、二両編成の古い電車に乗り込もうとした。

「さあ…帰るか」

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8438i/>

赤き殲滅者

2010年10月9日06時50分発行